THE CENTRAL REVIEW

乞高評

中央公論

第廿一年 第十二號

(第二百三十號)

新春に於ける本誌の

大活躍を

見よ！

見よ！

中央公論

新年號

萬象將に向ひて蘇生せらんとする時、本誌は大々的刷新を加へて春風と共に清新なる天地に入らんとす。

「三百號」に「陽春號」に將た「秋期大附錄號」に、常與隆々として逓りに揚れる本誌は「新年號」よりして更に又、大に紙數を増加し、各種の改良を謀ると共に一層門戶を寛開し、材料の精選と趣味の向上に勉めんと欲す。今「新年號」內容の一部を洩せば左の如し。

公論

金子筑水　　小河滋次郎

建部遯吾　　桑田熊藏

竹越與三郎　　松本文三郎

小說

國木田獨步　　德田秋聲

小栗風葉　　生田葵山

說苑

內田魯庵　　增田藤之助

相田頂雄　　畔柳芥舟

佐々醒雪　　本田文雄

其他海外新思潮一斑〔illegible〕思想界の問題を收め、海內思潮に於ける〔illegible〕の學説を紹介、

批評〔illegible〕人大に手腕を振ひ、以て〔illegible〕

らるゝ〔illegible〕

但し其他の〔illegible〕本誌末に於ける〔illegible〕

中央公論第二十一年第十二號目次

▲青春は完結せり!!●

小栗風葉氏著

梶田半古氏著

（四六判佛蘭西式美裝）



春の巻（三版）
夏の巻（三版）
秋の巻（新刊）

實價各金八十錢
郵稅各金拾錢

汀に近き瀨音の咽ぶが如き外には滿江寂として、荒涼たる夜天の霜、地上の月、此情此景、あゝ、何時の世にか忘られ候ふべき。水に濡れ月に光りて白無垢氷の如く、純なる處女の聖なる死を裝へばか、皎として人界のものとも覺えず候。面容は稍變りたれ、石膏の如き其死顏を打戍れば死者の生前の血は、今や小生の血管を熱湯の如く傳はつて、暗き冷き小生の墳墓の如き胸底に一味の靈火を點ぜらるゝを相覺え候。堅く閉ぢたる不言の其の唇に何をか語れるあゝ默して戀し、默して死す……

こは欽哉が書簡なり、繁死せしや、將たお房死せしか、而して欽哉が今後の運命は奈何？讀者は**傑作青春**の**大尾**を精讀せざるべからず。

發兌元（東京日本橋通四丁目 振替口座壹六壹七）春陽堂



第二十一年
第十二號
(二百十三號)

此の冬期議會の形勢を卜す

(一)

西伯利亞地方より吹來る西北の朔風と共に政治季節は來れり。第二十三期帝國議會は本月廿五日を以て召集せらるべし、中外の耳目は是より多く政治界に集中すべきか、乃ち此の議會の形勢を豫想して世上の參考に供する必ずしも無要ならじ、議會の形勢を卜するは内閣の安危を卜する所以にして、而して之を知るは、注意すべき我が帝國の施政を推斷する所以なれば也。

議會の形勢を視るものは、先づ内閣の安危如何を察せざる可らず、議會を左右すべき政黨が主として主義政策に由て進退せずして、政權の得失に其の全力を注ぎ、由て以て卷舒し開闔すると、我が國の現在政黨の特色なれば也、此の狀態は理に於て決して好もしからざるものなりと雖も、積勢の致す所未だ奈何ともすべからず、唯だ政權の得失を競爭する間、自然に國策を進行するの外はあらず。

(二)

我が政界の分野は、吾人の曾て詳敍したるが如く、政黨のみの占有に非ず、政黨の占有する所は、其の一半にして幾んど衆議院に止まる、貴族院は少くも政界分野の一半を領域とするが故に、政權を有するものは、單に衆議院に多數を占めざる可らざるに止まらず、又貴族院の同意をも得ざる可らず、此の點よりいへば、世俗の所謂薩閥派、即ち通稱して山縣系と爲すものこそ、最も有力者と做さゞるを得ず、彼れは政界を橫

斷して貴族院の多數を有するのみならず、又實に衆議院に於ても、幾んど四分の一の勢力を有すれば也、看よ彼の大同倶樂部は全く桂、大浦、清浦諸氏の配下に在りて、純然たる山縣系に屬するものに非ずや。

今先づ山縣系の動作を案ずるに、山縣侯は位勳共に高きが故に、再び責任の地位に立つべからず、其の從遊の士も亦侯をして晩節を全くせしむるがために、如何なる場合に遭遇するも再び侯を起すと莫かるべし、侯の後繼者として首相の資望ある桂伯は、重病の後未だ全く健康を復するに至らず、假令健康平生の如くなるも、未だ政權を有するの好機會には到達せず、ポーツマス條約に對する世俗の不平は未だ全く拂拭せらるるに至らざればなり、想ふに伯等前內閣の諸人は、論功行賞の時に當つて謙抑自から處して以て汎く世間の同情を湧起せしむると共に、又歲月の經過に由て、其の當局時代に最善の力を致したる眞相を世人に領得せしめ、然る後再び起つを最も智慮ありとすべし、ポーツマス談判の衝に當れる小村氏が、其の病體の輕からざるを意とせず、米國より歸來席未だ溫かなるに及ばず、極寒を冒して再び北京に至り、清廷と交渉したるが如き、全く一身を君國の犧牲としたるものにして、至誠惻々人を動かすに足る、此等の事相の漸く明白なるに至らば、人心の再び山縣系に趨くや期して俟つべし、況んや曾禰、大浦諸氏の清廉なる、また世人意料の外に出づるものあるをや。

山縣系今日の要は、謙抑自から下りて時機を俟つにあり、輕擧妄動を避くるにあり、

山縣系中奇變を喜ぶの士に乏しからざるべし、苟くも乘ずべきの機會あらば、脫兎を學ぶも可とすべく、而して政黨々派との離合の如き必らずしも拘泥するに足らずとすべし、然れども政友會とは其の自由黨以來屢々提携したる歷史あり、感情の自から相投合するものあるに止まらず、利害の點より打算するも、依然政友會と握手し往くを可とすべし、何者政友會は假令何等の評說あるに拘らず、衆議院に於ける大勢力にして之と結ぶは衆議院に多數を制する最良の方便なればな

り、進歩黨は辯論餘りあり統一足らず、動もすれば理に偏して動搖するの癖あり、政友會の屢々紛擾するも而かも或る手段を以て鎭撫し統御するの容易なるに如からざると素より言を俟たずとす。

且つ政友會の背後には伊藤侯あり、伊藤侯は必らずしも山縣系の好まざる處、寧ろ反撥の感情はあるも、而かも公然對敵するを妙とも爲す可らず、山縣、伊藤兩侯の關係素より然らざるを得ざるのみ、兩侯以外の元老等また必らずしも兩者をして公然相爭鬩せしめざるべし、況んや伊藤侯に代りて今現に政友會に主たる西園寺侯の智慮ある、能く山縣侯と善良なる關係を維持し、桂伯とも亦巧みに親密なる交情を醞釀しつゝあるをや、山縣系は此の冬期議會に於ても亦西園寺内閣を助くべく、此の内閣或る事情のため解くるに至つて當さに之に代るの態度を執るべし、乃ち大同俱樂部をして依然政友會と提携せしむべし、少くも善意の中立を守りて決して敵者の地位には立たざるべし、而して是れ山縣系に取て最も智慮ある所置也、斯くせば其の代つて内閣に立つ時、また政友會の援助を得るに便なれば也。

（三）

兒玉源太郎男の卒然たる逝去は、啻だ我が一偉材を失へるに止まらずして、また實に政界の形勢をして一層沈着ならしめたるものなり。

男は純然たる山縣系統の人にして、其資望材幹兩つながら首相たるに餘りあり、桂伯假令健康のため再起せざるも、男にして起たば、新内閣の成立必らずしも難からず、男の軍功と武名とは、能く一世の人心を吸引するに足れるのみならず、其の政黨操縦に妙を得たる、議會の如き自から意の欲するまゝなる可かりき、而して常に政權に渴せる山縣系の諸人が喜んで其の後援たるべきやまた素より論莫しとす。

斯く揣摩したるは進歩黨及び進歩黨に近き無所屬の策士等なりき、彼等久しく不遇の地位に懊惱して、前途局面の變化を欲すること甚だ急なるがため、男を擁して大に爲すあらんと計りたりき、彼等は男の下に

りて山縣系と握手し、大同倶樂部と提携して以て政友會を孤立せしめ、一擧して以て西園寺內閣を打倒し得べしと豫期したりき、想ふに後藤新平男の如き此の間に利用せらるゝ所あり、又利用せんとしたりしなるべし。

此の計畫が桂伯、淸浦、大浦、曾禰の諸氏に承認されしや否やは疑問也、否、當人の兒玉男に承認されたるや否やすらも疑問也、唯だ兒玉男が日露戰役に赫々たる功名を立てたる勢ひに由りて竟に內閣の首班となり。以て意のまゝに所謂戰後の經營を行はんとする野心の絕無ならざりしが如く想像せらるゝと、軍人の一部にもまた斯の如き計畫を歡迎すべき傾向ありしやに想像せらるゝのみ。

故に進步黨及び無所屬の策士等の此の計畫は決して愚かなるものにては非ざりき、然れども兒玉男の卒然たる逝去に由て此の計畫は頓挫したり、後藤男は暫らく南滿州鐵道の總裁に其の手を收め、策士等は今や幾んど何等の機會の捉ふべきなく、僅かに進步黨の改革を唱へ、新政黨創立を計るに過ぎず、而して此の計畫の頓挫に由て、我が政海に狂瀾の浮湧を免かれたるや否定す可らざる事實とす。

（四）

進步黨には今正さに改革論熾んなり、其の所謂改革なるものの何を意味するかは素より不明なるも、其の主張者は之を遂ぐるに非ずんば或は脫黨するも亦辭せずと稱す、然るも畢竟主義政見の異同のためには非ざるに似たり、是れ進步黨が動もすれば辯論に偏して統一を缺くと目せられて汎く信用せられざる所以ならずや。

進步黨が自由黨と聯合して明治三十一年に所謂憲政黨內閣なるものを組織し、僅かに五ヶ月間政權を握れる以來、十年苦境に呻吟して浮ぶと能はず、時に桂內閣に欵を通ぜんとして果さず、半上半下懸ひべき境遇に立つも、而かも甚だしく蹉跌せず、苦節を堅守して今日に至れると頗ぶる偉とすべき有り、今や一部の徒政權に渴するがため、內に紛擾を生じて自から其の勢

力を弱めんと欲するは何ぞや、吾人は實に之を惜む。

進歩黨從來の弊は其の主義政見の把持に重きを置かずして、單に政府反對黨たるがために辯論攻撃を主とするに在り、近く前議會に例證すれば、鐵道國有問題に對する態度即ち其れなり、夫れ鐵道國有は政治上に於ける好個の大問題にして、而して進歩黨領袖中夙くより之を主張して、其の著書を公刊したることすらあり、然るに政府反對黨たるがため國有案を防阻せんとして極力攻撃して、却つて反對派の一首領に之を許かるゝに至りて、天下の嗤笑と識者の不信用とを招けると多かりしに非ずや、斯の如きは操守ある大政黨として避けざる可らず、政黨の議會に於ける賛否は、其の主義政見の異同に基かざる可らずして、異同の標準は素より國家の利弊得失に在り、政府黨たると然らざるとには非ざれば也。

且つ進歩黨は此がため、往々にして山縣系にも政友會にも惡感を買へるの形跡なくんばあらず、素より豫期する所に非ずして、意外の結果に外ならざるも、其の不利益たるや言ふべからず。

進歩黨の改革派中には、或は此等の情勢に慊然たるもの少からざるべし、殊に總理大隈伯の如き、意氣豪壯にして苦境に在るも屈する處なく、政治以外八面に應酬して曾て其の地位を降さず、實に一代の偉人たるに餘りあるも、辯論縱横に過ぎて往々輕擧に流れ、其の率ゆる所の黨員をして不本意ながら之に狂從するの不快を飽喫せしむることあり、時に政治問題の起らんとするや、伯が遲疑する所なく新聞紙又は演説に其の可否を斷言して毫も酌量の餘地を存せざるが如きは、新鮮なる識材あるものゝ聞くに堪へざる處なるも、唯だ伯の品位と黨の體面とを重んずるがため、强ひて己れを殺して之に屈從するのみ、而かも大局より視て其の黨の利益ならざるに於て竟に默止す可らざるものもあらん、是れ亦改革論の生ずる原因なるべし、然り、總ての原因には非ざるも、少くも有力なる一原因なるべし、伯たるもの悉く自個獨斷の主張を以て黨員を率ゆるの難くして且つ黨に不利なるを悟らば、當さに態度

を一變して、努めて衆智を採り衆議を酌むを要とすべし、伊藤侯は伯と同じく或る點に於て辯論の雄なるも、而かも問題毎に明白に自家の意見を語らず、假令語るも、論點を多岐にして獨斷せず、曾て之を伸縮す可き餘裕を存せざるが如きとあらず、而して侯自からは責任ある政事家の態度として之を當然なりと爲す。

且つ進歩黨のためを圖るに、今の內閣は、假令山縣系の援助を有すと雖も、假令政黨內閣に非ざると勿論なりと雖も、其の原氏松田氏を閣臣とするに於て幾分か政黨內閣に近きものたるのみならず、其の色彩も政見も寧ろ多く進歩黨に近似す、故に漸を以て、政黨內閣の發達を助成するの志あり、力めて憲政を進歩せしむるの心あらば、今の內閣が甚だしき秕政なき限り、甚だしき非立憲の措置なき限り、寧ろ輔けて以て其の善を成さしむるの態度に出づるを良しとす、進歩黨苟くも此の雅量坦懷あらば、假令全然政友會と大同倶樂部との提携を絕つとを得ざるも、亦他年一日竟に感情疏通意志投合の好機なしとはす可らず、而して天下また進歩黨の大人的態度を多として信用を玆に繫ぐにも至る可し、

進歩黨員中（此の黨員のみに限らず）或は西園寺內閣現存するため、來るべき總選擧に多く政友會を利するとを氣支ふものあるに似たり、然れども政友會員の之がため增加すると多きも二三十人を超えざるべし、想へ、僅々二三十人の增減畢竟大勢に何の影響ありや之を得たる政友會も未だ衆議院にすら多數を占むる能はず、進歩黨之を失ふも亦自立し難きまでの少數とはならず、儼乎たる大政黨の面目は乃ち存す、抑も政權の有る處に趨る議員の如きは、本來堅確の操守なくして、單に權勢に媚附する種屬のみ、此の如き徒輩の二十人三十人、味方としても賴母しからず、敵とするも素より畏るゝに足らず、何ぞ其の增減趨舍に介意するの要あらんや。

（五）

熟ら今の政界を通覽するに、幄幕に在て運籌の妙を有するものはあり、宏論雄辯敵の氣勢を挫くに足るも

のはあり、若くは外交、若くは教育、若くは財政、若くは法律に特異の技能を有するものはあり、然れども是れ皆偏將裨才のみ、將に將たるものには非ず、能く國務大臣たるに足るも、竟に內閣の首班として大政を燮理し、人心を指導するには足らず、首相たるの器材は實に尠き也。

首相の資質は、中外の情勢を達觀し群雄を統御する材能を有するの外、尚ほ第一に至尊の御信任を要し、第二に貴族院に敬畏せらるゝ聲威を要し、第三に政黨を統御して其の信頼を得べき德望を要す、今の政事家中伊藤侯最も之に適し、山縣侯之に亞ぎ、桂伯更に之に亞ぎ、大隈伯また其の資格を有す。

山縣系は偉材に富めり、國務大臣として其の力量を識られたるもの少からずと雖も、首相の材に至ては、桂伯を除けば多くあらず、兒玉男曾て之ありしも忽ち逝去し、山本權兵衛男は材能餘りあるも羽翼未だ成らず、他の政黨中には、他年首相たるに足るものは有らんも、今直ちに大命を奉じて新內閣を組織し得べきものの幾んど有ること無し。

然るに政友會の總裁にして、現內閣の首班たる西園寺侯は、幼時至尊の御親友として最も宮中に信任せられ、勳位と人格との高きまた頗ぶる貴族院多數に推重せられ、且つ深く政友會員に心服せらるゝに止まらず、伊藤侯の推輓を受けて井上伯松方伯に善く、山縣侯桂伯等にも亦敬愛せられ、背後には乃ち三井三菱と雁行すべき住友家を控へて、財力も多く他に讓る所なし、此の點よりいへば侯は實に我が政界無二の寵兒にして洵に「天成の總理大臣」たり、幸ひに取て之に代るも、是れ以上の適任者は容易に見出すに難かるべし、吾人は此の點よりして其の內閣の輕々しく動かざることを揣摩し得、隨つて此の冬期議會の必らずしも難局ならざるべきを推知す。

衆議院に於ける政友會の立場より視るに、山縣系と進步黨と假りに提携すとするも、其の內閣に主たるべきは何人ぞ、桂伯の尙ほ俄かに起たざるの明白なる、想ふに大隈伯の外なかるべし、然れども淸浦、大浦、

曾禰の諸氏が快く大隈伯を推戴して大石、鳩山、犬養の諸氏と椅子を駢ぶるが如き、容易に事實として現出せざるべし、否彼等は寧ろ西園寺侯を戴きて政友會と提携するを悦ぶや必せり、進歩黨と山縣系と握手せざる限り、政界は未だ俄かに局面を一變するに至らじ、

　西園寺侯は洒落にして事物に拘泥するとなく、素より權勢に執着する人に非ず、前議會に於て鐵道國有の如き大問題を解決して着々之を實行し得たるに於て、旣に自から足れりとする所あるべし、自から好んで政權を棄てざるも、亦努めて之を主持せんともせざるべし、是れ實に侯に於て一の強味たり、而して此の冬期の議會に提出すべき四十年度の豫算の如き、所謂戰後の經營を立つるに於て相應の鹽梅を加へたらんも、素より增稅若くば起債を避けて、暫らく民力休養の計畫に出づるなるべし、其の竟に避く可らざる費目は之を剩餘金若くは他の臨時收入に俟つべく、或は之を以て四十年度限りの計畫にして、其の以後の情勢を商量せざる所謂其の日暮らしの姑息策なりと非難するものもあるべし、必らずしも失當の非難には非ざるも、今俄かに外債を起すの不利にして、而して戰後又俄かに增稅するの苛酷なるを思はゞ、殊に財政の擴張若くは縮少の輕々しく斷行すべからずして、今尙ほ戰時財政の結了以來幾許をも經ず、中外施設の多くは草創に屬するを思はゞ、內閣の爲す所未だ悉く難ず可らず、素より前途の形勢を適當に判知して、截然たる計畫を立つるの優されるは勿論なるも、今の時何人か之を能くせんや、現に進歩黨すら財政及び課稅の大方針を根本的に決定するがため大調査を爲すに決したるは、近く一ケ月內外の前に過ぎざるに視れば、內閣の四十年度計畫なるもの亦十分に之を諒とするに足る、思ふに西園寺侯の內閣は、其の最善の力を盡したりと自信すべく而して貴衆兩院の多數も亦竟に之を是認するに至るべし。

　之を外にして各省より提出すべき諸案の通過するもの、否決せらるゝもの、握潰さるゝもの例に依つて一ならざるべし、而かも竟に內閣の致命傷たるべきもの

はあらざらん。
故に吾人は第一西園寺侯其の人が首相に適材なるに見、第二其の内閣の計畫が假令大に稱揚するに足らざるも、未だ甚だしき缺點なく、且つ未だ純然たる政黨内閣には非ざるも、稍々之に近きものたるに見、第三山縣系が依然内閣を掩護すべく、萬々一然らずとするも少くも善意の中立を守りて暫らく機會の來るを窺ふべきを思ひ、第四進歩黨が所謂政局の發展を試みんとするも、適當なる提携者なく、又首相の適材なきがために、竟に爲すとなきに終るべきを思ひて、此の冬期の議會が頗ぶる平淡に終了すべきとを豫期せざる能はず、蓋し現在眼前の形勢より揣るに斯の如く觀察するの外なきのみ。

或は總選擧の明後年に迫れるより、議會の早く解散せんとを想像するものあり、若し形勢を驅て茲に至らしむるものあらば、是れ實に非凡の手腕あるもの也、而して情勢の變は意料の外に趨る也。

若し夫れ形勢を揣摩するの外、吾人に向て爲すべき希望如何と問ふものあらば、吾人は猶豫なく進歩黨の條に於て述べたる如く曰はん、今の内閣が比較的に政黨内閣に近き以上、甚だしく非立憲の措置なく、又太だしき秕政なき以上は、助けて以て善を成さしむべし、記せずや、我が日本國の中外に施設すべき重大なる問題甚だ多く、總て上下一致官民協力して之に當らざる可らざるものなるとを、現在の日本は眞實世界の日本なり、是れ空名に非ずして事實也、此の時に方つて豈好んで平地に波瀾を起し、區々政權の爭奪にのみ熱中す可けんや、洵に天下國家を思ひ、世界の形勢を鑑むる忠良溫厚の士は、素より然らざるを得ざるのみ、徐かに朔風の吹き來る西伯利亞方面を看よ、同時に滿韓方面を看よ、西伯利亞を透して歐洲列國を看よ。

死刑存置論

警保局長　古賀廉造

死刑の利害得失其存廢のことは刑法上重要の問題に屬

す而して學者の議論紛々擾々殆んど底止する所を知らずと雖ども死刑廢止說は近來大に其勢力を增加して一般の學說亦漸次廢止說に傾くの趣あり其廢止の方法に至りては議論皆同一に出でず或は死刑は刑法中より全く之を除去す可しと云ひ或は死刑は之を刑法に規定して只其執行を廢止す可しと云ひ或は其執行を廢止せずして單に之を停止す可しと云ふ今其廢止說の重なるものを掲げんに

第一說に曰く古來の經歷に徵するに何れの國と雖ども死刑の行はれざる所なし蓋し往昔に在ては屢々之を行ふの必要ありしや疑を容る可きなし然れども凡そ法律は國家の進步と共に變遷せざる可からざるものなれば往古野蠻時代に於て之を行ふを必要とせしものと雖ども方今の文明時代に於て死刑に代ふるに之れと同一の效力を生ず可き特別の刑罰を以てするを得るときは則ち必ず死刑を用ゐざる可からずと謂ふ可きに非らざるなり死刑は如何なる場合に於ても國家と相離る可からざるの關係を有するものに非らざるなりと

第二說に曰く若し死刑は正當且つ必要にして之れに代るの刑罰あらざるときは則ち之れを存する尙ほ可なり然れども死刑は果して正當且必要なるものなるや或曰く凡そ刑罰は國家に及ぼす危險の程度に相應せざる可からず今人を殺す者ありとせんに國家の危險之れより大なるはなし此危險を防遏せんが爲めに死刑を行ふ是れ罪罰相應するに非らずやと然れども人は其有する權利以上のものを以て之を他人に施すの權なし人の生命は之を克く奪ふ可しと雖ども之を與ふ可き者に非らず其與ふ可からざるものを奪ふは是れ人が自ら有せざる所の權利を行ふ者に非ずして何ぞや人自ら有せざる所の權利を行ふて而して尙ほ正當且つ必要なりと謂ふの理由果して何處に在るや若し人の生命を奪ふ者は我亦其生命を奪ふを得人の自由を失はしむるものは我亦其自由を失はしむるの權利を生ず可しと言はゞ誰れか復讎主義の再演を疑はざる者あらんや死刑の不正不當なること多辯を須ゐざるなりと

死刑廢止論の概要斯くの如し吾輩は論者の說に左袒す

る者に非らず聊か所信を述べて以て死刑の正當且必要なることを明にせんとす

我輩は今日一般の學說死刑廢止論に傾向するに拘はらず死刑の最も必要なることを信じて疑はざる者なり今立法上より觀察して之を論ぜんに凡そ死刑を科す可きものは國家に於て最も嫌惡す可き殘忍なる者及び貪慾なる者に限るなり前者は即ち慈愛心を缺ぐ後者は廉耻心を缺ぐ者なり廉耻心の欠亡する者は財產に對する罪を犯すこと多く慈愛心を缺ぐ者は身體に對する罪を犯すこと多し凡そ此等の者は國家の力に因て以て保護せんと欲する身體財產を擧げて之を烏有に歸せしめんとし國家の大本を撼搖する者なれば其危險や實に豫知す可からざるものあり而して殘忍酷薄の性を有する者一旦其心を決するや千思萬考只其罪の成らざらんことを之れ恐るゝが故に一旦刑せらるゝとあるも決して其心を飜す者にあらず其惡害を防ぐの方法只死刑あるのみ」

論者曰く此種の犯人と雖ども之れに科するに無期刑を以てし終身社會に出ることを得ざらしめば爾後國家に對して危害を加へんと欲するも到底能くす可きの業に非らざるなりと若し夫れ無期刑の犯人は遂に社會に現出するの機會なしとせば論者の言果して是なり然れども無期刑の犯人が社會に現出するの機會甚だ多きことを知らば則ち論者と雖ども必ず死刑の必要を認むるに至らん無期刑の犯人は或は事實上自由を回復するの機會を有す即ち破獄の方法是なり又或は法律上自由を得るの道あり即ち大赦特赦の恩命是なり此二方法は今日迄屢々猛惡の犯人を逸せしめて毒を國家に流がしたるの例實に千百にして足らざるなり試に一歩を讓り破獄恩赦の事實なしとするも或は獄吏を殺し或は同囚を害して獄中の安寧だも尙ほ之を保つ可からざらんとす夫れ斯の如くにして而して無期刑は能く國家の危害を防遏するに足る者なりとなす乎又之を實際に徵するも犯人の最も恐るゝ所の者は實に死刑に在り故に犯人を警戒する所のものは死刑に如くものなし現に無期刑以下の犯人は極めて多くして而して死刑の犯人稀少なるを見るも亦其確證と謂つ可きなり且つ死刑に代ふるに無

期刑を以てす可しと爲すは是れ其犯人をして終身此社會に出づる無らしめんことを期するものなり社會の人に非らざる者の生命を保存して果して何の利益かあるや

死刑の大要に付ては我輩曾て演説を試みしことあり今其速記全部を掲げて以て參考の資に供せんとす

孰れの國に於きましても古より國家の制裁として刑罰の設けなき處は御座りません、其刑罰の中には大抵死刑の律を設けあるやうに記憶致して居る、古は凡ての國に於て只刑罰は之を嚴酷にすれば愈々其效力が多いと妄信して居つた者と見えて成可く罰を重くすると云ふ方法を執つて居つたのであります、從つて死刑に就ても一の生命を奪ふ刑罰に過ぎざるに之を數種に分つた者である、即ち殺すに至るまでの方法が多かつたのである、歐羅巴の死刑に於ても又日本の死刑に於ても同樣である例へば歐羅巴の死刑の如き殺す前に手足を拔いて取るとか若くは鼻か耳かを殺ぐとか斯くの如き慘酷なる行爲を行つた後に始めて生命を斷つのであります、又日本の如きは遠く昔に溯らずとも近く德川の百箇條の刑罰を見ても死刑は是を九種類に分つてあつた、今二三の例を擧ぐれば磔刑、火刑、鋸刑、獄門、斬罪とか云ふやうな種類で而して九つの區別があつたやうであつた、皆其目的は等しく死に致す刑罰で犯罪の程度に於て異る所があるに依て其犯罪の最も重い者は死刑の最も慘酷なる方法を用ゐ犯罪の程度の輕き者には死刑の最も寬なるものを用ゆると云ふ主義に出てたものであると考へる然るに刑罰は文明の進化と共に漸次寬大に趣きまして歐羅巴に就て云へば佛蘭西革命前後より漸次慘酷なる刑罰の非なることを悟つて死刑も亦數種の區別を立てぬと云ふ方に移り來たつたのであります、けれども當時何人も未だ死刑の全廢に付て之れが議論を戰はしめたる者はなかつたのである御承知の通りに佛蘭西革命の前年に於きまして數多の哲學者が蜂起して頻に哲學の理に由て當時の政治を非難したことがある此哲學者の人々は又刑罰の問題にも議論を戰はしめたることがあつた、佛蘭西の有名なるルー

ソーと云ふやうな人は死刑の必要を論じて居る之に反して伊太利のベッカリャーと云ふ人は其時に於て初めて死刑の不必要を論じ死刑は速かに廢す可すべきものであると云ふ議論を發表したのである、是は一時世人を驚かした、併し當時の時勢、ベッカリャーと雖も死刑の全部を廢すると云ふ說ではなかつた重大なる若くは非常なる犯罪人あるに當ては死刑も亦止を得ず之を科せなければならぬものであると云ふ論であつたベッカリャーが一度死刑の廢止を唱て以來此人の爲に誘發せられて爾來法律學者が又大いに死刑の問題に就て議論を戰はしむる機會を作つたのである夫から甲論じ乙駁し歐羅巴に死刑といふものは廢す可きものか若くは存す可きものかと云ふ議論が非常に旺んになつた、是れ今日と雖も尙ほ續いて死刑の問題に就ては世人が囂々する原因であらうと思ふ、今沿革上歐羅巴諸國の刑法の大勢を見まするに或部分の國は死刑を廢し若くは廢せんとする傾を以て居る所もあり又或部分の國は死刑を維持し又死刑の必要を固く信じて居る國もある、

死刑を存して居る國を擧げて見ますれば其數は寧ろ死刑を廢して居る國よりも餘程多いと思ふ、大いなる國としては佛蘭西、英吉利、西班牙、露西亞之は死刑を勵行して居る國である、それから白耳義、丁抹、那威、芬蘭、獨逸是等は皆死刑を維持して居る國である死刑を廢して居る國は大國では伊太利、和蘭、ルーメニャ、瑞士聯邦それから北亞米利加の二三州に於て之を廢して居るミシガン州と夫れからもう一つてあります、世界の大勢に就て之を比較して見るに國の數から云へば死刑を廢して居る國は少なくして死刑を維持して居る國が多い佛蘭西では革命以前に於ては刑罰が多少慘酷であつた殊に監獄の制度が不完全であると云ふので國民皆當時の裁判に對して非常なる不平を抱いて居つたものである、革命の少し前に路易十六世と云ふ人は仁君であつたと見えて刑罰の慘酷、訴訟手續の不備、監獄の不完全是は何うしても改良しなければ佛蘭西を治むることが出來ないと云ふことを悟つて今日で所謂刑法と刑事訴訟法、裁判所構成法是等の改正を企てゝ

つたものである、然るに最早路易の仁政を施す時期が遲かつたので佛蘭西には革命の火の手が擧つたのである、其革命の火の手の擧つた第一着の事業は何であるか諸君も御承知の通りにバスチーユと云ふ所ろにある監獄の破壞である、革命の第一着にバスチーユの監獄を破壞すると云ふことは今日から想像して見れば政治家の最も怪む所である政府に反對する人民であるならば何故に初めから政府に取つて掛らんのであるか何故に監獄を破壞したのであるか夫れが即ち當時の民心が此刑罰此監獄に對して不平の充滿して居つたと云ふことを證するに足るのである、斯くの如く革命以前に於ては佛蘭西の刑罰に對して佛蘭西人民は大不平を抱ひて革命の第一着手としてバスチーユの監獄を破壞すると云ふ如き有樣であつたのであるから革命の事業漸次進歩するに從つては忽ちにして法律の改正に着手したのである其法律の中でも刑法の改正を先にして而して革命第四年であつたか刑法を改正して死刑を廢して仕舞つたけれども、不幸にして此廢止は未だ實行するに至らずして六年經過したのである、革命曆と云ふものが別に出來て居るが革命第十年に至つて再び又舊に復つて死刑の再興を計つて再び死刑を設けたのである、夫からナポレオンが佛蘭西帝國を建設したる後凡ての法典の編纂に從事して千八百十年に刑法が出來た、其時死刑を規定したのが今日佛蘭西に行はれて居る現行法典である以來佛蘭西では學說若くは政治問題としては死刑の廢止に就て議論を戰はしめないことはないのである年々歲々死刑に就ては大分議論が多い殊に度々佛蘭西の下議院に向つて死刑の廢止案を提出した者もある半ばは效を奏せんとして破れたものもあるけれども何分にも今迄通過することが出來ずして佛蘭西は一千八百十年の死刑を今日まで繼續して之を行ふて居るのであります、序に一言して置きますが佛蘭西の死刑の執行は日本とは丸で違ふ、是れは公衆に示す方法である、死刑の執行臺があつて其臺の上に受刑者を載せて之を公衆に示し而して其臺の上に於て斧を以て首を刎ねると云ふ非常に慘酷なる方法、私が遊歷中に伊太利

人てあるが二名一遍に殺されたことがあつたが少し時が遅れた爲め見損なつたのてある其執行方法に就ても多少非難がある好し死刑を廢することが出來なくてもせめては執行方法を今少し變革して慘酷なる有樣を止めるやうにしたら宜からうと云ふ議論は隨分旺んてありります何分にも法律にはならない是に反して伊太利に於ては丁度之も革命以前のことてある千七百六十五年頃てあります、伊太利の南部にトスカーヌと云ふ餘り大くない國がある其國に封ぜられたるレオポールと云ふ君主が仁君てあつたと見えまして其トスカーヌに封ぜられたる際頻に當時行はれて居る刑罰の慘酷に過ぎることを慨いて之を改正するに力を致したのてある、獨り伊太利地方の刑罰ばかり其當時慘酷と云ふ譯てはない歐羅巴全國皆然り、然るに伊太利の南部から初めて刑罰の改正をしやうと云ふ事業に掛つたのてある、勿論其案に依れば死刑を廢止しやうと云ふのが主たる目的てあるけれども慘酷の刑罰を行つて居る最中に突然と死刑を廢止すると云ふは餘り寛大に過ぎるのてある、如何なる弊害を生ずるかも知れんのてある、茲に於てレオポールは暫く其國に於て死刑の廢止より生ずる結果の試驗をして見たら宜からうと云ふので丁度二十年間死刑の停止をしたのてす千七百八十五年の頃まて死刑の執行を止めたことがある、然るに今日までは慘酷なる刑罰を勵行して居つた國に於て二十年間死刑の執行を止めたけれども別に是より生ずる弊害と云ふものがなかつた、死刑の執行が止んだからと云ふて恐る可き猛惡なる犯罪人が出たと云ふ譯てもない又別段に殺人罪が増加したと云ふ次第てもない成蹟は極て好かつたのてあります、そこて斷然千七百八十六年に至つてトスカーヌに於ては斷然死刑を設けるの不必要と云ふことを認めて之を廢して仕舞つたのてある、然るに其後四年を經て佛國大革命起り伊太利も大に其影響を蒙むり再び死刑を設くるの止むを得ざるに至つた、然し革命後二十五年許り此死刑と云ふものは殆どトスカーヌの人民には忘れられた如くになつて居つた不幸にして千八百十六年に至り一人の有名なる浮浪者があつ

て何うしても之を殺さなければならぬと云ふ必要が生じたので遂に死刑の宣告を爲しました然るにトスカーヌ地方に於て死刑の執行を心得て居る者がないので羅馬より死刑執行を心得居る者一人を傭入れて來て漸く執行したのである其後千八百三十一年二人の强盗を死刑に處したが爾來國民の輿望は之を行ふことを好まず死刑の宣告を爲すも大抵特赦を行ふて實際死刑の執行を爲すことはなかつたのである千八百四十七年遂に再び死刑を廢止するに至りました然るに其明年伊太利に革命ありて又再び死刑を設くるの必要を生じたるも千八百五十九年に至る迄一度も其執行を見なかつたのであるガリバルヂー伊太利聯邦を一致して後再び死刑廢止の論發生し遂に千八百八十七年か九年に伊太利全國に於て死刑は全廢すると云ふ法律が作られて了つた、それで今日は伊太利に於ては死刑と云ふことは全くないと云ふことになつて仕舞つたのである、和蘭は千八百八十八年の法律で死刑を廢止したのです、併し和蘭は小さい國であるから假令之を全廢しても歐羅巴の大國の試驗に供するには足りないもので御座いますが今度歐羅巴の大國を以て任ずる伊太利に於て死刑を廢したと云ふ結果は今後凡ての大國に向つても果して死刑の必要があるや否やと云ふ問題を決せしむるの材料に供することが出來やうと思はれる但し伊太利に於きまして法律上死刑を廢したと云ふても伊太利の凡ての刑法學者が皆其説を賛同して居ると云ふ譯ではない、中には却て死刑の必要を論じて居る者もある今日の世界ては古よりも尚ほ死刑の必要があると云ふ議論を盛んに唱へて居る人もある、ロンブロソーとか、ガルハローとか云ふ學者は皆其派である今言つた通りに歐羅巴全體を通觀して大勢を鑑みれば死刑を廢して居る國もあり死刑の行はれて居る國もある、死刑の行はれて居る國は今日迄死刑の必要を認め又慣習上必要であるかの如くになつて居るのであるから是等の國は死刑の必要ありと云ふことは論はないのである、夫れて今度俄かに死刑を廢した和蘭、伊太利に於て是から如何なる結果を生ずるかと云ふとを卜はなければならぬ必要が

ありますから實は此死刑の廢止に就ては此二三國の成蹟を見た上始めて死刑を廢した方が宜いか若くは再び之を立てなければならぬか何れか其結果を知ることが出來やうと思ふ、古よりの經過に依て見ると刑罰は文明の進化と共に漸次に寬大に趣いて來ると云ふことは爭はれぬ事實のやうである或はもう少し後世になつたならば今日死刑の論などをして居つた慘酷な野蠻人があつたと惡口する人も出來るやうになるだらうと思ふ、丁度今から昔を顧れば裁判の手續事に拷問は必要てあると感じて居つたと同じ事である、當時拷問を廢すると云ふことは裁判上の激變と思つて居つたのです、併し今日に至つて見れば拷問は慘酷無類の訴訟手續てあると云ふことを感じたのてす、夫れと同じことて萬一死刑廢止の成蹟が好くて各國皆死刑を廢すると云ふ曉に至つて最早死刑に就て云々する者は餘程馬鹿な人情知らずの人間てあつたと斯う云ふ想像をする時勢もあるてせう、併しそれは今日に於ては分らない。」斯くの如く沿革上に就ては二つに別れて居る次第てあつて何方が宜いか何方が惡いか之を判斷することは出來んのてある、今試みに理論に徵し又實際に照らして我國に於ける死刑の存廢を決するには如何なる議論があるか是れは即ち私の問題の主眼てある、先づ理論上から死刑の當否を一言しなければならぬ、理論上より觀察すれば死刑は正當なる死罰の一つであると斷言して憚る所はない、私の所謂正當と云ふのは唯道德上の理論を根據とするものに非ずして此國の必要を根據として之を論ずるのてある、即ち我國に於て死刑の必要なる限りは死刑が正當なる刑罰てあると斯う云ふのてある、凡そ人相集つて一國を成した場合に於ては必ず此團體の生存を計らなければならぬのてある、若し團體が破滅しても之を顧みるに及ばぬと云ふならば初めから團體を組織する必要もない、殊に又人間は團體の力に依るに非ざれば一個人として容易に生活の目的を達することが出來ないと云ふ性質を具へて居る者てある、虎の如きは牙を以て防衛の具と爲すことが出來る、馬の如きは足を以て防衛の具と爲すことも出來

る、毒蟲は毒を以て防衛の具と爲し、鳥は嘴を以て防衛の具と爲すことが出來る、總ての動物を擧げて之を數へ來たつたならば何に一つとして自ら自分の身體を防衛する具を持たぬものはない、獨り此人間に至つては手足耳目鼻口ありと雖も何に一つとして他の害物に對して自分の身體を防衛するに至る可きの器械を備へて居るものはない、現に此外部の空氣に對してすら自ら防衛することは出來ない、論より證據裸體にして此寒空に曝して置けば忽ち死んで仕舞ふ、馬に蹴られても直に死んで仕舞ふ虎と相撲を取つても直に咬殺されて仕舞ふ或は犬と相撲を取つても負けて了ふかも知れん此位弱い動物はない一つとして防衛の道具の役に立つ物がないのである、斯の如く人間と云ふ者は外部上には防衛の具のない代りに内部に於て一つの智識を備へて居つて之に依て以て防衛の具を造らうと云ふのであるから差引勘定が出來て居る、其智惠を運用すれば相當の防衛は出來る夫れて人類相集つて一の團體を造つたのである、此團體の力に依るに非ずんば完全の防衛は出來んのである、集つて團體を造れば此人類位强い者はないのである、殆ど動物の最上に立つて居るのは此團體の力である、而して是より以上の力を備ふる物はないに依つて始めて萬物の靈長たることが出來るけれども此團體なるものも決して安全なるものでないのである、屢々外部の刺擊を受けるのである、其刺擊と云ふのは人類の生存競爭上是れ又止を得んのである抑々人間が團體を爲すと云ふのは前にも言ふ如く自分自ら生存する爲である、否我も生存し人も生存する爲であるけれども團體と團體と生存競爭の結果其身が生存する能はず其社會が生存することが出來んと云ふ場合には勢ひ他を侵さなければならぬと云ふのは自然の理である、吾が團體に對して他より攻擊する者もあり又内から起つて此團體を打壞さうとする者もあるのである、是は皆生存競爭の結果である、そこで外部の團體から攻擊する者があつた時は外部の團體を防ぐ道具がなければならぬ、又内部から攻擊する者があつたならば内部の攻擊に對して防禦の道がなければはならぬの

である、外部の攻撃に對しては兵力と云ふものがある、而して内部から起る侵害に對しては何を以て之を防禦するか之が即ち刑罰權の依て起る原因であつて刑罰を以て防衛しなければならぬのである、さうすれば刑罰なるものは我々の生存を謀るに我々の團體を維持するに最も必要なる防禦方法である、既に此刑罰と云ふものは人生の生活上必要なるもので生きて居るに缺ぐ可からざる要具であつて之より外に防衛の具がないものであると云ふならば苟も刑罰と名を付け得可きものに一として不正なるものがあるか、又一として不必要なるものがあるか、兵馬の權を備へ外部の敵を防衛すると云ふのも決して兵馬の權を弄ぶのではない、若し此兵馬の權を使用するに非ずんば自分が亡ひなければならぬ、兵馬の權を以て敵を防ぐと云ふ時には人の死んだり活きたりすると云ふことは戰ひの結果已を得んことである何人も之を怪まぬてはないか、然らば内部に於て此内部の治安を妨害する者ある場合に於て國家の刑罰權を以て其妨害者の死生に關する刑罰を用ゐて之を防衛すると云ふのは果して何の不正かある、元來刑罰は國家の生存を維持するの防禦法である、之れ無くんば此國家の平和を保つことが出來ないのである、其平和を保つに必要なる要具として之を設けたものであるとすれば死刑であれ自由刑であれ財産刑であれ之は唯其犯罪の程度に應じて輕重を定めたと云ふ許りであつて權利の執行方法に過ぎないのである既に權利自體が正當であると云ふならば其權利の出づる所の執行法なる罰金刑も必要である、自由刑も必要である、然らば一歩進んだ死刑も亦必要にして而して毫も不必要とすると云ふ道理はない、此死刑を以てするに非ざれば此國を維持することが出來ない、死刑に依つて始めて此國を維持することが出來ると云ふ問題が起つた時分に死刑なくしてどうして此國を維持することが出來るか、

扨て又反對論者が此死刑に對して非難を試みる口實がある、其口實に因れば死刑と云ふものは分割することが出來ないものである、唯一つの命を取るので何人に

對しても同じやうな刑罰を行はなければならぬ、皆命を取つて仕舞ふ、然るに凡ての犯罪は皆情狀に於て程度がある、恕す可き者もあれば恕す可からざる者もある、然るに恕す可き犯罪も恕す可からざる犯罪も同じ死刑に當ると云ふ場合に同一に死刑を執行すると云ふのは刑罰の權衡を失するものである、抑々死刑は情狀の恕す可き者に對しては半分の命を取り恕す可からざる者に對しては全部の命を取ると云ふことは出來んのであるから之は無論廢す可きものであると主張するのである然れども刑罰の性質皆然りと云はなければならぬ、自由刑であつても同じことである、自由は一つしかない此一つの自由を奪ふと云ふ、勿論刑期の長短があつて短く奪ふ場合と長く奪ふ場合の區別こそあれ自由其者を奪ふことは同一である、半分の自由を奪ひ三分一の自由を奪ふと云ふことは孰れの國に於ても規定したことがあるか、死刑の分つ可からざると同樣自由亦分つ可からざるものである、唯單に刑期の長短に依て長く自由を失はしむると短く自由を失はしむるとの區別があるので僅に權衡を得たるがごとき感ありと雖も自由其者を奪ふに至つては同一である、故に死刑は分割す可からざるが故に之を廢止しなければならぬと云ふ議論であるならば自由刑も亦分つ可からざるものであるが故に之を廢止しなければならぬと言はなければならぬ、此論は幼稚の論で少しも採るに足らぬのである、夫から次に死刑は一度之を行へば回復する能はざるものである、萬一裁判所が誤つて死刑の宣告をなし後に至つて無辜の人を殺したと云ふことを知つたならば國家は何の面目あつて此無辜の人に見ゆることが出來るか、凡ての刑罰は假令過つことがあつても之を回復することが出來るけれども命を奪つた者は再び之れを活かすことが出來ない、斯くの如く死刑は回復の出來ない刑罰なるが故に保存す可きものでないと云ふ此議論も亦間違つた議論である、若し死刑が回復することが出來ない裁判所が誤判をする恐れがあると云ふならば何故に此日本の人民が病に罹つたとき醫者に生命を托するか、醫者に生命を托した以上は醫者の勝手に

此病の診斷をするのである、此醫者の爲に過つて死ぬ人間が幾らあるか此醫者の誤診の爲に病氣を重くした者が幾らあるか、裁判所が誤つて死刑の宣告を爲し後ちに無辜の人たる事を知るも回復することが出來んから死刑を廢止しなければならぬと云ふならば病を託せられた醫者が誤つて人を殺し病を重くする者が澤山あると云ふ理由を以て醫者も悉皆廢して仕舞はなければならぬ道理である病に罹つた時に醫者に罹るのは頗る危險千萬である、藥劑師も亦然り藥劑師は如何なる事をして藥の調合をするか、分量を間違え品物を間違えることなきか、其藥の調合を誤つた爲めに死に至る者も澤山あるであらう、殊に劇藥の「モルヒネ」阿片劑の如きは少し間違があつても忽ち命を無くして了うてはないか、死刑廢止論者の論法を擴張すれば藥劑師も亦廢止しなければならぬ道理である、何故に死刑廢止を主張しながら醫師を廢し藥劑師を廢すると云ふことを言はんのであるか此位間違つた議論はないのである夫から又死刑は少しも威嚇の效がない。昔の人間が死刑を設けたのは一人を刑して以て將來罪を犯さんとする者を嚇かして罪を犯す能はざるやうに懲らすにありと信じて居つた然れども死刑の行はれて居る國は犯罪人が少ないと云ふ譯ではない、死刑の無い國に犯罪人が澤山あると云ふ譯でもない、又死刑に當る位の罪を犯す者は死刑を恐れて之を止めると云ふ譯でもない、故に此死刑と云ふものは罪を犯す人間の爲に威嚇の效を奏する能はざる刑罰なれば寧ろ之を廢した方が宜くはないか是も亦死刑廢止論者の主張する一理由である、衆議院に提出せられ居る死刑廢止案の理由の一つに書いてあるやうに思ふ、死刑は威嚇の爲めに之を行ひ威嚇の爲めに之を規定したものであると信じて居つた時代もあつたであらう、現在今日其議論を主張して居る者もある現に佛蘭西が死刑の執行をして鮮血の流るゝ死を公衆に示すと云ふのは是は威嚇の趣意を以て居るものと思はれる、けれども死刑は威嚇の爲めに之を規定したものであると云ふ議論は餘程間違つた議論である、則ち死刑の本旨を知らぬのである、死刑と云

ふものは最前言た如くに威嚇の爲めでもなんでもない威嚇の爲に死刑を規定し死刑を置くものではない、死刑は防衛の具である、死刑を行はなければ我々の生命を保存することが出來ない、此國家の團體を維持することが出來ない、故に生命を維持し團體を維持しやうと云ふ必要からして始めて此死刑と云ふものを科するのである、試みに近き例を取つても直ぐ分かる事である、千葉、水戸、埼玉近傍に徘徊して居つた有名なる稻妻强盜と云ふ者があつたらう、彼は北海道の集治監に終身懲役になつて居つた人間である、獄を脱すること五回にして而して人を殺すことと其數を知らない、彼が裁判所に自白し若しくは彼の所爲と認むるもの十七か十八の殺人罪がある、其他幾ら人を殺したか分らぬ位である、當時此の稻妻强盜の未だ審理を終らぬ前死刑を執行しない前千葉、水戸、埼玉の地方に於ては又再び稻妻强盜が逃出して來て彼の近傍の地方を惱ましはしないか、地方に害を加へに來はしまいかと人心恟々として一時も安んじない、所が一旦死刑の執行を受けたと云ふことを聽くに及んで彼の地方の人民は祝盃を擧げて祝ひをなし始めて安堵したと云ふ、死刑と云ふものは決して威嚇の爲めではない、此死刑に處せられて始めて稻妻强盜の跟跡が絕え、跟跡が絕えたればこそ水戸地方、千葉地方、埼玉地方の民心が始めて安堵したのである、枕を高くして眠ることが出來たのである、若し此死刑の執行がなかりせば如何、日本に假りに死刑がなかつたと假定せよ、稻妻强盜の如き惡黨があると雖も之を殺すことが出來ん之を北海道の如き嚴重なる監獄に送つてすら既に五回も遁げ去りたるに非ずや、又送つたら又遁げるであらう、又送つたら又遁げるであらう、何遍送つても何遍送つても遁げるであらう、左すれば各地方の人民が生命を安全に保つことが出來ん、國家の團體を安全に維持するとが出來ん、これでも尙ほ死刑の必要が無いと云ふのであるか、凡て法律を制定するとき唯空理一遍皮想の見解を以て法律を制定するものではない、凡ての法律には必ず利も害もあることなれば其利害と此法律が無い場合に國家

に發生する所の利害とを比較して以て法律の害が大なる時には此法律は止む可し廢す可し併しながら此法律の害が小なる時には此法律に依て以て國家の害を除く可し此死刑の如きも誰か人を憎んで之を殺すものぞ、之を定めて置かなければ是より以上の害を行ふ者があるに因て之を規定して置くのである、其死刑に處する人間の命よりも今一層尊ばなければならぬ良民の生命を保存しやうと云ふ爲に此死刑を設けて置くのである、人の數から論じても日本では存外犯罪人の數は多きに拘らず死刑の執行は少ない、私の記憶する所を擧げて見ると明治二十九年が最も死刑の執行の多かりし時にて全國に於て百六十四人死刑の執行をしたのです、明治廿年には八十五人是れが第二、それから二十五年二十六年には五十五人或は六十人と云ふやうな數であつて其數は平均することが出來ませんが大抵百人以下の數に止まつて居る、併しながら百人以下と雖も現に毎年々々死刑の執行をして居ると云ふ事實は疑ひない、三十二年は最も少ない年、それでも三十六名執行して居るではないか、伊太利の如き百年か八十年の間に僅か一人死刑の執行をしたかしないと云ふ國に於ては之は勿論死刑を設ける必要はない、縱しや設けても死刑を行ふ場合がない、之に反して日本の如きは死刑執行の數に於てこそ多少增減があるけれども二十年から本年までの統計を見ても一年として三十人以上の人を殺さぬ年はない、夫れでも尙ほ日本に於ては死刑の必要はないと云ふか、我國に於て死刑の執行をした人間の數の內でも多數を占めて居るものは何んであるかと云へば謀殺にあらずして强盜殺人である、日本の最も恐る可き犯罪は强盜殺人である或る論者は死刑は之を廢止するも若し監獄の制度が宜しきを得て而して終身監獄に繫ゐて世に出ださなかつたならば國家に對して何の害をも爲すまい左れば人の命を失はしむる必要はないぢやないかと云ふ是又一理ある議論であるけれども此慘酷なる人を殺す人間、死刑に當る可き人間は其性質慘酷なるとこは固より論はない、又力も强く智惠も多いのである、斯くの如き者が終身監獄に繫

れ依然として謹愼して生を終る可き人間てあつたならば其論旨も價ひありと云はなければならぬけれども萬一此囚徒が猛惡にして或は看守を殺し典獄を殺し獄舍に放火し同囚を殺し我力のあらん限り慘酷の行ひのあらん限り働いたら何うするか、矢張り殺すことは出來ない、又牢屋に入れる又殺す、又入れゝば又殺す、終身人の命を奪ふと云ふことは隨分慘酷な所爲てあるが此殘酷なる囚徒の命を失ふことは忍びぬと云ひながら是より善良なる多數人民の生命を失ふことを少しも顧みぬと云ふ道理があるか、何方の命が尊いか、惡い人間の命が尊いか、善い人間の命が尊いか私は寧ろ惡人の命を取つても善人の命は助けたいのである、況や此惡人の善人を害すると云ふのは一人が一人を害するに止らず一人にして三人若くは五人を害したるものもある、若し其統計を取つて見たならば死刑執行者百人の中には必ず此犯罪人の爲に害を受けた良民と云ふものは必ず三百人四百人の多數に達して居るだらうと思ふ若し之を生かして置いたならば又其明くる歳にも三百人四百人の良民を害するてあらう、茲に於てか利害の比較上此猛惡なる犯人の生命を尊ばんよりも善人の生命を尊ぶ方が國家の利益なりと斷言しなければならぬ、從つて我日本に於ては今日死刑を保存すると云ふことは是れ必要已む能はざるの理由があるのである、之を廢止せんとする論は殆ど何等の價値もなき議論と云はなければならぬ、（終）

非武士道論

戸川秋骨

北齋の畫は外國人の眼に觸れて以來特に其聲價を上げたるが如し、吾が美術の敬重すべきはまた西人に依りて敎へられしが如き觀あり。かれ歐米の人吾が美術を尊重すと雖も必ずしも、これを以て自國の美術に勝れりとなしたるにはあらじ。一にはかれ等が鋭意隱微の闡明に力むると、一にはその骨董的趣味を以て珍奇を愛玩するとより、風尙をしてこゝに至らしめしものな

り。吾國初めは形而下の事に關して西人の指導を仰ぎ、やがて形而上の事に及び、美術の鑑識に於て其啓發を受け、依りて以て邦人自から母國の長所に心附くを得たり。近時世人が叨りに喋々する武士道の如きも、亦これに類するものなきか、日清戰爭より北清事件に及び終に日露戰爭に至りて、邦人の武力の實に侮るべからざるに意外の感をなしたる西人は、吾邦に武士道なるものありと聞て、始めて其強勇の所因を探り得たるが如く、にはかに此れが研究に從事せり。邦人が今日に迨びて急に武士道を稱道するは、一つはまた戰勝の結果なりと雖も、それ或はかれ西人の稱賛の聲に惑はされしものあるにあらざるか。さりとは思慮なき限りならずや。余は武士道を以て骨董的道德といふ、これが稱道は骨董の流行なり。西人豈に武士道の眞價を觀取し得ざらんや、邦人の正直なるかれの山師に欺かれずんば幸なり。

何を以てか武士道を以て骨董といふ。曰く、今日に於ては無意義(ノンセンス)なる不用なる道德なればなり。何を以てか無意義といひ不用といふ。余は曩きに本紙「机上小觀」に於て「小說中の生活問題」を論ずるに當り、武士道の今日に價値なき所以を述べたり。乞ふ今こゝに此れを再說せんか。向氏は武士道を以て奴隷道德と罵れりとか、然り武士道は奴隷道德なるべし。或人はこれを以て戰國時代の道德にして今日に適用すべからずといふ。然り今日に用ふべからざる道德なるべし。然りと雖も余が力を極めて言はんと欲する處は、武士道の今日の世にありて無意義なりといふの一事にあり。則ち根本的に用ひ難きの一事にあり。

第一に武士道は生活と沒交涉なり、生活と沒交涉なるもの、たとへ其說く處其敎ふる處、美盡し理至れりと雖も、何等の意義を有する能はざるにあらずや。試に思へ、武士は一定の祿を食みて生活の顧慮なく、平時何等の力むる處なくして、凡ての特權を享有せるものなり。則ち武士道はかくの如き特權ある階級の道德なり。其道德はこの特權といふ條件を附帶したる上の道德なり。それ武士は生活に顧慮する處なし、故にあの

づから其道德も生活と沒交渉たるは免れがたし、生活に沒交渉なる此れを無意義といふ。かくの如きは丘博士の所謂懐手式なる道德といふべし。然るを其享有せし凡ての特權の事實上消滅したる今日に於て此れを再興せしめんとするは、到底不可能の事にして結局無意義といふべし。蓋し個人の自由若くは權利といへるが如き哲學上の考察よりするも亦將に斯くの如くなるべしと雖も、余はかくの如き高遠なる理義を提唱せんと欲するにあらず、單に現代の生活上よりして其不可能と無意義とを言はんと欲するのみ。抑も自個一身を如何に處すべきか、自個の生存を如何にすべきか。これ萬事の根本たるべき緊要の問題にして、この一事定まりて後、始めて義理も生ずべく、忠孝も行ふべく、名譽も重んずべし。未だ一身の處理定まらずして早くかくの如き德義に及ばんとす、必らず圓滑を缺き衝突を惹起す、何となれば斯くの如き道德は不自然なるのみならず、また贅澤なればなり。余が今日の武士道を以て骨董的道德といふはこれがためなり。こは決して一場の戯言を以て目すべからず、明治年代に於て見る一家の不調和、若くは近時に至りてや丶雷同的流行の觀を爲したる思想の懊惱、みな此の不自然の道德より胚胎し來れるものなればなり。坐して祿を食むもの丶義務と、額に汗して働くもの丶それと如何ぞ一致するを得んや、武士道を今日に用ひんとするは富者の交際を貧者に強るが如きのみ。

さらに飜りてこれを考ふるに、封建制度確定の後に於てや、武士は其一身に緊切なる何等の用務なく責任なく、これを極言すれば只優遊坐食するを以て足れりとせり。若し其任務ありとせばそは平々凡々の事たり、其食む處の祿は極めて多く、其享る處の特權は殆んど無限なり。こ丶に於てか自然の理法はかれ等に一種の責任を與ふ、此の責任は則ち武士道の條規なり。則ち時に政岡は千松を殺さゞるを得ず、時に松王は親から其子の首を實檢せざるを得ず。武士が此の多大の犧牲、悲壯の行爲を敢てするは、たま〳〵其積年の特權が偉大なりしを示すものなり。父祖相次て幾十百年君家の

恩典に浴せるもの、一朝其君家の滅亡に及びてや、一死以てこれに報ゆるはまた當然といふべし。大石良雄等の復讐は頗る戯曲的なり、然れども亦將さに當然の事たり。余を以てすれば此れ尋常の事のみ、將に爲すべきの道たるのみ。福澤先生が埜の内に數へざりし所謂逆鋒立ちのみ。福澤先生の説を誤解したる世俗は、先生を以て楠公權助同等論を主張せりとなせり。先生の論據は知らず、余は又四十七士凡俗論を爲さんと欲す、只余は四十七士を以て無用の死をなしたりとは信ぜず、むしろ平凡行くべきの道を踏みたりとなすのみ。素より擧世爲すべきの道を爲さゞるもの、滔々みな然るを觀れば、四十七士の行爲は當に賞嘆に値すと言はゞ余また何をか言はん。

畢竟武士道の道德は贅澤道德なり、太平の世武士の職務閑散にして爲すべきの事なし、而も食祿特權偉大なり、こゝに於てか此れが交換として武士道の條規あるなり。武士道の起因何處にありとするも、其結果せし處は則ち斯くの如きのみ。所詮は太平なる封建時代の制裁なり。

然るに時世は一轉せり、かの特權は全然撤去せられたり。吾人は舊日の如くしかく閑散なる能はず、今や各個其の爲すべき處を爲し、盡くすべきを盡す、また寸暇あるべからず。斯くの如き時勢に於て、先づ君家の事を第一とする武士道の實際に施すべからざるは言を俟たず、今日の時代に於ては個人を單位とすべく勞働を第一義とすべし。蓋し義理も第二位たるべく名譽も然り、恐らくは武士道の説くが如き忠孝も亦然るべし。余は實に今日の所謂新武士道若くはこれが改造なるものを知らず、然れども余は權利自由の問題よりするもむしろ生活の問題よりして今日の道德は個人を單位となすべきを信ず、何となれば吾人の生活は君家に依りて支へられず、父祖の餘祿に依りて成るものにあらず自己の勞力に依りて遂げらるゝものなればなり。武士道の如き根帶を異にする敎義は、如何にこれを改造し新築するも、其基礎を異にすべき今日の道德と一致せしむる能はざるや明けし。聞くが如くば耶蘇敎の先

者にしてまた武士道を說くものありとか、あまりに不見識の學にあらざるか。武士道の生活問題との關係のごときは些事たり特に識者の考慮を待たじ、若しそれ其の宗敎上哲學上の見地よりして、耶蘇敎と比肩すべきものにあらざるは疾くに了知せられたる筈にあらずや。今日に及び何を苦んでか其服從的德義を重しとする武士道を迎へんとはする。耶蘇敎徒も亦阿世となり了せしか。

若し論者ありて武士道の起源を說き、これを以て單に封建時代の產物にあらずとなし、日本固有の美風高德に依るとなすものあらんか。余はたとへ其起因の國民の性情にありとするも、なほかの特權ある階級に依りて發達しこれに適合し、其名稱をさへこれに取りて、其制度に深く侵染せる以上、これを解して上記の如くに思惟せざるを得ず、其起因は兎まれ、武士道の敎ふる處若くは實際に發顯する處、必らずかの階級の色彩を示すを如何せん。若しはた其弊を除き、根本的にこれを改め、國民の性情の發露とも見るべき當初の自然に返さんとするものあらんか、斯くの如きは極めて可なり。然れども斯くの如くにして新たに成れるものはすでに武士道にあらざる事を記憶せざるべからず、近時西歐に響き渡れる其美名に狼狽して、猥りに武士道を稱道し、其今日に意義なきを思はず、若くは全然其根本思想を異にせる別途の思想を捉へて武士道となし、以て得々たるが如き他の嘲笑を招くの虞なからずや。西人の蹟を追ひ、徒に他の煽動に乘ずるが如きは識者のとらざる處なり。

さらに思ふ生活に關係なき武士道は計算の事を度外に置けり、全然經濟を無視せり。武士の子弟は金錢を計算し能はざるを以て誇とせり。かくの如き敎を以て近世の社會に適用せんとす、果して行はるべきか。凡そ數の理に通ずると否とは、以て野蠻の人と文化の民とを區別する標準なりとす。然るに武士道は數の考量なきを貴とす。其敎ふる處はもと金錢を賤むにありしならんも、やうやく數理經濟の考慮を失ふに至れり。此點に於ても武士道は現代の思想と矛盾せりといふべし。

武士道の說く處の今日に行ふべからざりしは啻にかくの如き抽象的の點にとゞまらず、さらに實際に於て其不條理を認むべし。たとへば戰爭は武人の本務たり、然るに今日の戰爭が凡て數理計算に依るは事實なり、見るべし其本務たるべき戰爭に於てさへ、武士道は用ひがたくなりしを。

これ等の難に關し人若しこれを以て武士道の皮相を見て、其精神を知らざるものとなすものあらんか、余は言はんと欲す、其精神を言はば必らずしも此れ武士が專有せる道にあらずして、萬民等しく有する道義心なるを、かくの如きはこれを武士道と言はんよりは人道と稱するを至當とす。左れば武士道の特に數理を輕侮するを辯じて其精神の如何を云々するは素より誤れり蓋し特權を有する武士ならずとも、かれ等が有せしほどの精神は容易に涵養せらるべし。而もかの數理經濟を賤むは實に此の特權より來りしものとせば、吾等は力めて其敎を撲滅し、新に人民道を建立すべき要あらずや。

武士には一種の自負の念あり、自重の氣あり。此自負の念自重の氣は由來かれ等の生命なりしと雖も、其念慮は凡て階級より出てし者にして今日また其用なし。たとへば、吾は武士なれば、吾は武家の出なれば、この言は武士が道德を守り體面を保つがために用ふる語にして、吾等の屢々耳にし又往々自から用ひし語なり。こは則ち、吾れは上級の特權ある階級の輩なればと言ふの意なり。かくの如き偏頗の敎が今日に行はるべしと思ふか。吾は一市民なり、一國民なり、人間なりとの念こそ今日の輩が有すべき觀念なれ。此一事亦武士道の近世思想と矛盾し、其今日に用ふべからざるの一例とすべからずや。それ武士に養はれたるものには、多く市民國民等の觀念なし、故に自から治むる事を知らず、市民たり國民たりはた人間たるの義務を等閑に附するの弊頗る多し。若しそれ吾れは武士なればとの念は、今日に於て士人の道德を維持せんよりは、むしろ僅かにかれ等の虛榮心を慰むるの料たるに過ぎず、明治の十數年に至る間の巡査が、武士より出でゝ其職

に盡くすを得たるは此心ありしがためにして、斯くの如きは武士道の附力の良好なる方面に顯はれしものなり。然れども其結果は最近にまで及ぼせる官權の威力となれり、巡査の時に却つて人民を苦むる官職なりと謳らるゝ事あるも之れがためのみ。今や幸にして巡査の増給問題起れり、此れ一面にはかの吾は武士なり、吾は官吏なりとの虛榮心の消滅し來れるを證する一顯象たりとす。何となれば從來巡査の薄給に甘んじて其職に盡したりしは、この自負の念虛榮の心ありしがためなりしも、今や此の念やうやく去りて、これに代ふるに實質たるべき俸給の多額を要するに至りしものと見做すを得べければなり。こは素より巡査社會の自覺に出でしにはあらじと雖も、大勢は自からこゝる出でしめしのみ、然り武士道はしかく時勢に後れたるものなり、故に余はこれを骨董とし贅澤として、これを再興せしめんと欲するの聲を笑ふものなり。

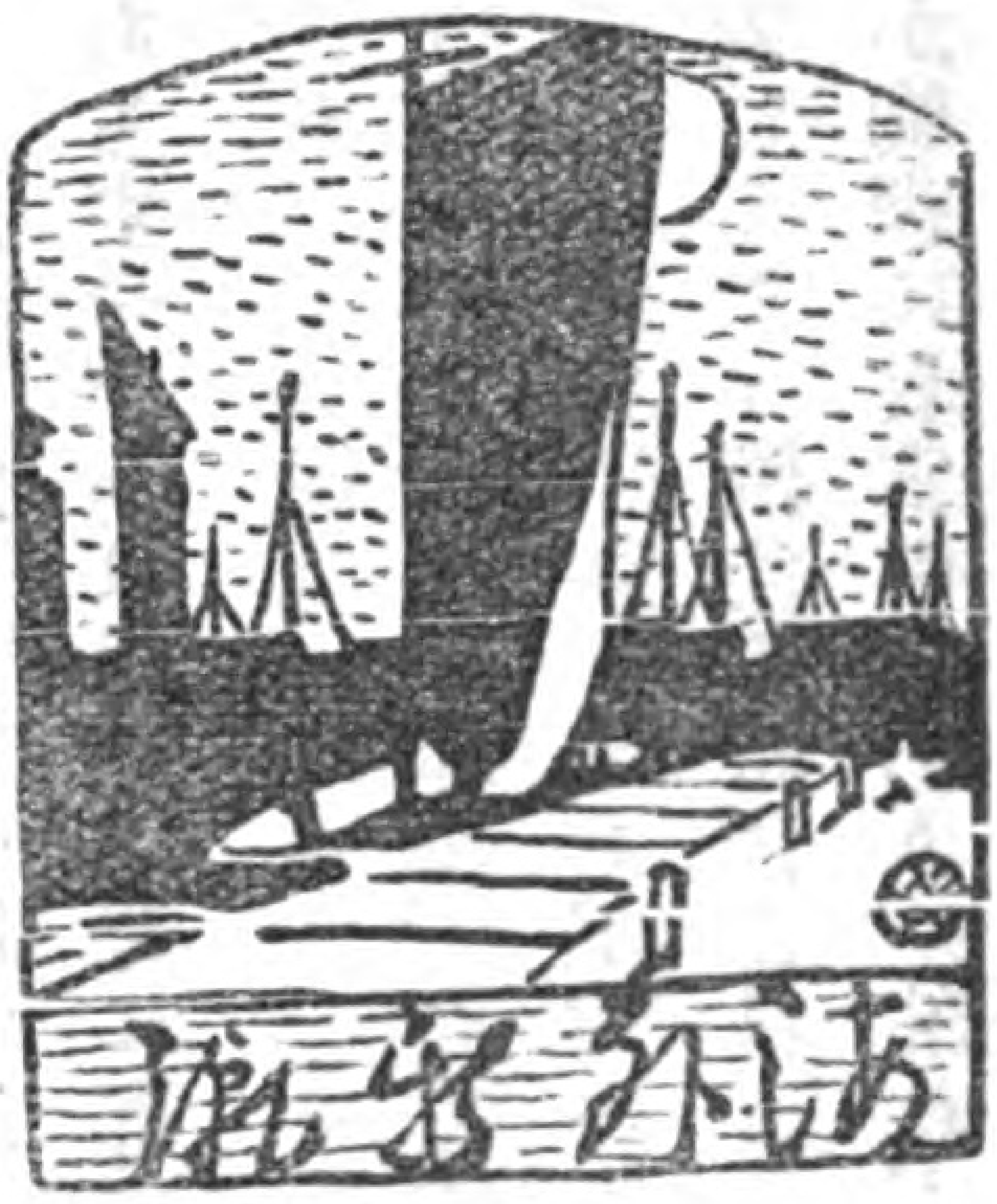
さらに一事を言はんか、武士道は死の敎なり。如何にして死すべきか、如何にして殺すべきかを敎ふる事盡せりと雖も、如何にして生くべきか、如何にして生かすべきかに關しては何等敎ふる處なし、すでに根本の生活生存の問題に沒交渉なり、焉んぞ如何にして生くべきかの道を敎ふるを得ん、則ち生命を保存せんよりは、むしろ生命を棄つるの道に考へ及ぶは自然なり。君家に養はるゝものゝ考慮自から斯くの如くなるべし。而して其結果や制欲主義となり、保守的となり、活動の停止となる明治維新の大業の所謂眞正の意義に於ける武士に依りて遂げられざりしは亦其一例ならずや。かくの如きは新進活動の世に於て頗る不道理の敎なり由來武士道の活躍して其光耀を發揮するは、生命の委棄を主とする消極的の戰爭に於てのみ。然るに今後の世界にこれを見るに戰爭の絶滅は素より期し難きも、其威力の日に減退し去るは明なり、加之上記の如く戰爭また昔日の戰爭にあらずして、形而下に於ては器械力に依る事多く、形而上に於ては智謀に依るもの多し、殊に近時に至りては戰爭に於てすら、生命を失はんよりはこれを保持するを以て本義とするの傾あるをや、

武士道が唯一の活動の天地また日を追ふて其範圍を狭縮せらるゝの概あり。

凡そ世には生を棄てこれを失ひて、却て眞の生命を獲る事あり。徒らに生を貪るはまことの道にあらざる事論なし、余は猥りに生に戀々し死を恐れん事を奨勵するものにあらず、然れども根帯的に生を顧みず、始めより死の上に教を建つるの可なるを見ず。生を重んぜず生存と沒交渉なる教義道德、それ世をあやまるなきか。今日自殺者の頻繁なる、薄志弱行の徒の多き、また武士道の如き消極主義の奨勵が關與する處多大なるにあらざるか。世の所謂教育家なるもの、自殺に戰慄し、薄志弱行を罵りながら、なほ武士道の如きを稱揚す。矛盾にあらずや。かれ等の意終に那邊にあるかを解しがたし。

余はかく武士道の非を説くと雖も、必らずしも亦其美所を思はざるにあらず。エドマンド、バークが、佛蘭西の革命に對し、アヽ騎士の時代去れりと、慨嘆せしものなほ余が胸裡に異常の響あり。然れども今日の吾社會に於ける武士道の稱揚は大にかれと趣を異にし、事情を異にし、境遇を異にす。徒らに古物を珍重して其眞價を知らざるが如きは、余の甚だとらざる處なり。」

顧れば余自からも武士の子なり、武士道に養成せられしものなり。其道德其教育なほ胸裡にありて快感を與ふる處少なからずと雖も、如何せんそは一種の快感に過ぎず、人生に根帯を置かざる所謂砂上の建築にして、今日の生存に對し殆んど何等の意義なし。其教訓其道德はむしろ一々障害を成して內界には思想を閉息せしめ外界に對しては此の開明の世に於ける大都の一市民たるに煩をなす。然るに余は重ねて言ふ世の所謂先覺者若くは教育家なるもの、今に至りてこの骨董品を掘り出し、今日の道德となさんとするといふ。惑はざらんと欲するも得んや、或はこれかの商家の西人が北齋を珍重するを迎へて北齋を喋々するが如き類にあらざるか、私見を述べて江湖の批評をまつ。



阿片問題

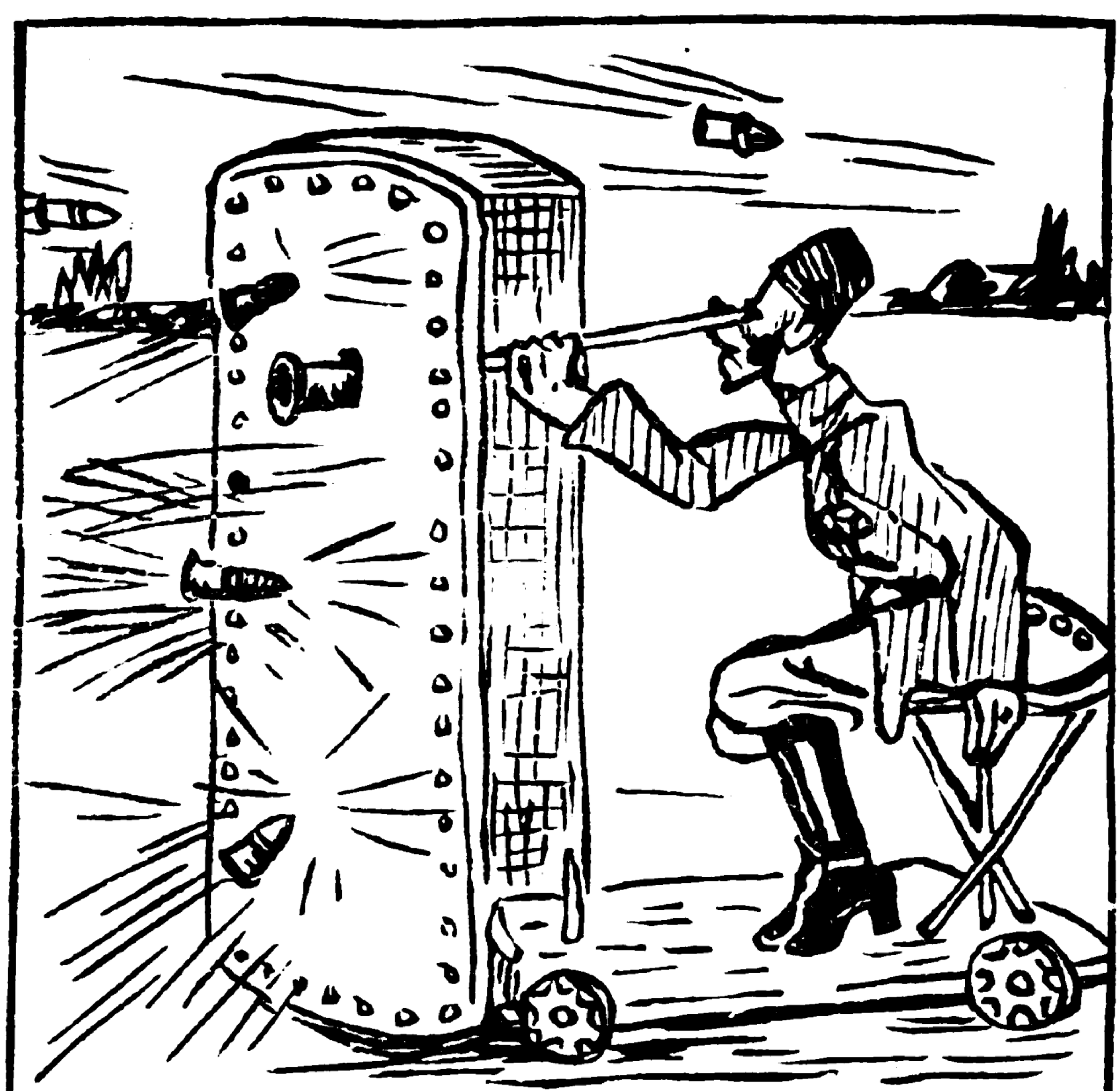
『デーリークロニクル』

外國産及國内の阿片の發賣を十年以内に制限せる支那政府の禁令は端なくも、久しく英國人の良心を煩せる問題を再び喚起せり。支那に於て消費せられたる阿片の大部分並に良質の阿片は英領印度より輸入するものにして、悉は政府事業として培殖し發賣するもの也。其額は國家の歳入に資する事夥し。過ぐる數年間は一ケ年平均五、〇〇〇、〇〇〇磅に昇りしが此十年間は著しく減少し、半額となつて僅に二、二九五、〇〇〇磅に過ぎざりき。而も此低額を失はざらむか爲に吾人は千八百三十九年より千八百四十二年に至る征清の役に與り、阿片輸出の權を得併せて香港を占取し、幾多の互市場を開かしめたるなば、容易に忘れざるべし其後吾人は阿片貿易を固く維持し、支那政府は吾人を目して其國民に阿片を強ゆるものたりとなすに至らしめき。今公平に支那政府の言動をすれば、渠等は常に全力を盡して阿片貿易の抑壓を計れり。吾人が千八百四十二年の條約訂結を迫りし後と雖、此藥劑はひとり所謂密賣者の手に依て輸入せらるゝを得たりき。支那政府の異議とする所は拔き難き習癖を成せる人民に有毒なる結果を生ぜしむるが爲のみならず、悉は一國の財貨を國外に流出せしめ、人口を減少し、支那内地に阿片を生ずる時は、他の健全なる農作を阻碍して農民の之に趨るの患を生ぜしむるものなりと做せり。此等の有理にして正當なる抗議にも關らず問題は再び千八百五十六年の戰役に依て再び提起せられ、千八百五十八年訂結の條約に依て印度産の阿片の輸入は法律として責任を輕うする事となれり。

吾人は公衆の心此が爲に安からざりし事は疑はず。而も卅年以上社會は阿片貿易の壓倒の爲め熱心に其目的を貫かむとせり。千八百九十年頃阿片商會は寧ろ問題を輕々に觀過せり、而も醫學上の證明する處に依て其害寧ろ酒精の下にある事を絶えず揚言せり。醫學上の證明は近時迄酒精に關して甚だ面白からざる言を爲せり。然も阿片は甚だしく然らずとなしたれど吾人が國民に阿片を強ゆるの辯明をば爲さゞりき。獨逸が澳堡酒をウヰスキー以上に害あるものに非らずとして設假吾人敬して之を遠くるとも吾人に其飲用を慫慂す、國内に輸入し來るとを想像せば吾人は設假獨逸が澳堡酒の販賣が其陸軍維持に必要なるが爲なるに依り、之が販賣を強ゆるものなりとするも吾人之に對して何等言ふ所あらざるべき乎。印度の収入は現在も過去も常に此と其動機を同うするものなり。

一朝その收入を失はゞ其損失や恐るべきものあるなり。吾人は印度の收入としての此財源は容易く動搖すべく減少すべきものたるとを知れり。假令モーレー氏が五月廿日に此題目に就てなせる演說が下にいふ所より以下の數字に現はされ居たりしも吾人は一ヶ年約三、〇〇〇、〇〇〇磅の額たるべきを思ふ。吾人及印度に取つて現實の問題といふは此三、〇〇〇、〇〇〇磅の巨額は何を以て償ふべきかといふに在り。尙連關せる小問題の本國の農作及商業の制限に關するものありと雖主要なるは歳入の問題に在り。吾人は直ちに言はん、印度に於ける土地の耕作者の上に重稅を課する事は全く不可能也と。印度國よりは最早何ものをも政府維持の爲に收集すべきものはあらざる也。

帝國租稅院は本國に於て之に助力せむとを拒むべきは又殆んと疑ふべからず。唯一の財源として殘れるは印度の消費を節約すると是也、乍併是は極めて困難也、怨嗟の府となつて非難の聲起り來るは必せり。かくの如きは尙ほ忍ぶべし。五六年の昔印度の殘金はラッサの遠征の如き曖昧なる結果の誇張を除いては頗大なる者なりしならむ。若し支那政府にして此勅令に熱心ならば望むらくば吾人が之に對ふるの道は只節約に在らむ而巳。節約も露西亞が其野心を收めたる今日にあつては可能の事に屬するならむ。現に角モーレー氏が演說中說及ぼして若し支那の意にして眞面目に阿片の消費を制限せむとを望むにあらば英國政府は門戶を閉ぢざるべしと堅く約したり。國民は此言の意を奉じ、設假氏が英國政府は門戶を强制せざらむと言ひたるにもせよ、そは過去の歴史とよく符合したりしならむ。



RUSSIAN MANOEVRE
Czar—"The most fearless Way!"

過渡期に於ける支那

『トリビユーン』

英帝國有司の十中九までが支那に向つて日本に倣ひ憲法を制定せむ事を慫慂したりとの報告は多少意味ある事なり。併し阿片貿易の抑壓を多少匂はせたる最近發布の勅令と相照し見る時は、絕東の歷史を研究せる人々には必ずや反省を促す事なるべし。僅々數年前には、支那の憲法などを口にするものは殆ど囈語と目せらるゝ有様なりき、歐洲人の見解の限に於ては絕東の文明は全く吾人歐人とは異りたる道程を取つて發達せし者にして、西歐洲の立憲政體を以て之に臨まんとするは恰も十八世紀理想家の四五の輩が各人皆同等也と思惟せしが如く然りと爲せり。然れども此見解は最近の日本史によりて始めて愕然として其非なるを覺りぬ。日本人が初め歐洲文明を吸收せむとするや、吾人對岸の火災に臨むの心を以て觀たりき。僅々十二ケ年足らずの歲月の間に日本が世界第一位の陸軍國となり、歐洲の最大帝國を一擊の下に挫折せしめたる事は一千八百九十三年の頃に在ては笑ふべき譫言と見做されたりしならむ。歐洲風の敎育、歐洲風の機械術及歐洲風の軍隊組織を學ぶと雖、高が猿猴の皮相の模倣たるに過ぎずと思ひきや、此絕東の民が一躍して吾等歐洲國民の伍に列せし事は歐洲の人心に心憎き迄其然る所以を深く認めしめたる最も重き事實の増加し來る所の唯一の例證なり。日本の隆興が衆目の視る所と成つてより、人々は是よりは尚偉大なる國民尚一層多くの過去を有する支那の文明が先蹤を追はざるや否かを自ら問ふて止まざりき。今や暫時茲に此兩國民の事情が如何なる點に至るまで同一なるかを考ふるを要すべし。

必要なる刺戟が與かる範圍に於て變化を醸すべきかは五十年前の日本より支那の今日を以て强しとす。新日本の生れたるは一千八百五十三年亞米利加の提督ペリーが國書を齎らし行けるに始まる。通商居留の權利を要求する外人は陸續として入り海內騷然たりきも民衆の感情は甚しき保守主義にして、外人の入來は各地に於て嫌厭と警戒とを以て迎へられたり。去り乍ら日本國民の一部有識の士が懷抱せる意見は、假令外人を嫌厭したりしや知らずと雖、外人と競ふべき唯一の方法あるを認め、而してそは外人の方法に倣ふてなすべきものなるを認めたりき。敎養ある日本人は目して蠻人と爲すが如き自國の愚民が文明の恩澤を欲すると槪して己れにも勝り、而して確かに文明に對して侵略するにも之を防禦するにもおのれ以上なるを知つて一驚を喫したりき。渠等敎養ある人士は正當なる道德を編成し、外國の兵式、工業、法律、政府組織等を以て自身を飾り、之を成し了るや恐れ氣もなく外人の來るを迎へたりき、そは外人と相比肩するを得べしと自ら知りしを以てなり。ペリーの遠征後經過したる五十年は此深意ある革命を全ふするに足れり。

今や同じく中央集權の制度を執れる支那は外國人の蝟集し來りし頃の日本よりは長期に亘て且つ嚴しく迫りて外國の威嚇を受け來れり。實にや日本の新生には最初の永久なる結果即ち一千八百九十四年の戰は刻々

分割の追來れる支那帝國の現狀に似たるものなりき。獨逸、露西亞、英吉利、佛蘭西の諸國は爭て政策上貸地法を執り勢力範圍を定めんとす、此間に在て支那國民は殆ど無辨經なり、但し暹羅は除例外の支那政府は孤立の狀態に陷れり。

日本は之が救濟者として出て來り嘗の征服者今や保護者と成りぬ。一千八百九十七年には日本は實にまだ戰ふの意を有せざりき。戰局の終を告ぐる中日本は大々的讓歩を以て旅順を還附し、一層大なる忍耐を以て万事を控目に出て、露西亞は三年後久しく垂涎の的たりし旅順を占領するに至りき。然は外交上多大の費を以て得たる露西亞帝の勝利にして、這回大戰の結果は歐洲諸國をして其手を支那より引去ることを敎へしめ、而して若し生命にして尚内在せば自ら恢復すべき時を此重大なる、まだ活氣ありとも見へぬ一塊に與へたりき。教養ある支那人は遺徳に於て教訓を得たろや必せり。渠等の前には二箇の選擇を爲せり、即渠等は列強の餌となれる自國を見ざるべからざるか、何者掠奪物は日本人と歐洲人との間に爭はるべき狀況にあればなり、

然らすんば今巳に十一時といふに日本人の覺醒を追ふて、自ら武器を執つて門前の虎狼を迎ふべきか、この二者何れなるかを擇ばざるを得ざりき。果して此後者が支那に於ては漸次根底が得來れるの形蹟あるを見る。

若し然らば支那が其政體を歐化すべき晉き動機を有すとせば、如何なる可能性が支那國民生涯の狀體にかくの如き變化を與へしかを問ふべきなり。日本と比較する時は支那は二の點に於て形勢の非なるものを見る。渠が領土は實に莫大の腐衰を有し、交通の便を缺くと遙に日本に過ぐ。十八省は各獨立の形を爲せり、張氏曾て趣味ある對話を以て吾人に語りしが如く地方自治制は國民的自治制に先だちて生ぜざるべからざる



ALMOST!
—*Evening Standard and St. Jame's s Gazette* (London).

べし。更に又支那は他國人にして民衆に不人望なる王室の治下にあり。日本の文明的革命は政治的改革と連結し、將軍をして其職を解かしめ、無上の權を有し乍ら久しく其實を失ひし王政を復古したりき。吾人が知れる限に於ては、かくの如きは支那に於ける將來運動の中心たるべき滿洲王家には得て望むべからさる事也。然れども支那の社會狀態は立憲的觀念の採受には有望なるものあるが如し。吾人は支那政府としいへば全く絕望的に老朽し腐敗したるものとのみ思ふて、かくの如き腐敗が頂點に達し乍ら幾億の民衆が平和に從順に協同して力めて生を送れるは抑何の故あるかを思ふ事を忘却せり。事實支那政府の事業の大部分は人民の手に依て爲さるゝ也。村會は漸く其當初の形式を變じたるも、活力尙存し、村內の事件は主として村內の長老及莊官の手に依て決せられ道臺の手を煩はすは常例とよりは寧ろ例外に屬すといふを當れりとす。事の帝王に關するものにも現に民主的要素を含めり、又古に於ても然なりき。日本に於ては發達せる封建制度よく行はれたりしに、支那人は位階の差異の如きには頗冷淡にして重を置かざりき。數世紀に亘りて官吏は社會の各階級より試驗を以て採用するを常とし、昇進も素性の如何には依らざる習ありき。一層向上すべき學科を試驗科目に採用せるとはそれ自身支那行政の改進には甚だ長き階段といふべき也。設假皇帝の政府が形式に於て專制政治たり、皇帝が天の子たりとも民の便宜に從つて統治するとは支那政道の根本格言なり。人民は最も重きものにして皇帝は最も輕きものたりとの社會的要素は古く孟子の頃よりの敎たり、而して按察使は常に最高官のみならず皇帝をも批判するの權利を有し又時々之を爲したりき。かくの如き社會には民主的の觀念は歐洲の批評家の想像するが如く珍らしきものにはあらず。憲法の制定には日本の新組織の道を杜さぎし彼の大名が封建的の權利を渡せし如き大なる革命は要せざらむ。次の數年は最偉大なる亞細的人民が近隣なる小國民が自ら已に爲せる所を爲すべき運動の初を見るとはあながち難き事にはあらざるべし。

戰後の日本

「ナショナルレビュー」

商業界の新生面

日本と北方の巨人との間に搆へられたる戰役治まりて玆に一年、而も驚くべき結果は此間に已に其萠芽を見る。

先づ、戰爭の爲めに韓國は皇帝國の屬邪となりぬ、ナエー、エイチ、レッフ氏は北米評論に於て之を說いて曰はく

最早韓國は諸外國との間に直接の外交關係を有せず、郵便電信鐵道其他樞要なる行政機關と運命を同うして國庫は日本の管下に歸するに至れり、愆は洵に策の宜しを得たるものといふべし。抑韓國は曩時日に非に、列强陰謀の伏魔殿となれり、國土國産は各國の取るが儘に任せられたり、上下の腐敗は其極に達したり、財產の安固は得て望むべからず、法典は存在せず、設假ありとても黃白を以て左右するを得るが

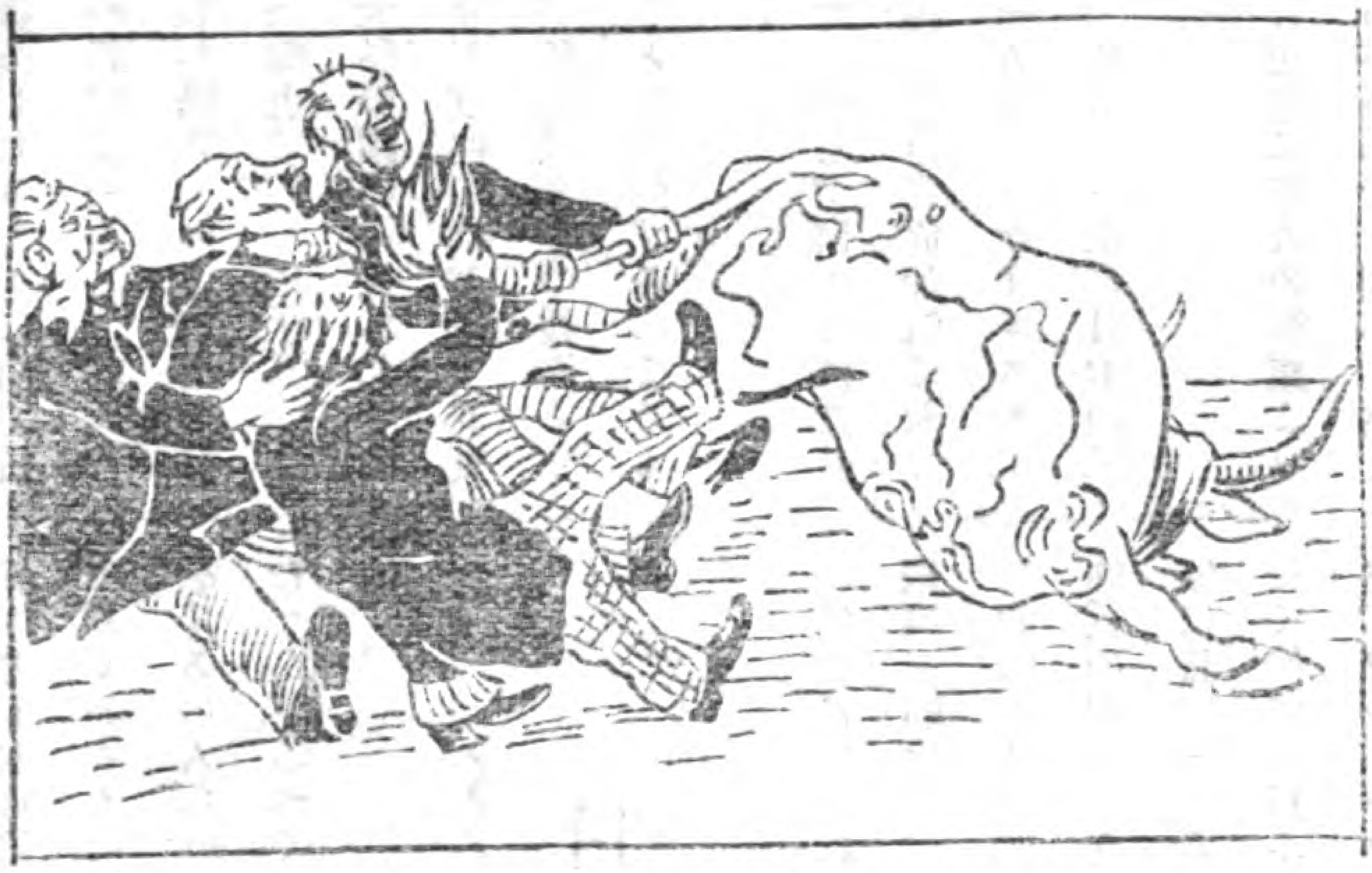
如きものに過ぎざればなり。と統監府の總監として特に伊藤侯か京城に派遣せられたる一事は、日本は韓國に於て秩序ある政府を組織するのみならず、屬邦たらしめむとするの意あるを示せるものなり。韓國内に伏在せる資本は實に莫大なり。

日本が財の蓄積に着手したるは漸く維新後近世列國の伍に列するに至れる時に初まる。乍併國民は失ひたる過去の時を償はむとに一意專心して、全國到る所に銀行を設け、高利を以てする貸借に對し嚴しく攻擊の體度を取れり。次て好問の民は經濟學財政學に於ける實地の經驗が數ゆる所のあらゆる進歩せる方法を採用するに至れるが如し。松方伯が賢明にして思慮ある財政管理の下に金貨本位制は採用せられて、爾後過ぎし戰爭中と雖多大の費をも吝まず、國民の資力の上に著しき拘制を加へても固く此制度を守株して失はざりき。

行く〳〵商業の擴張に伴れて日本が要とする一事は運輸の一層輕易なるべきに在り。日本は四千餘万の人民に對して僅に六千哩の狹軌道鐵道を有するに過ぎず。

日本諸島の運送交通は水運の便益を有ずる事は事實也、乍併內地の大部は此恩惠に與る事難し。期する所は政府が現在の全鐵道線路を占有せむとするの今日、假令重き負擔は戰爭の遺物として國家の肩上にかゝれりと雖、政府をして新らしき財政上の責任を負ふ上に充分注意せざるべからざる、否必ずや注意すべき久しき以前に、此鈌陷は補はるべきに在り。

朝鮮、滿州及支那が日本の勢力の下に開放せらるゝと共に消費の一大新曠野は現はるべく、其便益はひとり日本のみの穫得する所にはあらざるべし。



POOR! FOOLS! THEY THINK THEY CAN HOLD THE BULL WHEN ONCE HE HAS TASTED FREEDOM!
—*Kosa* (St. Petersburg).

日露外交談判の行惱

『ゼ、スタンダード』

日露兩國の通商條約の交涉は今や行惱みの姿あり。日本の代表者たる本野伯は露國委員に其要求書を交附し、未だ彼等に面談せざる中に、日本の要求の一部は早く巳に世間に露洩し、露

國言論社會は强く松花江、黑龍江等の自由航行に反對しつゝあり。少くとも黑龍江の開放に關する露國の抗議は理由ありと見ざるべからず、何となれば露淸の間に黑龍江の航行を以て兩國の特權とすと規定したれば也。本野伯は秘密に附せざるべからざるものを露洩したることに向て抗議をなし、今や此交渉の終結まて政府の下に立つ新聞は一として其成行を報ずることを禁ぜられたり。露國が該江の開放を恐るゝの主因は、日本人の商才及び企業心の優勝なるとにあること勿論也。

日本人が黑龍江を開放すべしと主張するは、世界の國の人民をして商業上同一の利益を得せしめんとの公共心よりなりと言明すれども、其實彼等は若し之を開放すれば、地理上よりするも、又其漁業上の技術よりするも、實際の利益は彼等日本人の手に歸することを熟知するによるものなり。

日露兩國間の鐵道に關しては其交渉一層困難なるべし。何となれば其決定如何によりて西比利亞鐵道の最終點なる浦鹽斯德の安危如何に大なる影響を及ぼすべければ也。されど露國委員の一人なるツヴオルスキー氏は此點に於てラムスドルフ伯と其見を異にし、成るべき丈け日本の正當なる主張とは折合はんとすといへりと。

露國人の日本を狐疑恐怖すること甚だしく、官吏殊に軍人の極東より還るゝのあれば必らず「何時日本は再び責め來るべきか」と問ふを常とす。此恐怖心を抱く所以のもの一には東部西比利亞に於て日本人の漸次增加するにもよるなるべきも、又一には浦鹽斯德城砦内に於て屢々日本の間諜の捕縛さるゝにもよるなるべし。されど本野伯の露都に入るや、皇帝自ら出てゝ之を歡迎し、又會合あり、饗宴ある毎に日本大使は極めて懇篤なる待遇を受け、日露朝廷の間は極めて親厚なるが如く見受らる。然れども本野伯はかゝる待遇を受けたりとて決して自國の主張を貫くを忘るゝ如き人にあらず、否な少し位の風波を起しても其主張を貫かんと欲するの人なり。夫れ故に此交渉の成行は捗々しく結了すること先づむつかしるべく、兩國の確執する限り、行惱の姿にありと見るを適當と信ず。

日佛協商の主張者

「ニユウカツセル、クロニクル」

倫敦に開かれたる國際議員會議に、日本の代表者として出席したる竹越與三郎氏は、巴里滞在中「エコー、ド、パリ」主筆ブーランジー氏に向て興味ある議論をなせり。竹越氏は熱心に日佛兩國をして英佛協商と同性質の關係に立たしめんことを希望し、日本に於ける最も勢力ある政治家は皆同一の希望を有することを明言せり。而して日本が其軍事教育に於て佛國に負ふ所大なるを回想し、且つ千八百八十四年、時の佛國首相ド、フレーシネが帝國に向て同盟をなさんことを申込みしも、當時、日本は其羽翼未だ成らず、此提案を辭退するの止むなきものありき。而かも現在に於てはかゝる妨害は已に業になきを以て兩國の協商を見る極め

て容易なりといへり。然らば竹越氏の望む所の協商の範圍奈何といふにいふまでもなく、獨逸のジャヴア島に對する計畫を中心とするものにして、若し獨逸の計畫が實行せらるゝが如きことあらんか、著しく極東に於ける日佛兩國の利益を毀損すべきを以て今に於て日佛協商を遂げ之が妨止の策を講ずべしと論じたり。且つ竹越氏は佛蘭西が毫も日本の佛領印度支那及び暹羅に向て干渉せんことを恐るゝの要なしと主張し、佛國が極東に於てなす所の文明的事業は日本に取て極めて歡迎すべきことにして成るべく之を助長せんことを欲すと述べたり。若し竹越氏の議論にして日本に於ける公論の代表と見るべきものありとすれば、日英同盟の補助として日佛同盟を締結するは將さに所謂實際政策の範圍内に來れる問題也といふて可なり。



FALLÈRES—"Buy yourself a top-hat, Nicholas — that metal thing draws the lighting." —*Jugend* (Munich).

藝術における社會的靈感の必要

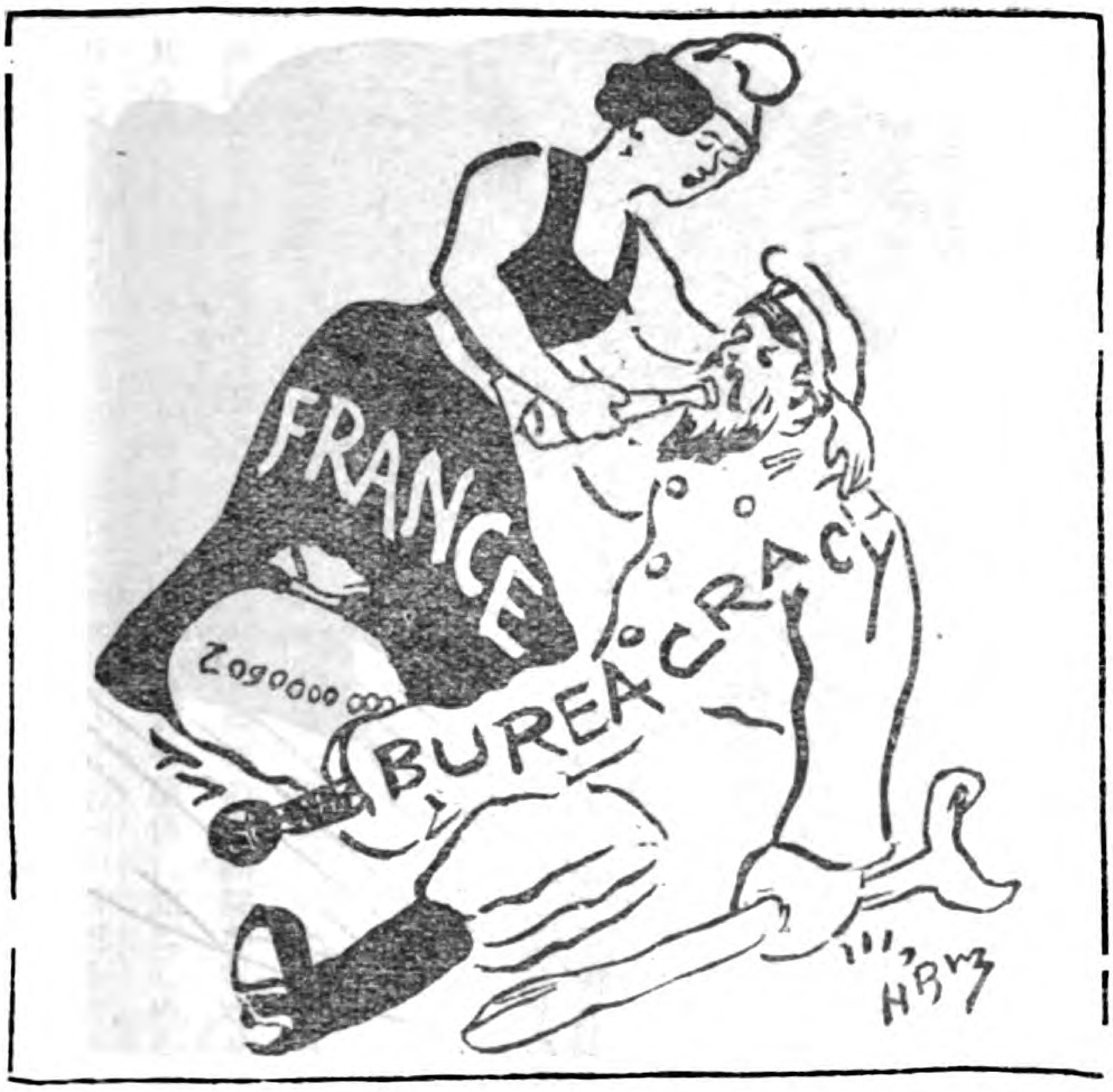
「リアラリー、ダイヂエスト」

藝術家が自己を自然裡に沒入すればするほど奇なる結果も呈せず、感情の制限もなくして眞に能く自己を認め自己を表現するを得べし、之と同じく藝術家は又民衆の生活裡に自己を沒入するによりて、自己を認むると同時に社會的靈感と大なる共通の理想に對する服從とを得べしと。ユアーンドヴアルヴエ氏は如上の語を以て、藝術家の過度なる個人主義が惹起したる、現時藝術界に於ける無政府狀態の回護を諷せられたり、氏の主張に曰く、今や民衆は他面に於て漸次に希望と鼓吹とを得んとて藝術家に向つて期待しつゝあるなりと、此處に氏の語を引用すれば。

藝術家が大なる敬虔の念を以て事物の觀察を爲すに從ひ、又自然を透

觀し自然と融合し、自己をそれに服從せしむるに伴ひ、彼は自然律との合一即ち自然の感性的發現と、自己の精神の憧憬との間に一の連鎖を認むべし、即ち地球の形狀に於て、水の運動に於て太陽の光線の狀態に於て、將た人と動物とを問はず、其生活の諸點に於て、彼は其處に能く自己を發見すべきなり、彼は事物の描寫中に能く自己を描く、何となれば彼は能く自己の思想と所有自然界裡のものとの間に存する結合を理解し、さて驚くばかりの多くの現象裡に存するは唯、一生活、唯、一意志あるを知ればなり。

自然に關する此かる考察は多くの精神の合一が此處に起點を有する新なる中心也、唯一の樞軸なり、斯かる考察は眞實なる精神內部の訓練也、如何なる外部の訓練よりも遙に强力なる訓練なり、藝術家は斯くして愛と自然に對する深き畏敬との結合の根底を有す、而かも此唯一根底が又他の民衆との結合の原則たるを得るなり、狂熱を以て自然の眞實に服從したる藝術が十分に民衆の生活の必要に應じ得ざらんことは有り得べからず、又有るべしとも考へ得ざるなり、斯かる藝術の所產が人々の基本的活動、儀式、祝祭等と調和し得ざらんことは有り得べからざるなり、左れど又普及的藝術の秘義は徒らに與衆を樂ましめ、驚かしめ、且つ教ゆるには存せずして、唯、誠實と熱情と自然の理解と、並に眞實の表現との外他に何等の計畫なきところに存す、此る藝術はさる要求を自發的に遂ぐるなり、そは人類的、普遍的、自然的なるが故に社會的なるなりと。



THE RUSSIAN BUREAUCRACY TO FRANCE—"I feel, dear lady, that in spite of your aid I must ere long succumb."
Szezutek (Warsaw).

結論に至りて氏は更に、斯くして認められ生ぜられたる藝術には純個的性と幾多の種類とを併せ許す寬容なる餘地あるを論ぜり、氏の論に曰く、眞實は一樣或は單調を意味するものに非ず、多くの樣式を許すなり、人生は之を一大戰鬪

にも譬へつべく、多くの人々は多くの報告を戰場より齎し得べし、而して其報告は各眞なるを得べく同時に又一樣ならざるをも得べし或るものは集團の動作、一般の計畫、並に行動とを報ずるもあるべく、或るものは戰場の特種の一局面を報ずるもあるべく、更に或るものは又一篇の短信、一部の光景、一個人の擧止を報ずるもあるべきなりと。

豫告

新年號の公論欄に寄稿の快諾を與へられたる大家左の如し。

金子筑水氏
竹越與三郎氏
桑田熊藏氏
松本文三郎氏
建部遯吾氏
小河滋次郎氏

尚各欄に於て大活動大發展をなすべき計畫あることは卷頭の豫告を一覽せらるべし。



文藝雜考

佐々醒雪

統一(ユニチー)なき詩歌——物盡しと道行、

日本の詩歌には不可思議な産物が多い、ことに統一なしに唯羅列したといふ風のものが、ことに多いやうに見える。

論理の智識の發達しない國語には、有り勝ちのことではあるが、萬葉などの歌にはシンタックスの不備なものが頗る多くて、自動と他動とを混同する、主格と目的とが錯雜する、はては、

そこし恨めし秋山我は(其處が極メテ面白シ、秋ノ山ハ我ハ)

などのやうに、主格が三つまである文章がある、これに加ふるに、例の序詞とも本文ともつかぬ文句が多くて、文法上ことにシンタックスの不統一なことは、極めて甚しいので、決して古典學者が夢想してゐたやうな完全無缺な言語ではない、

それが、特殊の發達をして、他國文學に見るべからざる修辭の形式を作つたことは、疑ふべからざることであるが、しかし、その不統一其のもの丶弊害も隨分甚しかつた、

連歌俳諧(或は連句)は、其の最も甚しいものだとは、よく世人のいふことであるが、しかしそれにも、前後の句の間に微かな連鎖はあつて、又特殊の趣致がないてはない、譬へていへば、汽車の窓から見る刻々に移り行く好風景、或は親友同士の面白い雜談がそこともなく變化して行くのは必しも、一幅の全景、首尾全き談論に比して、遜色ありとは斷じられない。

西洋の修辭學者は、例へば、モンテインの論文集(隨筆めいたもの)のやうなものは、作者の人格といふ統一點があるといつてゐる、徒然草や枕草子のやうな雜筆も、その不統一の爲に排斥すべきではないとは、彼等も亦認めて居るところである、されば、更に一歩を進めて、箇人の所作でなくて、同じ趣味のもの丶集まつたものでも、やはり同じ趣味の統一があるといはれない理由はない、蕉風の俳諧は、蕉風趣味が統一し、一夜四唫は蕪村趣味が統一してゐる、その變化のみを見て統一を認めないのは、必竟俳諧を知らざるの罪といつてよからう。

だが、この議論を以つて辯護することの出來ぬのは、我が歌謠中のあるものである、

我國の歌謠は、不思議にも、常に、音樂の發達に後れてゐる。先づ音樂上の變化に誘されて、萬葉に反歌が出來た、だから當初の反歌は其の長歌と意味の上の關係がない、長歌と反歌とは何等の統一もなく連ねたものであつた、後に外來樂に伴つて居た囀(外國語の歌)が衰へて、これに代つたものは、日本の歌謠であつたが、作歌の伎倆が音樂に伴はないので、やはり不統一

を免かれない、催馬樂中の早歌(逍遥氏の常闇の下の幕の初に用ゐられたもの)などは其の最も甚しい一例である。降つて宴曲になつても、唯無闇と緣語や懸詞で古語成句を連ねてゐるのみて、殆んど何等の意味もないものが多い、謠曲の地の文句などに其の類のものがある、之が少しく統一せられたのが太平記の東下りて、懸け詞や緣語に用ゐられた、例の海道の地名は巧に俊基の境遇や感情を表はす道具になつて居る。「身の尾張さへ定めなき熱田の御劒伏し拜み」などの調子は即ちこれてある。

ところが、應仁以來の大亂に、遊戲的の文藝が一たび滅したともいふべき足利の末期に、三味線といふ新樂器が輸入せられる、一方には諷謠の伎も進歩した、ところが、變化あり統一ある新歌詞を作り出す手腕は、殆んど望みがなかつた。そこて不可思議千萬な、奇怪至極な工夫が講ぜられたものが、即ち三味の組歌といふものてある。(この以前にも多少ないてはないが慶長頃の組歌は最も奇怪な標本てある)

それは在來の小唄の、長短の種々なものて、音調の上にもなるべく變化の多いものを數首集めて、これて新曲を作り出したので、意味の聯絡統一などには、毫も顧慮しなかつたのてある。だから、其の結果としては、松の葉や絲竹大全にある組歌の通り、全く無意味なものとなつた。古いものを示すまてもない、現に、お酌などが踊るカッポレてあるとか、歌澤てあるとかいふものも、多くは、この組歌て、「豊年ぢや滿作ぢや」と收穫を謠つて居るかと思ふと、忽にして野卑な戀歌に轉ずる。これ程奇態なものは萬國無比てあらう。(勿論、これは異つた都々逸を續けて謠ふのとは譯が異つて異調の歌を集めて一曲を成して居るのてある。)

流石に組歌の無意味てあることは久しからずして認められて、元祿の西鶴は三味の組歌を流行後れの一つに數へて居る。しかし、これに代つて出來上つたやゝ長い唄てある上方の端唄長唄は、頗る困しい統一の工夫を反復して居たのてある。

曰く何々四季、曰く道行、曰く何々盡し、曰く何々八

景、これが想の乏しくて稍長い歌を作る第一手段であつた。

四季の富士四季の戀を謠つた華歌がある、これは春花秋冬の歌が四つ續けて列ねてあるといふのみて、何の爲に四つ作つたかといふと、唯一首ては短かすぎるといふだけのことてある。辰巳八景や北州(吉原の四季)なども、つまりは同じもので、春夏秋冬の歌を別々にしても、一つ一つに獨立した意味があつて、四つ列ねた爲に何等の新奇な一物を作つて居るとも見えぬ。よく掛物などに、同じ題の四季の和歌や發句が書いてある、それと同じ物て、さらに譬へば展覽會に陳列してある四季の人形の格てある。何等かの統一があるといふことが出來るかも知れないが、一物に成つて居るとはいはれまい。

八景といふのは瀟湘八景、近江八景から出たもので、(八景といつても、數々の名所を並べるといふことの名て、必しも八ヶ所の名には限らない、これが道路に添うた地名になると、道行といふので、八景と道行とはつまり同じものてある。)八景其物には春夏秋冬と同じやうに何らかの聯絡があるにしても、唯その地名が歌の中に列ねてあるといふことは、殆んど無意味てはあるまいか、春夏秋冬は唯四つてあるから、それを二倍にしたといふまてゝ、春の雪といふかと思へば秋の月が出てくる、意味も統一もあつたものてない、この四季と八景とが二つ結合すると、今の端唄緑の四季のやうなものになるので、四季の景色と東山の名所が雜然とならんて、巧な緣語て補綴してあるといふのみだ、「時雨を厭ふ傘に濡れて紅葉の長樂寺と」「祇園豆腐の二本ざし」とは、意味の上に何等の連鎖もない。物盡しになると更に甚しい、八景も、固有名詞だけを「さえ渡る清水寺の鐘の聲は遠寺の晩鐘の響、それ白河の洲先に翼の散亂すは、平沙の落雁これならん」といふ風に並べるのは、まづは物盡しの一つてあるが、その八景ても不足てあると、今度はさらに何々盡しと稱して、例へば松盡し、菊盡し、貝盡し、山盡し、戀盡しといふ類を初める。これは同じ種類の名詞を續けさへすれば

よいのであつて例へば、
其名も高き小倉山、御幸まだなん飛鳥川、かはる心の浮き紅葉唐紅の立田川、（紅葉盡し）
ちらと見そめし姫貝に、一筆螺ておくりたいらぎ、いたらがひ、名たてがましき移り香も、梅の花がひ櫻貝寐もせて、獨りあかにしの、雌を馬刀とや、人のみるがひ忘れ貝、（貝盡し）
といふ調子でつまりは駄洒落の連續である、まだ甚しくなると一本めにはいきの松二本目には庭の松一のやうな松盡し兼數へ歌となる。そも〱、かくの如く無意味な不統一なものが、又と世界にあらうかと云ひたくなるが、しかし、これでも、まだ、組歌よりは統一上に進歩したものである。
僕がこれを以つて筆を措いたならば、所謂る新流歌人は、果然老朽な歌謠は顧みるに足らないといはるだゝらうが、しかし、幸にも國歌の發達はこゝに止まらなかつた。不思議な連歌が蕉風の俳諧となつたやうに、この奇怪なものは、更に我が國特有の長所を作るに至つたのである。ゲヱングであつたか「若し人間の文章が二行宛同時に讀まれるものであつたら調法であらう、」といふ意味のことを述べて居る。なる程、現象界のことは單獨に起ることは尠ない、例へば、某が花を見るといふことゝ、美しいと感じることとは殆んど同時である。若し某が花を見たといふ文と美しいと感じたといふ文とが、殆んど同時に讀まれることが出來るならば、それ程重寶なことはなからう。かの駄洒落に近い物盡し、八景道行は、淨瑠璃の上乘なるものに於ては、實にかゝる意味に運用せられたのである。二行同時に讀ませる方法になつたのである。例へば、近松が網島の名高い橋盡しは、よしや多少の暇瑾はあるとしても、十月十五夜の月下を蜆川にそひて溯り、天滿橋、蜆橋、大口橋、難波小橋を過ぎ、我が家の方を顧みつゝ、京橋を越えて網島に至りし事實と、小春治兵衛が當時の苦悶とは、その橋盡しといふ一種の道行或は物盡しの修辭を以つて、巧に相錯綜せられ、配合せられて、殆んど同時に讀者の心裡に影じ來るのである、全文を引

用する必要もなからう、唯「手に百八の玉の緒を涙の玉にくりまぜて南無あみ島の大長寺‥‥最期所と着きにける」といふ一節だけを見ても、泣き〳〵辿り行く有樣と其の場所とは全く同時に讀者の心象に映ずる。この南無あみ島を滑稽と感ずる者は、純正な――尠くとも日本文學から養はれた純正な趣味を有たぬ者である。其外、浪枕の中巻の道具の羅市、重井筒の生姜酒と卵酒の段などは、確かに、この不統一であつた組歌――物盡しの產出した立派な修飾の標本であると信ずる。久しい歴史的發達の後には、何等かの結果がある。何の價値もないものには、數百千の人々が久しく執着するものではない。漫然たる斷定の以前には精密な調査がなくてはならぬ。

都々逸論

文學博士　大槻文彦

近頃新派和歌や新體詩といふものが出來たのは舊和歌は古語に限られ又規則などもあるから其窮屈を脫がれようとしての事であらう然るに其中には甚しい古語と當世語と時代のかけはなれた言葉をまぜてつかつて木に竹をついだやうな變なものもあり又「てにをは」や「かなづかひ」の亂れて居るのもあり五七の句の字數に餘る時足りない時は勝手に一語を伸べ縮めなどして語を成さず意味の分らぬのも見えていかゞはしいものもあるさうである。

感興の起る時に吟詠しようと思ふは人の情であるが扨和歌を學ぶは難いとならばいつそ都々一といふものを作るがよい都々一は當世語を當世語の調で作られるから誰にも出來て樂てあるさうして都々一の殊によい事は唄ふことが出來樂器に上せることが出來るこれ即ち歌の本分にかなつたものであるさうして言葉を自由自在に働かせたものもある

かはいがつたりがられもしたり
今ぢやがられもがりもせぬ

此等は趣意が卑しいから採る事は出來ぬが「がられ」が

り」などゝ助動詞を巧に獨立に運用して二十六字の中に言ひ切られぬ過去現在の意味を聞かせた所などは妙である

これは宣言(のりごと)を「のりごつ」と動詞に働かせて又「御門の御口づからごて給へるなり」(源氏物語、東屋)などつかつてある「ごて」又は「まうけられうがられまいが苦勞にするは國土のたはけ」(矢根五郎)「しもしたりられもられたり九十九夜」の「られ」などゝ同じ使用法で面白い

都々一は元と「よしこの節」と云つたものでそれより前に「投げ節」といふものがあつたこれは七五七五の四句で今樣(いまやう)を半分にしたやうなものだ

雪折れ笹にむら雀
　今朝の寒さに歸さりよか

「よしこの節」は七七七五の四句で元と京攝のものださうてこれに都々一といふ名の附いたのは名古屋だといふことてそれから江戸へ傳はつて來たそれを初代の扇歌といふ藝人がはやらせたものだといふことだ扇歌は常陸の久慈郡佐竹村の醫者の子で上方(かみがた)へも行つたことがあつて嘉永五年十月廿九日に死んで墓は常陸の石岡の千手院にある此扇歌が江戸中の寄席其外て天性の美聲で自ら三味線を彈いて都々一を唄つて盛に流行したもので都々一坊扇歌と稱して居た今も其名を繼いて居るものがある

都々一は舊名「よしこの」の方が品がよいやうであるから舊名に復したらよからう此唄を卑しいといふがそれは趣意や言葉づかひの卑しいものが多いからでそれらは避ける事が十分に出來る俚謠正調と云つて近來萬朝報に見えるのになかなか品のよい言廻しの旨いのがある近く出て居るので

戰死した氣と寡婦(やもめ)の氣とて
　稼ぎましよぞえ友白髮

友と馴染んだ國さへ今日は
　雨になるよな秋の空

鯨潮吹く熊野の浦も
　小春凪(なぎ)にはみかんぶね

これらは言葉づかひも上品で味はひも深い又「よしこの」は唄ふに卑しいとも云ふがそれは節と樂器の調とが卑しいのである「よしこの」は七七七五のものであるが諸國に「潮來節」とか「米山甚句」とか仙臺の「さんさ時雨」とかいふ類のその土地々々に限つて唄つて居るものがあつて（多くは二上り調）これらも大抵は七七七五でその中に節も調も好いものがある殊に仙臺の「さんさ時雨」といふは

さんさしぐれか萱野の雨か
　音もせで來て濡れかゝる

といふのが元唄でこれは仙臺黄門政宗卿が人民の恩澤に浴する意味を作られたもので仙臺では貴賤上下男女老幼宴會などの席で一齊に聲張り上げて誰でも唄ふものであつて國歌のやうなものであつて手拍子ばかりでゝも唄ふし三味線に合はせても唄ひ替へ唄も多くあるさうして節も調も高雅なものでいかな高貴の席で唄つても恥かしくない諸國に行はれて居るものでこのやうなものはいくらもあらう其中の高雅なものを採るがよい

三味線といふものは葡萄牙國の三絃の樂器のラベイカといふものが足利氏の末世に我が國に傳はつてそれが胡弓となつて琵琶法師がその弓の代りに琵琶の撥で彈くやうにしたものが即ち三味線であるそのラベイカに後に西洋で一絃增して四絃にしたものが今のバイオリンであつて樂器の王とまで稱せられて居るそれであるから三味線といふものも其血統を糺せば淸和源氏の末孫で決して素性卑しいものではない此三味線が鄭聲であると言はれるのは二の絲の甲處に淫聲を發する所があるのでその甲處さへ抑制すれば淫調は無くなるさうすれば隨てこれに上せる唄の節も淫奔に聞えなくなるは道理である

無學の人が吟情を述べようとするには「よしこの」が一番無造作でよいと思ふ長い事柄を述べようと思ふならば「よしこの」の聯作をするがよい言葉が自由に述べられて誰が聞いても分りさうして唄ふ事も出來て樂器にも上り淫奔でもないものならば平民文學の歌に此上のものはなからうなまじひに古語に當世語を夾雜ぜにし

て意味の通らぬ新派和歌や新體詩には僕は不賛成てあ
る

男女間の趣味

岩野泡鳴

男子と女子とを聯想すると、多少に拘らず、どこかそこに一種肉感上の刺撃が生ずるのは、普通、頭の黒い物の自然である。肉感挑發の誘因は、世間至るところに存在して居る。神經の鋭い普通人は、黑板塀に見越しの松を見れば、直く變な氣を起すに違ひない。英米の紳士が、他人の私行を知つても、わが國人の樣に口に出して攻撃しないのは、表面にその神經を殺して居るからで――そんなことを云つたつて、その人は社會から何の利益をも得ないのみか、却つて自分の品性を下げるわけてあるから、寧ろ知らない振りをして居る方が高尚に見える。ところが、文藝上のことになると、作者の考に依つては、自然主義といふのがあつて、―僕等はこの主義の作物てなければ、到底、人生の深處に達することが出來ないと思つてるが――自然を自然的に描寫する技巧上の道筋には、隨分肉感を挑發する樣なところも出て來るものだ。

それが露骨な事實として出て來ると、春畫と同樣、風俗壞亂と見做され、また理窟としてあらはれて居ると、無道德として道學者の攻撃を受ける。然し、小説『サッフォー』中の螺旋階のところや、劇『モンナワンナ』の最後の氣焰などがなくては、いづれも氣拔けがした樣なもので、人生の深い趣味を感じさせることが出來なくならう、社會の平面的自然を描くだけなら、劇も小説も不必要てあつてたゞ普通のお話をして居るものがあればいゝのだが、文藝家はその平面的自然を一歩も二歩も切り込んで行くところに、威嚴が出て來るのてある。だから、この威嚴を以つて自然を描けば描く程、肉感の挑發は靈化されてしまうものだ。尤も肉感挑發が文藝の目的てはない、一藝術品の部分に於て、自然にそんなところもあることがあるので、それはど

んな立派な人でも或部分を缺くと片輪になると同じわけだ。

そこで自然主義の傑作を讀むものは人生裏面の深處に思ひ當つて、日々の生活にも興味をおぼえるのが當前だが、無學文盲とは行かないまでも、趣味と素養とのない讀者は、たゞその一部分に誘引されてしまふ。かういふ手合ひは、廣い世界を悠々然として飛んで居るつがひとんぼを見ても、下等な情を動かすばかりだらう。これには、習慣といふものも與つて力があるので——嚴格な家庭に育つた青年が、少し自由な社會に出ると、直ぐ墮落する、外國人の旅行者がわが國の市街を通行して、婦人の白い脛が裾から出るのを見ると、顏を赤くする。僕等は慣れて居るから何のこともないのであつて、今日三十歳以上の人なら、地方に居た子供時代には、男女共通の錢湯に這入つた經驗さへあるのだ。

男女間の趣味は、丁度、藝術上の趣味と同じであつて人の素養と習慣とで違つて居るものだ。此間新聞に出て居た樣に、米國で、或人が裸體が人間の最も自然な生活だと云つて、裸體生活を宣傳することが廣まつたら、僕の說かうとする男女間の趣味は、一層率直に說けるわけだが、殘念なことには、社會はそこまで悟つて居ない、出版物には發行禁止があるし、交際界にはしかつめらしい禮儀がある。僕等は、今日のところ不自然から自然の趣味を辿つて行かなければならない境遇にあるのだ。正直に云へば男女の最も接近して居る刹那が、この男女問題の本位だ。種族の繼續、子孫の繁榮などは、趣味以外の實際問題であつて、たゞ金錢の勘定をするのと大した違ひはない。人間に生れて來た以上は、そんなこともあらうが、もつと餘裕のある生涯を送りたいではないか?

如何に男女の接近か面白いとしても、年中、一緒になつて居られるものではない。第一、衣服を着て居るだけでも、既に充分の隔てが出來て居る。この隔て、これが男子の事業をする時間で、一方から見れば、壯快な時間、また一方から云へば、苦痛な時間である、

男子の白髪は、この間に發生するのが多いのだ。手に觸れても、目て見ても、實に女ほど氣持ちのいゝものはない、百花園や妙華園の草花に接するやうて、而もそれが愛想を云つたり、にこついたり、白い顔や手には、熱い血が循環して居る。小見を見るよりも、女性が女性の本色を發揮して居る方が、無邪氣て、愉快て、これに接する間は、何の苦勞もなくなる。マホメットの天國を夢見るまでもなく、女らしい女が居れば、現世は一面に極樂と見て通れるのてある。

婦人に理窟を聽かせたり、道德を說いたりするのは、野暮の至りて――釋迦や孔子は、女に對する方針を誤つて居たから、『度すべからず』とか、『敎へ難し』とか云つたのて、若し女に學問をさせるなら音樂が最高目的て、貞操を敎へるなら、亭主の生きて居る間は、他の男子に身體は許すな位にとめて置くがいゝ、柄にないことを勉强しろとか、自分以外の美男を思つてはいけないとか命ずるのは、人心の自然に反して居る。夫婦にして死ぬまでも相互に滿足して居られるなら、その人々は幸福てあらう、然しその幸福は、兩者が別れた方が、もッと發展して居たかも知れない場合のあるのを思はなければならない。人間の精神には、向上心が備はつて居る。おのれ又はおのれの配偶者よりも更らに立派な美貌、美德を追ふのはその人として奮勵して居るのて、喜ぶべく、尊ぶべきことてある。

僕はプラトーンの樣に婦人共有說は說かない、然し、男女精神の自由を說明する爲めに、瑞典の神秘家スヰデンボルグの愛論を云つて見ようが――渠に據ると、男女の地位は定つて居ない、品性上、あゝ、あの人はえらいと思ふ者があると、その思ふ者が女て、思はれた者が男てある。その男がまた自分よりえらい者を見付けて、それに精神をうち込むと、うち込むのが女になつて、うち込まれたのが男てある、かう云ふ風に、僕等の心靈は男女相轉換して進步するのだ。今、この說を實際に應用して見ると、餘程面白い現象を想像することが出來る。女性がどんなに奮勵しても、その形體が男性に變ずることは出來ないものとすれば、年中、

その形のまゝ、價値の多い男子を見付けるに從つて、それに戀慕して行く。さうなると、跡から、跡から女性に棄てられる男子が多くなつて、それらは皆無男と不德者であると證明されたも同前だから、慚愧のあまり、首でもくゝつて死んでしまうより外はない。若いものから老人に至るまでが、棄てられる度毎に、女から恥辱と反省とを與へられるのであるから、今日のハイカラ先生輩が、婦人を訪問する前に懷中鏡を出して自分の鼻付きや目付きをつくらふ樣なことてはまだまだ足りない――！毎日、毎晩、自分の胸中をかへりみて、女に愛想をつかされる原因てある無學と不正との影が、心の鏡に映つて居はしないかと心配する樣になるだらう。この大心配が男子全體の精神を段々向上さすから、無男と不德家とは、自然に、社會に跡を絶つに至るだらうに。

殘念なことには、今の女にそれだけの勇氣もなければ、それだけの能力もない。獨逸の早熟哲人ワイニンゲルは、婦人に靈魂はないとまで云つた。(尤もこれは男子には靈魂があると見てだ。)然し、それもあんまり可愛相だが、女性は矢ッ張り女性で、詩人メタリンクが云つた樣に、女を見るのは草花を見るのと同じて、無邪氣と可愛いのとを特色――寧ろ生命――としてやらなければならない。女もそのつもりで居なければ、この生存競爭の烈しい現世に處して行くことは出來ない。生物學て云ふと、あの比目魚といふ魚は、赤鯛や黑鯛の樣に、もとは竪に泳いて居たものだが、身體が華奢に出來て居たところから浪の動搖に堪へないで、平らに泳ぐやうになつた。すると、片目ては不便なのて下に隱れて居る目を頻りに使へる樣にもがいた。その習慣が段々子々孫々に傳はつて、つひに兩方とも上手の正面に据わる樣になつた。それて、あの可愛い姿になつたのである。

男子に對抗しようとする獨身女や後家さんは、もう、女性ともつかず、男性ともつかず、強いて云へば、中性的お化けてある。オールドミス（老嬢）と云へば、外國ても、交際社會の厄介物になつて居るのだ。比目魚

の様にしなやかに、花の様に麗はしくあつてこそ、またあらうと努めてこそ、初めて女の精神は男子の歡迎するところとなるのである。今日の女子教育界に、無趣味不自然の賢母良妻主義が跋扈して居るのを見ると、僕等は全く恐縮するのだ。女の淺墓な知力に訴たへる教育が何程の効果があらう？渠等の所謂賢母良妻は他日の愚母惡妻を養成する意味である。子供の三味線やオルガンを稽古してやることも出來ねば、來客に對してもヒステリイ面をして、之を愛想よく持て爲すことも出來ず、夜會に出ても、手腕が足りないから、露骨で、少し美男らしい人と舞踏てもすれば、直ぐ燒き餅燒きの亭主をおこらしてしまう。男女間の趣味がよく分つて居ないて、家庭問題をやかましく云つたつて、僕等は何の興味も感じないのである。

耶蘇教の傳說に據ると、アダムとイブが罪惡を犯してから、神といふお父さんに對して恥かしくなつたので、先づイブが木の葉を腰に纒ふやうになつたとある。然し、これは罪惡からではなからう、男女間の趣味の絕頂なる戀愛を感得してから、女の心が奧床しくなつたのを示めすのである。また、之と同時に、男は事業をする餘裕が出來た證據である。不斷に接して居る自分の女房よりも、人の細君の方が何となく奧床しく見えるのは、このイブの心の轉機を考へて見ると、必らず明白にその理由が浮んで來るだらう。衣服の制度は、普通人の考へて居るよりも、一層深い意味を持つて居る。これも禮儀の一つだと云つてしまへば、それ迄であるが、人間といふ一つの存在を、假りに肉と靈とに分つものは衣服である。太陽の白光に對して三稜鏡を置けば、奇麗な七色が分光される、婦人が衣服を着れば、奧床しい二元的性質を帶びて來る。この時、婦人は家庭の一員であるよりも、社會の常員となつて居るので——男には、剛健な本性を發揮させて、その任務の事業に當らしめ、自分はその靈性を解放して、自由の精神を養ふのである。この時こそは、廣く世間の男子の心を受け入れるだけの自由がある。この自由は乃ちどこて滿足さすことが出來るかと云ふに、交際

社會である。

女が社會の常員として自由になつて居る時は危險と云へば危險だが、その氣力を養ふのもこの時である。肉情を押さへて、男子と靈の交通をやつて居る間は、その亭主も何の故障をも云ふ權利はないのである。航海は板子一枚を以つて生死を分つが、男女の交際は絹布一枚に依つて、向上と墮落とを隔てゝ居る。然し、わが國の女が早く老い込み易いのは、男子がその精神までも束縛して、あんまり家にばかりくさ〱さして置くからで——多くの男子に接して、談話の出來る女は、いつまでも若やいで居るものだ。僕等は、たとへ五六拾歲を越える樣になつても、仕事から歸つて來ると、生き〱した女房の迎へに出るのを望むのである、徒らに死んだ道德や貞節を說いたところで櫻の花を鹽漬けにすると同然、血の通つて居る女が乾枯びてしまつたら、つまらないではないか？女房や娘を家にばかり押し込めて置いて、ヒステリイや子宮病に取りつかせ、たま〱夜會や園遊會へ出すと、さながら出山釋迦の樣に痩つこけた風來者では、お話しにならないではないか？

衣食住の問題にばかりかじり付いて居るものは取り餘けとして苟も人間らしい人間生活をやつて居るものには、その胸中に、綽々とまでは行かないとも、餘裕が出來て來る。この餘裕を滿たさうとする傾向が、人間の生命を持續して行く根底である。今一層深い言葉を以つて云へば、この傾向は、人間が人間の根本生命の持續を渴仰する努力である。文藝を有しない國民は野蠻の域を免れないが、文明の最高發現たる文藝のすべては、この渴仰努力があつて、初めて根底を得るのである。シルレルは之を遊戲性を以つて解釋したのだ。人生に缺くべからざる趣味と生命とは、一に以つてこの性に係つて居るといふのだ。ところが、今、婦人の地位を考へて見るに、この遊戲性（を眞正の解釋法と見れば）の對象たるべき資格を備へて居る。だから、或意味に於て、女は矢張り一個のおもちやである。

然し、僕、實は、藝術の世界を以つて遊戲的不嚴肅

の假現世界とする、哲學者流の見解には、無條件て贊成することが出來ないのであるから、文藝なるものが人間精神に及ぼす大切な影響を渠等よりも一層切實に見て居ると同時に、女に對しても、肉靈融合の間に、一種云ふべからざる微妙な味ひを味はうことが出來ようと思ふ。上品とか、優美とか、高潔とか、熱誠とか、奮發とか云ふ態度は、この趣味があつてこそ、初めて眞正に受け取れるのである。純粹な文藝を味はうことが出來ないものには、婦人存在の眞意を悟ることもなからう。女は造化が最も卑近に、また、最も解し易く創作した藝術品である。之を賞し、之に親しみ、之が性質を分有するのは、造化の餘裕ある懐にいだかれた氣持ちになる樣てなければならない。之を爲し得ない唐變木は、人生の愉快を過半取り損ふ奴て、天の與へた幸福を有し得ないのは、不幸中の最も不幸なものだ。

それては、結婚といふものが單へにこの幸福を全うする所以てあるかといふに、あながちさうは受け合はれない。その上、結婚の爲めに、前にも云つてある通り、得らるべき幸福の範圍を固定してしまう恐れがある。エマソンの樣な着實な議論をする哲學者でも、原理としてはスヰデンボルグの説を贊成して居る程て、たゞ之を實際にすれば、現今の結婚制度を破壞してしまうからと云ふ常見から、矢ッ張り、現世ては、男はあばた面、女はお多福ても、互ひに勵まし合つて、たとへ相互にその缺點を發見しても、直ぐ他の一層慕はしい人にくッつく樣なことはしないて、夫婦相呼應して、精神上智力上の修養に、向上的手段を取るがいゝと云つたに過ぎない。この論文は無限微妙な趣味を問題として居るのてあるから、手段の樣に狹小粗雜な權道に立ち入るには及ぶまい。一言にして云へば、男女間の趣味は戀愛であつて、戀愛は抱擁を以つてその絶頂に達する。然し、物の絶頂に達した趣味は、もう個人的になつてしまつて、それは、個人その物の刹那的生存には、空腹に對する食物や、猛火に投ずる焚き木の樣に必要なものであるが、社會としての問題にはならない。だから、社會として一般に感じられる男女間の趣

味は、戀愛が抱擁に至るまでの道筋である。結婚といふことを抜きにして考へれば、女はどんなお多福でもどこかに愛嬌のあるものだ。女は、實に、多忙で苦痛の多い男子の慰藉者である。だから、男女交際の上に於て、僕等が正當に感じていゝ極度の趣味は、夫婦の情愛を絹布一重の隔てを以つて相傳へ得るところまでである。それ以上に行くと、問題は別になるわけだ。この心持ちをくづさないで男女の交際がある間は、自由と愉快と若氣とは、危險に落ち入らないで、靄然、春の霞の樣に社會の空に棚引くのである。

社會はどうせ弱肉强食である。理窟を云つたゞけでは駄目だ。實力の强いものが上に立つのである。男女同權などは、とても實行さるれものではない。外國では、女をうはべだけでも尊敬しなければ、自分も尊敬されない。わが國では、裏面にあつて、女を重寳がらねば、一家は治まらない。內外表裏の違ひこそあれ、女子はどうしても男子の奴隷である。かう云ふ風に弱いものにされても、尙、女子が社會に立ち場のあるのは、將來は尙更らのこと、この苦痛と悲哀との多い世にあつて、一般男子の慰藉者たるべき資格を備へて居るからではないか？女は、だから、交際社會の花でなければならない。その交際範圍の狹少と貴賤とは、その人の境遇に從つて生ずるのだ。交際する爲めに墮落するやうなものは、交際しないでも、矢ッ張り墮落して居るのである。その間にあつて、獨身者が自分の配偶を求め、配偶者が氣の合つた人々と親しむのは、何も惡く云ふべきではない。寧ろ、人間自然の行動である。更らに人間の心を若やかす精神の自由である。外國などでは、あれ程交際が盛んに行はれて居ても、墮落者の見えないのは、墮落するものゝないではない、さう云ふ弱蟲、意氣地なしは社會全體から齒牙に掛けて居ないのであるのだ。

然し、それにはその習慣——詳しく云へば、素養と錬修——が必要である。たまく男女交際會を開いても、某會であつた樣に、男は男、女は女、席に隔てをつけて會食したからとて、何の役にも立たない。これ

は、青年男女は勿論、小兒の時から始めてかゝらなければならない。わが國では、小兒でも、男女の遊んで居るのを見ては、之を笑ふものが多い。ところが、外國の兒童などは、男兒も女兒も一緒になつて、木のぼりをしたり、野遊びをするのが普通である。或時、外國の男兒が、一緒に遊んで居た女兒の帽子が風に飛んだのを追つかけて、堀端まで走つて行き、身を以てその上に倒れて、漸くそれの水中に落ちるのを助けたのを、僕は見たことがある。わが國の男兒なら、そんな場合に、たゞあざ笑つて見て居るのが多からうと思はれる。わが國では、男子がラブレター(戀文)を平氣で書く習慣もないし、また、女子の方でも、外國婦人の樣に、何回も何回も、男の意を拒絕して、その眞意を見極めた上で、適當な返事をするまでの餘裕もない。外國人なら、その生徒が作文の時間にラブレターの稽古をしても、紀行文や論文と同じ樣に取り扱つて吳れるのである。これ程さばけて來れば、社會は一層活氣を帶びて賑かになるだらうし、又、家庭に於ても、メランコリャの束髮や丸髷がごろついて居なくなるだらうに。

婦人問題には必らず家庭といふ觀念が入り込んで來て、それを獅子や虎の穴の樣に大切視するのが、男女に拘らず、餘程えらい樣に見做される傾向が出來て來た。然し、家庭問題は、ふかしパンの廣告ではないが、馬鹿か仙人の云爲すべきことであつて、苟も天下に一事業をしようといふものには、之を口にするのも恥づべき程けちな問題である。何も、外國人がホーム〱といふからとて、僕等もこれに附いて家庭〱といふには及ばない。スヰートホームなどいふことは、スヰートポテトーのほこ〱燒けて居る間のことで――その熱がいつまでも續くものだと思ふのは空想に過ぎない。僕等の家庭は、獸性とお三どんと子守りとの三位一體的コンヹンションと見て置いたらよからう。この形式に滿足して居る生活は、餘裕も何もない狀態であつて、そこに安心を得るものは、事業の失敗者か、世間知らずの迂濶者であらう。多少世上の辛酸を嘗めて

而もなほ野心のあるものには、正直なところ、子供の笑つて與れるよりは、女房の笑つて與れる方がいゝ。否、女房として女性が近づいて來るよりも、社會の一員として婦人が接近して來る方が面白い。

　夫婦の關係は、特別な目的を有する家庭に於てこそ、たとへば國家に於ける君臣と同樣、破るべからざる約束ではあるが、社會の常員として見れば、男女の關係は左程獨占的性質を帶びて居るものではない。家庭と社會とは、或程度を越えれば、必らず衝突するだらう。この時に當つて、敗軍の將は前者の柵内に退縮するもよからう、然し、活氣をいだいて尙發展しようとするものは、いつまでも後者の範圍内にとゞまつて居たいてはないか？この多忙で而も奮勵を要する日本の現代に於ては、僕等は成るべく餘計な重荷を負ひたくない。家庭問題の如きは、たゞ物質上の維持ぐらゐにとゞめて置いて、社會の男女として、廣くその趣味と精神とを交通させたいてはないか？過渡時代には、犧牲者を出だすことが多いのは當前である。たゞ誰れしも自分の女房や娘を犧牲に供したくないから、ぐづ付いて居るのである。然し、犧牲が多くなればなる程、男女の趣味が精錬されるのが早くなるわけであるから、僕は遠慮と虛僞とを退けて交際の自由と男女間の趣味とをありのまゝに說明したのである。（明治卅九年十一月十日）

徳川家康遺訓の英譯

家康遺訓の英譯四を得たり。今之を下に揭ぐ、讀者讀んで自ら彼此對照し見らるゝも亦一興ならん（編者しるす）

和田垣謙三
宮森麻太郎
デーニング
南石生

◎原文

人の一生は重荷を負て遠き道をゆくがごとし。急ぐべからず、不自由を常とおもへば不足なし。こゝろに望おこらば困窮したる時を思ひ出すべし。堪忍は無事長久の基、怒りは敵とおもへ、勝事ばかり知て

まくる事をしらざれば害其身にいたる。おのれを責て人をせむるな。及ばざるは過たるよりまされり。

PRECEPTS OF IYEYASU.

(1)

Life is like unto a long journey with a heavy load. Let thy steps be slow and steady that thou stumble not. Persuade thyself that imperfection and inconvenience is the natural lot of mortals, and there will be no room for discontent, neither for despair. When ambitious desires arise in thy heart, recall the days of extremity thou hast passed through. Forbearance is the root of quietness and assurance for ever. Look upon wrath as thy enemy. If thou knowest only what it is to conquer, and knowest not what it is to be defeated, woe unto thee! It will fare ill with thee. Find fault with thyself rather than with others. Better the less than the more.

Translated by Prof. K. WADAGAKI,
of the Imperial University.

(2)

The life of a man may be likened to travelling along a long road with a heavy burden on one's back. You must not make haste in your journey of life. If you bear in mind that insufficiency in means is the common lot of every one, you will find no reason to complain of any want. If an ambitious desire arises in your mind, recollect your time of difficulties. Patience is the foundation of one's safety and perpetual prosperity; and on the other hand, anger is an enemy leading one to ruin. Evils will overtake you if you know only how to conquer and not how to be conquered. Reproach yourself but not others. Deficiency is better than excess.

Trans. by A. Miyamori.

(3)

Man's life is like a Journey. He has a heavey load to carry and a long way to travel: he must proceed slowly.

If he ever bears in mind that his mortal condition here is one in which a great deal of inconvenience

must be put up with, he will never know what it is to be discontented.

When his heart is full of expectation, let it be tempered by the remembrance of the troubles through which he has passed.

Let him be patient and enduring, and nothing can happen to injure him to the end of time. Let him look upon anger as his enemy. If he knows what it is to canquer, and knows not what it is to be defeated, some mischief must overtake him.

Let him reprove himself rather than reprove others.

Let him bear in mind that not to reach a thing aimed at is preferable to going to excess in anything.

By W. Dening.

(4)

Life is like a journey that a man takes over a long distance with a heavy burden. Hurry not. Think dissatisfaction your lot, and there will be no complaint. When ambition calls upon your mind call back an hour of adversity. Generosity is the root of peace forever. Consider wrath your enemy. If you know how to win and know not how to be won, harm will be upon you. Suffer yourself rather than anybody else. Things done short would be better than things overdone.

By Nanseki.

怪物傳

覆面冠者

柱に凭れて眠つてゐる人

世に用なき覆面冠者も、二三ヶ月來、俗用を以て暫らく中央公論の讀者に遠かつて居た。編輯先生。屢〻來りて、續稿を促すと急。——明治三十九年も、本月一ト月で終稿と爲るのであるから、罪過消滅の爲に、茲に本稿を續けて、怪物傳も之て結末とする。

五

印刷工場の床柱に、こくり〳〵と午睡を貪つてゐる

模樣を見ると、其處等の隱居殿と差違なく、明治初年に、久留米の古松簡二と相竝んで、説客の名を博した當年の俊髦であるとは、如何見ても、見えない。つるりと、頭天の禿げた、平々凡々の爺樣。……併しながら、親しく膝を交へて、凝然と、その服裝等を見ると、森嚴なる法廷で、「今村佐吉」の艶名を吹聽して、玉野判事を驚かした昔日の面影が、那邊やら隱見いてゐる。

といふのは、その着けてゐる着物だ、羽織も、下着も、燃へ立つやうな眞紅の、卓子に上せてある風呂敷も、灼爛のやうな、ぱッとした毛斯綸の巾、——六十の坂を超いた老人の風采とは見へぬ。こくり〳〵と、柱に凭れて眠つてゐる人は、年齢と擧動とに不釣合の斯くの如き華やかな、陽氣な風采に、四邊を輝やかしてゐるのだ。

併しながら、此の「柱に凭れて眠つてゐる人」の閲歴を知つた者は、その風采も、その不釣合も、更に不思議とは仕ない。と言つた丈けでは讀者に合點がゆかぬであらうが、此の老人が、花魁の裲襠を羽織つた儘芳原の金瓶大黒から、傳馬町の獄舍に拘引げられたので、十年の久しき、拷問、糺責の下に、その襠を着た儘、「粋」と「剛情」とを混淆に未決を通ほした人物であつたとを思ふと、印刷工場の床柱に堅氣と爲つた今日に至るも、なほ紅裏の衣服に華美を現はしてゐるのが無理もあるまい。

特にその人物を現はしたのは、今業の艶話を語つて、三條公等を驚かした獄中時代で、古松簡二が讒謗律に觸れて入獄した新聞記者等に推されて、雄を稱してゐる傍らに、當年の岡崎恭輔は、傲然と裲襠を羽織つて法廷に現はれ、兇惡なる强盜、殺人者の間に羽振を利かせてゐたので。——闇中に飛躍した陰謀當時、秋田の初岡敬治より、五百圓の金員を受取つた請取書が、玉野判事の手に入り、其の署名に今村佐吉の假名まで用ゐた次第を談られると、「三條公等が奥に控へて、法廷の模樣を偸聞してゐるのを素知らぬ顏に、例の明晰つた聲で

『今紫といへば、天下に聞へた美人なるとは、判事閣下も御承知て御座らう、現に顯官の地に居らるゝ某公も、此の美人の下に窃に駕を枉げらるこ
と承り及ぶ、某も、男兒に産れたる甲斐を以て、某公の艶福にあやからん爲に、今紫の名に似せ、今村佐吉の名を用ゐたので御座る
と大口開ひて答へたので、流石の玉野判事も、面上に朱を濺いて、暴言を咎めた。それと見た彼は、頬邊に笑を湛へながら、
『判事閣下、某は今村佐吉の名を用ゐた理由を答辯したので御座る……

六

當年の岡崎恭輔は、眼中、王公貴人なく、神聖なる法廷に立つても、謀叛人の骨頭を發揮してゐたのだ。のみならず、獄中より出てゝ、丸山作樂等と棒を組み、井上馨、山田顯義等の意を受けて帝政黨の組織に關係し、大阪に大東日報を起こして、責任ある地に立つても、集會の席などには、何時も褞袍を纏ふて、傍若無人を極めた。稜張つた理屈が初ると、すと席を起ち、
『僕は新地へ參らうと存ずるから、之て失敬する
と藪から棒に、會議を中途にして、退席するのだ。左様だ、才辯双なき彼は、殊更に冗語を挾みて、一坐を煙に捲いたのてある。
間もなく政黨に關係を絶ち、藤田傳三郎等と交りて實業に身を投じたが、爾來幾變遷、曩に陰謀に失敗せると同じく、事業に失敗して、遂に「杜に凭れて眠る人」と爲つたのだ。——然かも、その前身に右の如き閲歷あるを知つて、杜に凭れて眠つてゐる模様を見ると、詩人にも讀まれず、畫家にも書かれざる一種特異の情趣が、胸中に湧く。特に袖口に現はれる紅絹裏は、最も能くその特色を語つてゐる。

七

此の「杜に凭れて眠つてゐる人」の傍らに立ち、その眠を動かしたのは、日本橋の旅館に陣取つてゐる岡本柳之助だ。
岡本柳之助——岡本柳之助と言へば、鹿兒島の健兒

に

近衞巡査に大砲が無けりや
　花のお江戸に躍りこむ

と唄はせた、その近衞兵を煽動して、竹橋暴動に浮名を流した以來、常に裏面に控へて、惡戲を書いてゐる怪物男。特に朝鮮問題に爲ると、日清戰役前後迄は、何時も顏を出して、種々の惡戲を畫き、中にも後藤象次郞が、佛蘭西公使を語らつて、朝鮮に大飛躍を試みんとした時の如き、張良然と、後藤の帷幕に控へて、平地に風雲を捲くの計畫を立て、日清戰役前も、金玉均が上海に橫殺せられたると知るや、山田顯義や、西鄕從道等に會して、日清戰役の下繪を書き、三浦梧樓が公使として朝鮮に乘込んだ當時は、最も得意時代で、大院君の腹中に入つて、飛ぶ鳥落とす勢であつた。——其れも一時、杉村濬等と語らいて、王妃殺害の圖を書いて蹉跌して以來、朝鮮は我保護國と爲つて、最も得意であるべきに、寂として、音も沙汰もないのは不思議と思ひきや今度は東京の最中央（まんなか）、日本橋附近の吳服館に、によろりと姿を現はし、然かも著述家——工藝者として現はれたのは、空谷の跫音である。

八

佐々友房死し、平岡浩太郞死し、東洋豪傑の跡絕へんとする今日、岡崎恭輔は印刷工場の床柱に凭れ、岡本柳之助は、東京の中央に乘り出したのは、面白い圖だ。然かも今に意氣衰へず、大發明に成績を擧げて、大金持に爲らんと婆婆ッ氣を失はないのは、ます〳〵妙だ。——吳服館の三階、二十疊の大廣間に布團を襲ね、どつかと、膝を組んで

『大丈夫、今度は儲かる…………ナニ、我輩は朝鮮で失敗したと。功名利達の爲に、我輩は朝鮮で働いたのではない

と氣を吐いて、一坐を驚かしてゐる。因に此の朝鮮豪傑は、蒸汽力を用ゆる飯焚機械を發明したので、今、吳服橋附近の工場で製作に取り掛つてゐるのだて、此の機械の製作を監督してゐる傍ら、殊勝にも幕末の紀州藩史を書いてゐる。——中村楯雄の手を以て、羽田

恭輔に會つたのも、此の出版物が、中間を爲したのてある。

九

明治初年に、靑公卿を煽動して、新政府を顚覆せんとした岡崎恭輔と、朝鮮の伏魔殿に風雲を起こさんとした岡本柳之助若し芝居であり、小說であれば、喝采の聲で迎へらるべき顔振、併しながら實際は其樣注文通りゆかぬ。もし此の兩人にして、今より十年ばかり前であると、或は小說的事實も描出せらるゝてあらうが、今は其樣もゆかぬ。——唯、歷史に書かるべき此の兩人が、一人は文字を拾ふて歷史を書き、一人は其の印刷に關係するのは、奇觀といへば奇觀だ。取る年は爭はれぬもの、如何かすると、互に心細いともいふ、特に友人故舊の世を去りゆくのが最も感慨を惹くらしい。岡本の如きは、「機械の出來を一段落として今後は佛敎に一身を投ずる」など、來客に語るともあり。

殊勝は之のみならず、本年の四五月頃より、岡本は三好物の隨一てあつた飲酒を廢したといふなども、著しい事實だ。三好物とは、酒、女それに書物！當人は、書物は好物の隨一て、之れ丈は死ぬ迄廢められぬ、と言つてゐる、美人は如何かと言へば

『左樣ぢや、酒のやうに、全然と廢められぬわいと

と、つるりと頭天を撫でゝ、大笑してゐる。——酒のやうに、全然と廢められぬといふ岡本の意氣は、買つて遣るべしてあるが、その頭天を見ると、すべ〳〵と光つて來たのが、お氣の毒樣！。序に、岡本は一二年來號を東光と改めたことを讀者に注意して置く。

本欄は次號より、名を「觀苑」と改め益々趣味多き材料を掲載すべし。今已に確定したる次號の寄稿者は

内田魯庵氏　增田藤之助氏
和田垣謙三氏　畔柳芥舟氏
佐々醒雪氏

なり。御委細は卷頭及び卷末の廣告を見べし。



世界海軍の趨勢

『萬朝報』

曩には一萬八千八百噸の巨艦、ドレッドノートの英國に進水せらるゝあり今又一万九千二百噸の薩摩艦、我れに於て進水せらるゝを見るもの誰か日露戰役後に於ける世界海軍の一大變革と一大進歩とに注意し、而して今後の趨勢如何に想到せざるものあらんや

日清戰爭後僅に十年、乃ち日露戰役當時に於ける世界海軍の實力及び狀態が其の十年前に比して如何なる變革と進歩とを實現し居たりしかは、今之を叙說するの要あらざるべし只日露戰役後、乃ち現在の狀態及び將に來らんとする變革と進歩とに關しては、聊か之を論述するの要あるを認む

千九百年乃至千九百四年の間に於て、英米日獨露佛伊七箇國に起工せられたる戰鬪艦は一万六千八百噸より一万三千三百噸の間に限られ、未だ一万七千噸臺を破りしものあらざりき、又其備砲の如きも、中口徑砲の口徑著しく增加せられ、攻擊力の增大は、頻りに計畫せらるゝ傾向ありしも、未だ中口徑砲の蹤影を失ふが如き變革は是れあらざりき、然るに千九百五年、英國はドレットノート號の起工に着手し、我れまた薩摩の建造を企劃するや、列國海軍の視眸は一齊に之に集中し、周密なる調査と、遺漏なき一研究の結果は、先づ獨逸をして、本年六月及び九月に、一万八千噸十吋七砲十六門を備ふべき巨艦二隻を注文せしむるに至り、次で佛國をして約二万噸、十二吋砲四門、九吋砲十二門を備ふべき一艦及び一万八千噸、九吋砲十六門を備ふべき一艦の建造を計劃せしむるに至れり、又米國は曩に一万六千噸とすべきか、將た一万八千噸とすべきかに付き、尙ほ未定と傳へられたりしが過般の外電は二万五百噸に內定したるを報ず、而して此の新たに建造せらるべき軍艦は十二吋砲八門を備ふべきものと、十吋砲十六門を備ふべきものとの二艦なるが如し、而して露國もまた約二万噸の戰鬪艦新造を計劃せりと傳へらる、乃ち之を日露戰役當時の列國海軍に比するに、排水量に於て三千噸乃至五千噸を增加し、備砲に於て中口徑砲其蹤影を滅し、口徑均一の大口徑砲を採用するの變革進歩を見るに至れり、又速力に於てもドレッドノートは廿一節、薩摩及び佛國計劃のもの、は廿節四分の一に達すべき豫定なりと云へば、之を從來に比して、三節乃至四節の增加と云ふを得べし、而して一方巡洋艦に對する方針を見るに、これまた爭ふて其艦型を擴大にし裝

甲を堅牢にし、備砲を増大ならしめ速力を増加せしむるに於て一致し、何れも従來の戰鬪艦と對峙して、殆んど遜色なきに至らしめんと企てつゝあるものゝ如く、今や列國海軍の趨勢は戰鬪艦に於ても、又巡洋艦に於ても、事實上爲し得べき完備の極限に達せしめんとしつゝあるを見るべし、

然るに昨今報道せらるゝ所によれば、英國に於ける製艦方針は遽かに一變せられ、戰鬪艦の建造はドレッドノート一隻に止め、明後年度よりは大巡洋艦の建造に着手する筈なりと云ふ、其理由とする所は、今春起工せられたるインフルキシエーブル、インドミテーブル、インヴイシブルの三巡洋艦は、何れも一万七千餘噸を有し、其堅牢及び兵力に於て、優に戰鬪艦に對峙し得べしと云ふに在りと、事の利害得失は暫らく置き、此方針一變の結果が遠からずして列國海軍の製艦方針の上に更に新傾向を實現し來るべきは殆んど疑ひを容れざるに似たり、

今や世界第一を以て稱せらるゝ大戰鬪艦薩摩號進水せられて我が海軍の威力名實共に揚るを歡ぶ等、甚だ國民の意を強うするに足るものあり、然れども前叙のごとき列國海軍の趨勢を顧みれば、今後の製艦方針に關して尙ほ大に注意を怠るべからざるものなしとせず、乃ち茲に其趨勢を略叙して世人の參考に供す。

余が商界革新論

『三田商業界』

松岡康毅

突然かゝる問題に接しては別にこれと言ふ程の說も持つて居ない。其れに福澤派を始め多くの論客は皆自由貿易を主張し、政府は餘計な干涉をすると斯う大聲で罵り、一方實業界の人間は一から十まで補助しろ、保護せよと言ふ、だから農商務大臣などは頗る迫り惡くゝもあり、減多な事も言はれもしなければ、なされもせぬ、が然し、日本の商業の信用といふものを先づ增進するといふ事が第一着、其より以上に大切な革新はあるまい、其證據には英國人でも米國人でも取引をするに政府が保證して與れゝはやるが、さもなくば當にならぬと言ふ、常に卑しんで居る支那人の方が商賣になつては信用を重ずる、日本人は外交上、政治上に於ては信用を重ずるけれ共、商業上更に信用が出來ぬ、常に見本と違ひ、イッモ粗製濫造品を直ぐに押付けるといふ事を朝に晚に耳にする位だから、現今の商業界を如何に革新するかと言ふて、他に何を爲さいと言ふ程のものもない、兎に角信用を正しくするといふより外に、差向き秘策も名說もない、之に限る。信用さへ善く成れば資本は何處からでも來る、即ち信用は資本なりで至極陳腐な言だが矢張り實際はそれなのである、或英吉利人が日本で出來る物品を買いたいが、其商人は誠に言い惡いが信用が置けない、何とか商工局に於て人を指名し、差圖をして與れるならば其れと取引をしたいといふて來たが、それはどうも保護好きの政府

と雖も、商人の保證に立つ譯には行かぬから出來ない、亞米利加人もおなじこと、先々月來て居る亞米利加人が一つ日本の製造家と共に仕事をしたい、併ながらどうも直接では危險だ、兼て一二の人ともやつたとがあるが、どうも成蹟が良くない、何とか政府が仲へ這入つて呉れないかといふ樣なものもある、だから一般に商業家が信用がない、とこう言うたら農商務大臣が日本の商業家を誣告したと言はれるか知らぬが、現に我輩は、一二大事な取引の出來る人からさう言ふ事を聞て居る、其れて痛切に感ずるのは見本をやつても其通りの物が出來ずに、段々惡くなつて來る、今日發達した事業でも大抵二度目三度目に興つて漸く出來て居るといふとである、例令ば羽二重の取引にしても、始めは富山でも石川でも左程までゝはなかつたが、段々惡く成つて信用を失つた、その爲に政府からも喧ましい、當業者も損をするといふ風て、是風てはならぬといふので回復策を講じて今日と雖もまだ兎角一定しない。小さい工業者が區々に成つて其町に軒を並べて居るから、中に獨り惡い奴が出來ると他のものも引倒される、其だから簡單に何を新革したらば宜いかといふと、別に耳新しいとも無い、極く陳腐な言てあるけれども實際に於て充分行はれないのてあるから、信用を正くするとが第一てある。いくら政府が保護すると言つても、一々何から何迄保護して、斯う歩けと言つて繩でも引張つてゆく譯にも行かぬから、其邊は實業界の心ある者が先に立つて、共々矯正して行かればなるまい、政府としては共同組合とか產業組合とかいふものを拵へて、成るたけ其發達を完からしむるをなして居るのである、故にこの信用を博するといふ事が我國目下の商業界革新の主要であるといふのである。

日本趣味と西洋趣味

『音樂新報』　　　　島　村　抱　月

こゝにのべんとする講演は日本趣味と西洋趣味と云ふ題なるが、本題に入るに先て少しく趣味の何者たるやを說明するの要あるを見る、勿論趣味と云へば已に自明の事にして特に說明を要せざるが如しと雖も、大體に於て之を分て二種となす可し、一を通俗的趣味、一を文藝的趣味と稱せん、而して通俗的趣味は單に面白い、甘味い、好き嫌い、快い、と云ふが如き感情に止まり、流行や食物の如き者に對して起る所なり、之に反して文藝趣味は好き嫌い快いと云ふのみならず、[illegible]おとなしい、奥床しい、上品高尙と云ふが如き感情の伴ふ者にして文藝に對し又自然の美景に對して吾人が感得する所の者なり

扨て西洋人が日本の家屋、裝飾品、製作品其他の者を評するや。皆一擧に文藝的（アーチスチック）なりと云ひ、又日本美術に對しては感覺（センス）の微妙（デリケート）なるを稱す、されど之を惡評する者は、日本美術は幼稚にして空想的、奇怪にして妖怪的、不自然にして模樣的なりと云ひ、又概して日本の製作品は通俗的と文藝的とを問はず悉く小規模なりと評す、されど此西洋人の惡評を考察するに、幼稚なりとの批評は勿論一面物質的智識に於て缺くる所ある

を示す者なるも、他面より見れば幼稚とは現實より離るゝの意にして、離るゝは美術の一要件なれば日本美術の幼稚なる必ずしも惡しからず、又不自然なり奇怪なりと云ふも、元と是れ之を使用する人の手腕如何に依ては反て大に美趣を發輝する者なるを以て、不自然、奇怪、妖怪的なる必ずしも之を疾むを要せす、又模様的なりと云ふは、自然を自然のまゝに寫さずして、自然を醇化し理想化するの謂なれば、是れ亦惡しゝとせず又小規模なりと云ふも、凡そ文藝は大宇宙を小化し大天地を小天地に化するを以て其一要件となす者なるが故、小規模なるは必ずしも日本畫を傾はす者にあらずとなす可く、之を要するに西人の日本美術に對する批評は文藝的なりと云ふに歸着す

然るに日本人は西洋の美術に對しては如何に口さがなき人なりとも、西洋美術は幼稚なり即ち物質的智識に於て缺くる所ありとなす者はなかる可し、誰れしも西洋美術は最近式(アツプツーデート)にして今々し(モダーン)と云ふ點に於て一致し、更に進んで之を俗なりと貶下し去る者あり、凡そ西歐の作品は通俗的なると文藝的なるとを問はず皆共に强盛、豐富、複雜、等の致趣全體に横溢し、淡白なる色を用ひずして華々しき迄に濃厚なる色を用ひ、花卉の如きも色彩の强壯にして豐富燦爛たる者を好む、之を概括して云へば知識的なり論理的なり而して幾何學的なり、歸する所日本趣味はより多く文藝的にして、西洋趣味はより多く文藝の本領に遠かりしより多く通俗的により多く非文藝的なり。

然らば文藝趣味其者は如何にして起り來れると云はゞ、文藝趣味の源泉は東西共に同じ、即ち煩鎖なる差別世界を超越して恍惚自失忘他の絕對界に陷沒するの時、其時にこそ文藝的趣味は油然として湧起し來る、陶淵明の所謂悠然として南山を見るの境界は是れ實に文藝趣味の最高潮を指示せる者にして、文藝と宗敎との契合點は亦實に此所に存せり、而も絕對不二の平等界に入らんとするに二個の徑路あり、一は一切の差別を斷滅して平等界に入らんとし一は差別の荊棘林を悉く透過し盡くして終に平等界に入らんとす、一は消極的にして一は積極的、而して此消積兩種の色彩は又文藝の上に表はる。

日本文藝にはサビと云ふ者あり、即ち俳句茶の如きは一種のか細(ほそ)きさびしみあり、又日本畫は色を殺(サブデユー)して使ひ、何者を見ても日本の者は調子の低い弱いか細い所あり、是れ一切の物質一切の差別を斷滅し物慾を消し消して行く所終に貧しい寂しい境界に達するが故なり、而も是れと同時に絕對一味の平等界に沒入するが故に寂し味の中に一種のうれしみある所以にして、是れぞ日本趣味の特調西人の玩味する能はざる所に屬す、

然るに西歐の人は概して積極的にして差別の境界に足を付けながら差別其儘平等界に入らんとするが故に、現實のあらゆる者を詰込み、材料豐富にして充實するを以て、其藝術も又豐盛燦爛として强烈なる活動の氣を有す、勿論日本に於ても近松、西鶴、北齋、歌麿の如き濃艷富麗にして活動的の氣を帶びたる者あり、西歐に於てもシンボリズム、の如きセンチメンタリズムの如きライフアエル前派の如き寂寞枯淡(フアーロンチメ)の色を有する者も無きにあらず、されど之を概括して評すれば日本趣味は簡朴枯淡に

して西洋趣味は豐盛燦爛たりと稱す可く、今後暫らくの間は此對照依然として殘存するならんか。

將來の文體

『大日本』　上田敏

將來の文體に就いては、これまで種々の議論もあつたが、畢竟所謂言文一致體が最も適當なものであると云ふのが最も人望ある說らしい。十數年前に學者文士が盛んに之を論じ、今日では實際上、可なりの勢力を有つて來たので、殊に現代の事實を寫した小說、又は雜文は、殆んど全く此の文體を多く用ゐてゐる。氣の早き人は將來は此の一種に限ると叫びつゝあるが、併し純文學の中心とも云ふべき新體詩、餘韻を含ませた議論文等、凡べての莊重典雅なるものには、どうもまだ成功を見ないし、其他全體の彫琢は何れの方面にも現はれこないのである。そこで、一種の論者は始のうち、多少の犧牲は已むを得ぬ次第だ、何れどうにかなるだらうと放任論を主張する。此樂天說も一理あるが、一日も早く文學の隆盛を見たいと思ふ人々は精密に眞面目に此問題を研究したいと熱望するだらう。元來日本に於ては言語と文章と懸隔がある、勿論歐米諸國に於ても言語と文章とは同一では無いが、また日本程言語と文章との文法に差違はない、即ち日本は Bilingual の國で、二種の國語が同時に行はれてゐる觀がある。尤も東洋には日本以外にも此例があるので、支那は或る意味に於てこの二語國である、波斯印度亦然り。印度の戯曲を看ると、主人公の英雄貴女等は、其の臺語に梵語を用ゐ、下等の副人物は俗語を用ゐてゐる、亞剌比亞も此の傾向がある樣に思ふ。これ等の事情の起原、現狀を調べてみることは、此の問題に向つて頗る有益なることと信じる。又こゝに面白いことは新希臘の狀態である。新希臘の文字ある人々は現行の日用俗語とは餘程異がつてゐる一種の文章語を文學に用ゐてゐるので、それは古代希臘語を基礎として、近世文明の要求に應じる造語また新文脈を造り上げたのである。今の處ではこの新文章語が勢力を得てゐて、丁度日本の現狀のやうなのは、注目すべき事だ、これには他方に反對論者もあつて、しきりと日用俗語體を主張するが、まだ文章語の使用を止めるほどの勢力が無い。兎に角、現代日本と新希臘とは同じ事情に迫れてゐるので、此の比較研究は頗る有益で興味多からうと思ふ。故に私は之を專門の言語學者に勸めたいのである。又次には日本の言文は何故に、又、いつ頃より起つたか、此の二つを調べて見ると云ふことは、其の當を得たものであらうと思ふ。例へば源氏物語は果して平安朝時代の言語、その儘を寫したものであらうか、即ち源語が其頃に於ては今日の言文一致體の如きものであつたらうか、又竹取物語の文章は當時の言文一致であつたか、支那の文章が輸入されたために、在來の日本語が著しく影響を蒙つたことは、勿論云ふまで無いのである。又現存せる言文一致體の最古の例は如何なるものであるか、かゝる事柄を調べて見るのは、决して徒勞ではない。足利の始めに出來た『史記抄』、其

の後『蘇東坡の詩集』の講義筆記等は全く當時の言葉に出つたものと聞いてゐるが、『古今和歌集遠鏡』流の所謂言文一致體である。其の他狂言の如きものも多くは其の時代の口語を傳へた文體と云ふ事が出來やう。斯くの如く歴史上の見地より何故に言語と文章と分れしか、又何故に言文一致體は作り出されしかを學問の議論としたら、始めて有力な説にならう。而して私は此の言文一致體に就いて、あまり心配して前途を憂ふることは、却て文學者に不利益ではあるまいかと考へる、文學者は其思想を云ひあらはすに於て刻下最も適當なる文體を執つて進めばいゝのである。即ち今の處ては或思想に就いて古文、時文、言文一致體の何れにもゆく事が出來るので、尤も肝要なることは、思想を遺憾なく自由に發揮せらるれば其の文體はいゝのである。よく人が古文體に依れば、後世讀まれないと云ふものがあるが、さうはかりとは云へない。後世に讀む讀まれぬの問題は、形の問題のみではなく、質の問題である、だから、思想の充分に發揮されない文を作らば却て讀まれない事にもなるけれど、究局は達意を主とするのである、達意と云ふことは種々あれど、所詮は思想を自由に遺憾なく發揮することそれてある。何の方面にも左樣てあるが、特に文學に於て然りと思はるゝことは、大天才者は一種の征服者てあることて、多くのものを綜合するのは、天才の特權と見るべきものてある。覺束なき未來を想像して、單に言文一致のみ云へる思想を生命とし言文一致を書いて居る人は、却てつまらぬ目を見るだらう　（拔萃）

精神の力

『弘道』

福　來　友　吉

此頃は大變衞生々々と云ふてやかましいのてありますが、如何程衞生を嚴密に進歩せしめた處が、唯衞生を進めるばかりては、衞生と進歩と同時に病氣の方ても進歩するから、人の困難する事は同てある衞生は大事てあらふけれども唯、衞生ばかりによらずして、別に身体其物を壯健にせねばならぬと思ふのであります、今日の物質的文明は一種の衞生的文明てある、困難なる境遇に泰然として安住し居るには、大に精神の力を必要とする、所が今の文明は困難の境遇に堪え居るべき精神力を養ふものてなくして、精神の方は弱き儘にして置きて、外界の境遇を變化して自分の弱き精神に適する樣に爲さふとするのである。此も爲さればならぬ事であるけれども、此ばかりに依賴すると精神は益々無力となるのである。丁度衞生ばかりに依賴して居ると、身體が段々弱くなると同一の理てある。然るに精神的文明の方は自分の精神を強くして色々の困難に堪えるものてある。此度の戰爭に於て或外國人などは旅順は十萬の兵を以て三年も掛らなければ落ちぬと言ふて居つた、是れは器械的に計算するからさう云ふことになるが日本てはそんな長いことてなしに僅の間に落してしまつた。是は器械の力もあるけれども。精神の力がそれに加つて居るのてあります。平生旨い物を食つたから唯夫ればかりて困難に堪えられると云ふのてない。

此廣告によりて御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

英學生

山縣五十雄
斯波貞吉執筆

毎月二回(三日、十八日)發行、定價一册僅に四錢、郵税五厘半年分(十二册)郵税共五十錢、一年分(二十四册)同九十六錢、見本は往復はがきにて申込まれよ

英語雜誌中の最も好評あり、發賣部數最多なるもの、初めの頁より終りの頁に至る迄面白くして實益ある記事を以て充たさる、體裁の美なること全く西洋雜誌に異ならず、毎號詳細なる註釋を附錄とするが故に、やゝ進みたる學生は容易に之を讀み得て、樂みながらいつしか實用英語を學ぶを得べし、

東西雜誌

布施知足編輯

毎月二回(十日、廿五日)發行定價一册僅に三錢、郵税五厘、半年分(十二册)郵税共四十錢、一年分(二十四册)郵税共七十八錢、見本は往復はがきにて申込まれよ

英文文藝雜誌にして、英米の新聞雜誌より我國人にとりて最も興味ある記事論說、短篇小說、詩歌、奇聞珍談等を拔萃し、且つ英米文壇の消息、新刊英書の案內等を掲載し、詳密なる註釋を添へて讀み易からしめたる頗る重寶なる雜誌なり、地方にありて英米の新聞雜誌に接する機會乏しき人にとりては殊に便利なるべし

ABC雜誌

內藤明延執筆

毎月二回(一日、十五日)發行、定價一册僅は三錢郵税五厘半年分(十二册)郵税共四十錢、一年分(二十四册)郵税共七十八錢、見本は往復はがきにて申込まれよ

面白く美麗なる初學英語雜誌

「大阪毎日新聞」の評に曰く「英學生といふ學生間に甚だ評判のよい英語雜誌の弟分として新に生れたもので、初學者の爲めに愉快に苦なしに英語を學習させようといふのが其目的で、面白い話や美麗なる繪畫を澤山挿入し且つ編輯の方法も斬新で頗る巧に出來て居る、どの頁を開いても活氣に富んで益する所が多い」

「英語青年」の評に曰く「編輯法斬新にして極めて乾燥なる英語の初步の智識も此雜誌によつて面白く說明されたり英語の嫌ひな人も此雜誌を見は知らず識らずの中に英語を學ぶを得べし」

發行所 東京市神田區表神保町十番地 東西社

此廣告により御注文の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ





枯蘆

柳川春葉

十時を打つと、客はバタ〱席を立つた。一人二人には引止める口上も言つて見たが、最う斯う成つては手の着けやうが無く、主人夫婦はとう〱手を束ねて送りに出るのであつた。

戸外には木枯が吹荒れて、有る限の星が常よりも鮮に、漆の如き空に耀いてゐる。

「明日も天氣だなあ。」

誰やらが燈火の屆かぬ處で言ふと、

「那樣平凡な事を言給ふな。」

と此方で靴を穿いてゐた野島君が泥醉つた勢で罵しる。

「然し寒いな。」

「電車は未だ有るだらうか。」

「無論の事です。」

口々に門の處で話すうち、殿の人も漸く玄關の敷居を跨ぐと、一同が聲を揃へて、

「左様なら。」

「然様なら！　御免下さいまし。」

と細君の俊子が金切聲で叫んだ時、又一時鋭い夜風が吹込んで、危ふく燈火を奪られさうに成つた。

「是が歸り風といふのだらう。」

並んで突立つてゐた主人の增井茂は腹の中で斯んな事を考へながら、さつさと廊下を引返したが、女中が後片附を爲てゐる客間の前を素通して、空いた銚子が二三本淋しく立つてゐる納戸の長火鉢の向方に、やつと張合の無い懸聲諸共座を構へる。

火は熾に起つて、鐵瓶はガラ〱煮滾つてゐるが、家の中は可厭に寒く、時計の刻む音が高く耳に響く。增井は手當り次第に火を撥げ、小締と火鉢の緣に片肱突いて、妻が女中に指圖するのを茫然聞澄しつゝ、宛然勞れたやうに欠伸を爲て、其から卷煙草を吸ひ出した。

間も無く此處へ入つて來た俊子は、忙しげに火鉢の傍に寄り、兩袖から鳥渡手を出して又捷く飜へす拍手に、二つまで穿めた右手の指環が鐵瓶の橫腹あたりにキラリと光る。

「貴方最う座睡？」

「えゝ」と増井は大きな目を開いて「座睡なんぞ何時爲てゐた。」
「夫ても餘り靜ですからさ。今日は貴方大分御酒をあがりましたね。」
「然うかしら。」
「多勢だと何うしても強ひられますからねえ。けれど餘り平氣で飮んで被在るから、妾は遠くて心配してゐましたよ。」
「然うか。」
俊子は眤と見詰めてゐたが、夫は唯無頓着に煙草ばかり燻すので、其限其話は絕えて了ふ。
「ですが今日來しつた方は皆貴方の學校のお友達なんですか。」
「うむ。」
「彼の若い有村さんも。」
「あゝ、彼の男は二年ばかり後から出たのだよ。」
「其にしては豪いのですねえ、今では貴方よりか上なのでせう？」
「然うだ」と増井は平氣で頷く。
「それから彼の方の隣に被在た方は何てです。―
「星澤か……彼奴とは能く喧嘩を爲たものさ。力も無い癖に能く口返答を爲る奴だつたつけ。」
「今でも隨分お喋な方ですねえ。」と俊子は掌を頰へ當てゝ段々に座固る。

「子供の魂百までといふが、猶且氣質は變らんものだ。」

「でも貴方より身分は好いのですね。」

増井は煙草の烟に顔を顰めながら、又無邪氣に頷いた。

「野島さんと牛山さんと勝田さんは妾疾から知つてゐます、皆揃ひも揃つて立派な方ですね。彼の中では一人として屑がありません、何れも是も當世紳士で被在るよ。」

生際が悪いので、其庇髪は苦心した程引立たぬが、細面の色の白い、姿が好いのを自慢で、思切つた華美づくりに爲てゐる俊子は、實際二十六より二つ三つ程も若く見える。

増井は赭顔の、額の廣い、十二度と稱する近眼鏡を懸けた、體格は中肉中背丈ともいふべし。米琉の書生羽織の締在無く片絎に成つたのを、別に搔繕ふ氣もないが、其ま丶左の肩を聳して、無理無態に窮屈な姿を爲てゐる。

「あ丶戸外は寒ひでせう、彼の通り風が吹いてゐますよ。」

「多分北風だらう。」と増井は知れ切つた注釋を附ける。

「何故北風は寒いのでせう。」

「寒い處から來るからだ。」

双方負けず劣らずの事を言つて、笑ひも爲ずに丶丶まじく成つてゐたが、少時經つと俊子は秘と嘆息を吐いて、

「ですが貴方のお友達は皆えらいのねえ。」

増井は一寸と其方を見たばかり、是には何とも答へなかつた。

「何うしてなんでせうね。」

「えらいから出世したのさ、別に不思議は有るものか。」

「けれども皆大抵一緒に勉强していらしつたのに、今に成つて種々身分が違ふといふのは何だか解らないぢやありませんか。」

「お前も滿らん事を聞くなあ、同じ池で育つた鯉だつて、大きいのも小いのも出來る。鐵砲の彈丸や貨幣じやあるまいし。」と一息に辯じて「少とも不思議な事は無いよ。」

「其では畢竟運でせうかしら。」

「運も有るし、其人の質にもよる。」

此所にいたつてか俊子は更に大いに嘆息して「して見ると世の中は眞實に滿りませんね。」

「まあ然うさ。」

増井は好い加減に奧の手を出して其限話を切あげ、勝手に急須へ湯を注いで、出がらしの卅匁をガブガブ呑みはじめた。

「貴方、今日のお話では野島さんと勝田さんは此暮に又昇進なさるのですつてねえ。」

「自分達だけ其意でゐるのだらう。然し世渡が巧い奴等だから、或は然う成るかも知れん。」

「奴等だなんて、大層惡く有仰るではありませんか。貴方のやうな呑氣な方でも猶且燒けるのですか。」

「馬鹿を言へ！」と嚇として怒鳴つて見たものの、有繫は少しは疚しかつたか「何と言つたつて友達の事だ構ふものか。」と自ら辯護するやうな事を言つた。

「貴方もお友達に倣つて、少と世渡を上手になさると可うござひます。」

「那樣必要も無いし、又俺には出來ん事だ。」

「夫ても世渡の巧いといふのは、畢竟働が有るといふ事なのてせう。」

「ふむ。」と輕蔑した語調で「然う言へば然うさな。」

其顏色が酷く感情を損ねたか、俊子は勃然として手を引いた。て兩袖を確り胸に合せると共に、

「貴方は全く怠惰者てすわ。」

「ふむ。」と益す苦い顏。

「御自分が怠惰者てゐらつしやる癖に、無暗に頑固な事ばかり言つて、片端から人の惡口なのてすもの、貴方は眞實に負惜の強い方です、それて一體可いと思つて被在るの？」

「貴樣は又何につけても亭主の惡口ばかり言つてゐるが、夫て可いと思ふのか。」

「何てすつて……何時妾が惡口を言ひました。」

「今言つた。」と增井は子供のやうに躍起と成る。

「彼が惡口に聞えるのてすか、え貴方！能く考へて御覧なさい。」と俊子は急に涙組んて「夫ては貴方餘

り酷いわ。」
「變な奴だな、貴樣何を泣くのだ。」
「だつて……餘り酷い事を有仰るのですもの。妾だつて好んで斯樣事を言ひたくはありません。」
「言ひたく無ければ默つてゐるさ。」と此方は小さな聲を出して、卷莨を持つた手に火鉢の緣を叩いてゐる。
「默つてゐるなら何時までも默つてゐますが、妾だつて貴方の妻ですもの、お友達の事や何かを考へると、貴方の事が心配に成つて爲やうが無いのです。それですから若し斯うも爲すつたら彼の方達のやうにお成りなさるだらうと、つひ餘計な處に焦思して、心にも無い事を申すのですよ。それは男の身にしたら、女に斯樣事を言はれてお腹の立つのは無理もありますまいけれど、何うせお怒りなさる位なら、其勢でもつと奮發して下さいまし。然うすれば貴方だつて屹度彼の方達のやうにお成りなさるに極つてゐますわ。妾は是非とも其を爲て戴きたいと思つて氣を揉んでゐますのに、唯惡口を言ふなんて、全く貴方誤解してゐらつしやるのですもの……。」
增井は熟と俯いて聞いてゐたが、軈て常の平氣な語調で「それではお前は諫めて呉れたのだね。俺が餘り迂りしてゐるから、勵をつけて呉れたのだ。」
「然うですとも。」と俊子は未だ淚を拭いてゐるのだ。
「ぢやあ大いに感謝する。然し友達の成功したやうな手段を取つて、それて俺が成功するとは限らん。」

「ですから其は運で爲方がございません。」

「否運では無いよ。」と增井は首を振つて「然ういふ事を爲し得る人と、爲し得ざる人がある。其から又好む人と、好まざる人とある。是だけは能く最初に考へなければなるまい。」

「で、其爲し得なければ何う成るのです？」

「即ち彼等の目から見れば馬鹿とか仙人とかいふ者に出世するのさ。」

「貴方も然うなのですか。」と俊子は容易ならぬ顏を爲た。

「俺か……處が俺は未だ那樣に豪くはないのだ。半分づゝ兩方へ足を懸けて、風の吹くまゝに成らうと爲てゐるのだよ。」

「妾は然うでは無いと思ひますわ、貴方は最う兩足とも人と違ふ方へ入つてお了ひなすつたのです。」

「悲しい哉然うではないよ。未だ確に宙ぶらりんだ。世の中に一番憫むべきものは此中途半端な人間さ。」

俊子は何にも言はずに珍しく能く喋る夫の顏を眺めてゐる。

「實際白狀するが、俺は未だ功名心にも動される。だから彼奴等が成功してゐるのを見ると、此方も負けずに競爭したくなる。お前が先刻燒くのだと言つたが、全く然うだ、或時は燒きも爲る。」

「ではお願ですから、もつと燒いて下さいな。」

「其を人に言はれて怒るだけ未熟なものだ。けれどもう一度考へると、奇麗に其考を捨てゝ了ふ事も出來る。捨てたらば其こそもつと立派な處へ行くのだらうが、又其勇氣も無いのだから、畢竟何時まで

も宙ぶらりん、實に苦痛だなあ。」

「何も其考をお捨てなさる事は無いわ。萬一捨てゝ下すつたら、妾なんぞ何う爲る事も出來ないではありませんか。」

「まあ其うちに何うか成るさ。」彼は俄に平常の彼に成つて、澄して煙草を喫みだした。

俊子は心細げに火鉢に身を押つけ「ねえ、お願ですから、妾の申すやうに爲て下さいましな。然う爲ればは妾は何んなに嬉しいか知れません、誰の前に出たつて少とも恥かしい事は無いし、何時も肩身が廣うございます。妾の事を思つて下すつたら……眞實に貴方骨を折つて下さい。運ならば爲方も有りませんけれど、然うで無ければ！」

「考へて見るよ。」

「那樣にお考なさらないでも可いのでせう。」

増井は蟲平立上つた、而して頭の上の柱時計を見て、

「最う十一時だ。」

「其事は何う爲さるのです、妾能く聞かないうちは心配て爲やうがありませんよ。」

「然う疾く極るものか、俺は一年越考へてゐるが、未だ一向埒が明きは爲ん。」

「一年越？」

「今夜も寢てから能く思案して見やう。」

其限て、彼は勝手に自分の居間に入つた。襖を閉てゝ突立つたまゝ、少時は木像のやうに成つてゐたが、猶且何も纒が着かぬので、一思に寢卷を着て、冷い夜具に潛り込むと、裾の方に入れてある湯婆が、好い加減な溫度を足の裏に持つて來てくれる。

「左に右一番大事の問題だ。」と呟いて、取止り無く寢返ばかり爲てゐたが、偶と是も自分を欺る負惜では無いかと思ふと、急に總が馬鹿々々しく成つて來るのである。

女中部屋には俊子が明日の朝の用を吩附てゐる聲が爲る。

增井は未だ何か考へながら、偶と短冊懸の發句へ目をつけると、

　枯蘆の日に〳〵折れて流れけり

何と無く好な句であつたから、自分で書なぐつて挿んで置いたのだが、其を二三度繰返して味つてゐるうち、何時か自分が枯蘆に成つて、茫然水の中に立つやうな氣が爲て、軈て其が力無く折れたと思つた。俊子が直に入つて來て見ると、增井は最う高鼾、折れた枯蘆は呑氣に流れてゐるのであらう。

FALL RIVER AND NEWPORT.

BY

KIICHI KANEKO.

I visited Fall River and Newport today.

Fall River is known as the largest cotton-mill-town in the United States, and as the city of foreigners.

Newport is the lagest watering place in the world, and is well known as the city of the millionaires.

At Fall River I visited one of the mills and saw the poor working girls whose lives are runined in the cottondust, close air, the heat, and the noise.

At Newport I saw the grand mansion of Cornelius Vandervilt, the "Marble palace" of the Goulds, the splendid residences of Henry Clews, Benjamin Thaw, William Astor, and others.

I stood on a rock by the Ocean and thought of this sad contrast of modern civilization, and of the injustice of humanity. I could not help but meditate on the philosophy of this strange contradiction.

Fall River and Newport!

These are representative of the great factors of the modern day: the workers and the capitalists.

At Fall River I was pitiful ignorance.

At Newport I saw tragi-comical self contentment.

At Fall River I saw the toil and sweat of the mill-hands.

At Newport I saw the palaces that were built of the broken bodies of the toilers.

Comrades!

Let us push our agitation on! Harder than ever! These need our enthusiasm, our courage and our sacrifice.

If Newport is in its dream, Fall River is in its sleep!

They are both in their dead-sleep!

Who says that the world of today is awake?

ALL I NEED.

Not the marble palace,
Not the crown of imperial power,
Not position, not wealth,

Neither fame, nor title,
Do I need.
I would rather be a peasant
And live in the wood,
With my soul erect and free,
Speaking my honest thought,
That Freedom is all I need.

妖精

榧の實

吉野臥城

風なき夜なり。——靜けさは、
灰白湖を踏みわたる
神の足音も聞きつべき
夜なり。——二人に灯ぞ更くる。

庭小草露繁からむ、
蟲の世ぞうたげのさかり。——
笹の葉の囁く音して、
そゝかさと何かこぼれぬ。

机の女、讀み耽る。
小說本に栞して、
「妖精歩み蟲に寄る
音か」と眉を顰めけり。

庭小草露繁からむ、
蟲の世ぞうたげのさかり。——
雹霰みだるゝ音して、
はらはらと何かこぼれぬ。

かたへの男、歌おもふ
耳にあやしみ「天の女の
戀の涙や玉と降る」
頰杖しつゝ呟けり。

庭小草露繁からむ、
蟲の世ぞうたげのさかり。——
小狐の藁踏む音して、
かさかさと何かこぼれぬ。

女、え堪へず凭りそひて、
「毬にこもれる二つ栗、
盗む魔の來ば如何せむ」
微けき氣息を覗へり。

庭小草露繁からむ、
蟲の世ぞうたげのさかり。——
忍びに戸敲くおとして、
ほとほとと何かこぼれぬ。

男、しばらく默想の
佛さびして「落つるもの
地をし打てば聲を生む、
さて何ならむ。」ほゝゑめり。

庭小草露繁からむ、
蟲の世ぞうたげのさかり。——
空樽に礫するおと、
さながらに何かこぼれぬ。

女は眉もやゝ開け、
「觸れけるは塀、さては又、
隣のちさき堂の家根、
あゝ何ならむ。」想ひけり。

庭小草露繁からむ、
蟲の世ぞうたげのさかり。——
笹の葉の葉ずれの音して、
さゝかさと何かこぼれぬ。

男は清き目を開き、

「そよ榧の實」と口よせて、
女の耳にさゝやけば、
「解けがて謎解けたりな」

庭小草露繁からむ、
蟲の世ぞうたげのさかり。――
月さすに榧の大木は、
窓の戸に映るまぼろし。

風なき夜なり。――靜けさは、
灰白湖を踏みわたる
神の足音も聞きつべき、
夜なり。――二人に灯ぞ更くる。

紅躑躅

株蘖ふ草山の紅躑躅、
神忘せし簪とも忍ばれて、
何とは知らぬ懷しさ、ゑましさの
胸の扉搖るに、摘み取りて接吻けぬ。

沼の夕

詩の逍遙の日の夕、
躑躅を折りて森を出て、
山裾の沼の草堤、
水明り白に佇みぬ。

水ひたひたと魚はねて、
輪波の音さへ美しき
「閑寂」よ、岸に吐息して、
卷葉若蘆を滑りゆく。

水草ゆらめく物げはひ、
薄月ほのに影させば、
夫婦小鮒のぱちやぱちやと

浮きぬ、「獸思」をさそひがほ。
かゝる刹那の「我」は、蟬の
もぬけの穴洞、——靈ぞ滿つる。

松林

伸立ちぬ、新芽。——美しき松林、
日の入り匂ふ濃綠の粧衣
穗なせる髻華の狹搖ぎや、谷あひの
著莪靡け、岑の樅撫てゝ來る風に、
さた過ぎし歌女鳥は囀れど、
はた言ひ寄れど、雄姿の直にこそ
默して立てれ。——常若の松林。

新風俗詩

川柳久良岐社同人

澤蟹はチト蜘蛛の子の氣味があり　虹衣
御手洗へ來て振袖をチョイと刎ね　同
イヤ〱をいへとは乳母も軍師なり　喜代志
關取りは子供のやうに畏まり　同
山出しの女の見得て家鴨行き　幻怪坊
名僧は馬鹿を距る事遠からず　同
自分かと思へば文を事づかり　文象
我金のやうに會計出し惜しみ　同
水汲めと云はずに桶を搔き廻し　卯木
芝居へも行きたし帶もねだりたし　同
電車から足駄で降りるもどかしさ　久良岐
一ト長家夕べの嫁の噂なり　同
空中へ叩き上げては茶をつめる　同
試驗場軍師とう〱見破られ　同

歌

尾上柴舟選

○ 渡邊孤帆

わづかにも草をしのげる野の花の小さきに秋の雨そゝぎけり

うつら〳〵夢見るやうに秋の雲遠き花野をたゞよひにけり

夕ぐれの野こえ丘こえ鳥一つ君すむ方の雲にきえぬる

いくよろづ悲しき人の涙をば秘むるとやうに鐘もだしけり

小春日やなき妹の小さなる衣ほす垣に花かへり咲く

人まちて君が立つ野の花をかも吹きて來ぬるや初秋の風

浪かくれほのかに見ゆる島の灯になきて戸わたるさ夜千鳥かな

○ 渡邊甚之助

天少女花をかざしてゆくと見ぬゆふべ華やぐむらさき雲を

一瞬の美を味はひて死を願ふわれに來世の道を說けとか

君しれずあゝ絕海の浪かげに死するを思ふかなしき一日

悲しめばあまりにねたし白雲に捲かれて落ちよとべる隼

ほのかにも胸は鳴るかなちかひてし去年の一日をおもひいづれば

ましろ羽の鳥とぶさまと一むらの野雲見いてぬ南國のはて

○ 山下里子

南の島より白き鳥來ると少女見てゐぬ海邊に立ちて

十月や南にかへる一群の雁をおくると西より雲す

船着くをうれしむ日なり北海の寒さにまけてか
へらす君の
めづらなる貝を今宵は夢に見むあつき呼吸せし
そのひとつより

○ 秋渺々

冬の日はカーテン洩れて病む吾をいだくが如し
涙し流る
冬の風吼ゆるがまゝにたそがれて默示ありげの
雲とびにけり
袖ふれて菴のやみにまぎれにし人を呼ばんに吾
よわきかな
あたらしきひゞきありやと庭隅の椎の古木に耳
も寄せてき

○ 上村秋江

冷えまさる思の胸の氷りては石ともならむ秋さ
めの夜や
草の戸は小雨も晴れてうつくしき秋の華よと白
露の散る

秋の夜や壁の油繪ながめては古本を思ふて夜を
更すかな
たはむれて君を泣かしゝ露小道三とせとなりて
月出にけり
故里や砧もうたぬゆく秋のやぶれ屏風のかげに
蟲なく
夕陽は白うながれて楠の木はあわき香りを野に
散じけり
しゞまなる月の天地いづこゆかゆめのやうにも
笛の音ぞする

○ 香川里霞

秋の鳥茨垣根の赤き實をさとはらゝかし舌鋭に
鳴きぬ
眠ならず灯きえぬ墳墓のさう〳〵しさに似るこ
ゝちして

○ 川俣蓼紅

秋風に綿の花さくふるさとや時雨ながらの野の
祭かな

山かげやうぐひす生れ谷かげに蘭の花さく小春の日かな

○　吉敷里子

十六や島田重げの首ふりて叔母に侍りし夜をおもふかな

窓遠くつらなる杉の大林黄の葉もまじり冬めぐりきぬ

○　堀岡芳雲

遙なる君をおもへば鬼灯をならす昔の影のみ見ゆる

よき人の山に宿かるわび住ひうちきを知りぬ朝寒の衣

一群の芒野にして透き影をおくつきの灯の尊くおはす

露重き芋の廣葉に月見えて霧浮かびきぬ風もわたりぬ

○　井野暢光

せみごゑの讀經はつれば鷄頭の花あからかに夕日かげして

○　秋野白人

叱られて母の乳さぐる子のごともやぶれてかへる故郷の家

やゝ明けてむらさき匂ふ朝の野に君と淸らに死ぬべかりけり

○　小宮山春子

夢のごと淡き雨して草の戸は羊よぶ子に明けそめにけり

鈴蘭に心地よう吹くそよかぜに君が影ふみありし故郷の日

百千の羊はなてる大海のやうなる野邊に人を忘れ居ぬ

○　中村杏村

枯くさに月てるのべはたゝかひの果てにし夜とも風の音する

寢てはゆめさめてはわれをおもひ居るをとめあらねど故郷は戀しき

星白うてれる丘邊に家しめん花の花ともうつくし人を

○　　廣岡藻花

こほろぎはむかしの戀のうす衣をくけるがやうに細うしなきぬ

砂文字に飽きたる稚子と松の葉を長うつなぎて人まつ磯よ

とこなつに風は夢かの靜けさや小野の丘邊に家して住まむ

おもかげは蓬がなかの細かはにうつりて雲のながれゆくごと

唐紙の雨のにじみもある時は人の顔しぬ病に伏せば

應募和歌は小石川區原町百三十三番地尾上柴舟宛の事

鷹

漱石選

鷹なくや筏に仰ぐ崖の松　　松濤樓
鷹据えて鶴高き空を仰ぎけり　　同
それ鷹の行衛傾く日脚かな　　同
鷹狩を御覽の床几松が岡　　同
鷹狩や矍鑠として補弼の爺　　同
鷹の句を思ふ書窓やうつ霰　　同
大原女を鷹狩衆の餘所目かな　　同
奉る鷹そしりげに陰陽師　　同
鷹狩の合羽にはぢく霰かな　　同
一里來て城を見返る鷹野哉　　同
ぬくめ鳥東雲の空眼にもゆる　　同
鷹狩や阪東武者の革頭巾　　同
鷹狩の威勢に戻す渡しかな　　同
楠伐つて神鷹居らずなりにけり　　同
鳶の輪に飛ぶ鷹見えて霜日和　　同

ぬくめ鳥曉の湖上を渡りけり　霞翠
ぬくめ鳥心緒亂るゝ一夜かな　夜光
鷹飼ふて驕る宗家の塀高き　蓼花
鷹狩や怪力の童子得て歸る　小魚
鷹匠の鷹をあはれむ吹雪かな　拙極
海濶し檣高し鷹とまる　箭内
奉る紫房ゆたかに籠の鷹　寒骨
一聲の雉子に鷹の羽ゆらぎけり　天馬
御鷹野の松に御馬を繋ぎけり　梅痩
鷹匠は小男殿の髭うすし　竹宇
鷹狩や峠を越せば次の庄　壺翁生
戸の霰鷹の羽風も添はるらし　瓢乎
鷹の聲一望はれし刈田かな　舟居
天かける鳥に早鷹放ちけり　泰山
鷹それてたゞ山高き眺めかな　同
鷹なくや凪の雜木のすくみ鳥　脫史
据鷹の影靜かなり歸り花　同
鷹鳴くや松に時雨るゝ鞍馬道　萍也

ぬくめ鳥枯木に朝の月悲し　同
木枯の山科道や鷹を見る　磨劍
熊鷹や多摩のほとりの枯尾花　同

募集課題
吹雪　十二月十日限
摘草　一月十五日限

應募俳句は東京市本鄉町駒込曙町大谷正信宛の事
本號課題に應じ給ひし風村、桃村、雪峰、方外、松華、沐雨、せつ女、履友、芳雲、水圃、芳哉其他十數君の玉詠は確に到着致したれど遺憾ながら採錄致しかれ候更に御奮勵を希上候



非日本の根本絶滅案

X Y

桑港市に於ける日本學童排斥事件は、米國に於ける一大問題となれり、彼れに在て、州政府の法律は中央政府の條約に依て効力を左右せらるべきや否や今や正さに憲法上の大問題となりたればなり、

大統領ルーズヴエルト氏は、憲法上より根本的解釋を下して、州政府の法律は中央政府の條約に依て効力の有無を定めらるべきものと做さんと欲する意向らしく、而して米國多數の輿論も亦此の見解を是認せんとするもの丶如し、恐らくは事實斯の如くに捗びて以て排斥問題を解決すべきか

然れども吾人は更に一歩を進めて桑港市に於ける非日本の風氣を一掃するの方法如何を考慮せざる可らず、吾人は玆に敢て桑港市に於ける非日本風氣といふ、桑港市を除けば、ワシントン州に於ても、カリフオルニア州に於ても實際眞に非日本を主張し實行せんとするもの無ければ也

獨り桑港市に於て非日本風氣の熾んなる所以は何ぞや、吾人の私見を以てすれば、大凡下の如くなるべし

第一は桑港市に於ける日本人の殊に多きとなり、ワシントン、カリフオルニアの兩州に於て、農業、鐵道工業等に從事する日本人は幾んど三萬以上四萬なるべし、而して桑港市に在るもの少くも其の一割以上乃至二割なりとす、農業及び鐵道工作に從事するものは諸處に散在して多く人目を惹かずと雖も、桑港市に在る

者は然らず、其の容貌、言語、風俗に於て著るしく歐米人と懸隔あるがために、清人と齊しく殊に甚だしく市民の注目する所となる

第二は多數日本人の風儀の甚だ善良ならざることなり、米國に出稼する日本人は、其の勞働賃銀の甚た高きがため、一週間勞働すれば其の賃錢を携えて桑港市に出て、而して桑港市に於ける日本人の安下宿屋に宿泊すれば、少くも二週間遊食するに足り、更に利口に立廻れば三週間以上約一箇月遊食し得、玆に於て耐忍力と蓄積心なき勞働者等競ふて桑港市に集まり、無聊に任せて賭博を試み、醜業窟（日本人）に出入し、酒店（日本人）に入浸りて屢々醉歩蹣跚として街上を徘徊す、容貌秀麗ならず、服粧野卑なる異國人が一種異樣の酒氣を帶びて街上を逍遙する已に市人の嫌惡する所也、况んや彼等あるがため異樣なる醜業者、酒店、料理屋等在るをや、又况んや之がため自然に無頼漢不良の徒をも生ずるをや、市民は日本人を以て清人と齊しく米國の風俗を穢すものと做すの形迹なき能はず

第三は日本人が桑港市に於て諸種の勞働をなすに、歐米國勞働者に比すれば賃金頗ぶる廉なるを以て、漸く歐米國勞働者の職を奪ふ傾向あり、彼等乃ち桑港の市民が日本人を嫌惡するの情あるに乘じて、日本の勞働者を放逐せんと欲し、竟に日本人を清人と同一視せしめて以て之を排斥せんとするに至れるなり

第四は歐米國勞働者が其れ〳〵勞働組合を組織して相團結するに拘らず、日本の勞働者には未だ團結無きとなり、團結せずして孤立するものは、假令總員數に於て多きも到底無勢力ならざるを得ず、桑港市に於ける日本の製靴工等が靴工同盟を組織せるに由て比較的勢力あるを視ても、團結するものゝ勢力如何を推知し得べし

第五は日本人が米國に歸化して政治上に選擧權を得ざるとなり、歐洲人にても、伊太利人の如きは其の容貌風俗著るしく米國人に異なるも、米國に歸化して選擧權を有するが故に排斥されず、却つて主として日本人を排斥するのみ、

故に非日本の風氣を根本的に絶滅するの策は他なし、日本人の風儀を善良ならしむることなり、日本の勞働者を團結せしめて勞働組合を組織し、以て歐米人の勞働組合と對立し若くは聯合せしむることなり、日本人が歸化することは、法律上未だ十二分に實行し得ざる點あれば、暫らく右の二件を實行するの外なし

また米國大使館側の談によれば、桑港市に於て日本學童が排斥せられたる原因の一は震災後校舍の狹隘なると、日本人が市の教育費を負擔せざるが故なりといへり、若し事實ならば、頗ぶる考慮せざる可らず、想へ、我が横濱市の小學校に米國人の學童二百人ありて、其の父兄等曾て教育費を負擔することなしとせよ、横濱市民は果して何等の物議をも生ぜざるべきか、然れども吾人の知る所によれば、桑港市に住居して一家を支ゆる日本人は總て桑港市の市費を負擔す、教育費として負擔するの有無は未だ知るに及ばざるも、全然市費を負擔せざるものには非ずとす、若し教育費を負擔せずとせば、我が政府は條約上の權利として學童排斥の暴擧を悛めしむると共に、日本人をして教育費をも負擔せしむるを公平なりとすべし

米國は普通選擧の國にして、苟くも籍を米國に有する男子は總て投票權を有す、故に日本人を排斥するがために一票を失ふことなくして、却つて勞働者の投票を集中し得べくんば、誰か非日本説を主張せざらんや、桑港市に非日本の風氣の熾んなる必然の結果のみ、而して根本的に之を絶滅せしる所以の方法も亦自から知るべきのみ

薩摩艦成る

桑圃生

英艦ドレッドノート新に成るや、長さ五百呎、幅八十二呎、其噸數一万八千噸、威風海洋を壓する巍然たる一大浮城なり、英紙エンジニーアリング即ち揚言して曰ふ、造船術の進歩特に其著しき速力に於て吾大英國は實に世界を獨往するものなり、暫く統計に由つて見よ、獨は現在の速度を以てしては容易に二年半以内の歳月を以て一艦を製造し得べからず過去に徴すれば尋常の容積を有する艦體すら猶は三十九ヶ月より五十ヶ月の間を要せしにあらずや、佛は多少進歩の跡を見るとはいへ、今猶多

く言ふに足らず。曾ては一艦の製造に十年を費したりき、其後徐々に改善を重ぬるに及んで漸く平均五ヶ年を要するに至りたり、パトリ號を見よや、千九百一年に起工したるに辛うじて一ヶ月前に全く竣功を告げたるのみ、今注文せんとする六隻の戰鬪艦も大凡そ四年の後に其脫工を見るべき豫定なりとかや、即ち現今列國の造艦役備よりせば、千九百〇八年迄には大海洋上一のドレッドノート式戰艦あり後べからず、而かも我國に於ては同式の戰艦を二年三ヶ月內に作り得べき造船所七、八個所あり、十八ヶ月內に作り得べき所四、五個所あり、千九百八年迄には猶ほ優にドレッドノート式戰艦六隻を浮ぶるを得べきなりと、獨を眇視し佛を蔑視す、而して我國は實に其眇視と蔑視とにだも與るを得ざりき、然るに今や薩摩艦あり、長さは四百八十二呎といふも其幅さは實に八十三呎六吋、噸數は一万九千二百噸と稱す、此の如きの巨艦にして而かも其の進水に至る迄の日子僅に彼に輸すること二ヶ月に過ぎずといふ眞に我國海軍の一大進歩と謂つべし、エンヂニーアリングの墨痕猶ほ未だ乾かざるに薩摩は微笑を湛えて沈默の反語を語る、吾人豈快哉を叫ばざるを得んや、而かも誇るべからず、寧ろ戒むべし、設備遠からず近く彼にあり、蓋し人力の及ぶところ自ら際涯あり甚しき懸隔あるべからず彼の企てしところ我巳に之を學び得たるに近し、我の學び得たるところ又他の我似るものを出すことなからんや、列國對峙の世一日其意を寬うせば百年悔を貽すことなからずとせず。

主民政治の第一步

（官省に門札を掛け、瓦斯燈に記名せしむべし）

楊陰生

東京の官省の多くは門札を掛けてない。又東京の名士や富豪の瓦斯燈には、多く其氏名を書いてない。これは甚だ人民に不親切な事と思ふ。初めて田舍から出て來た人には勿論、年久しく東京に住んで居る者にも官省を尋ぬるには可なりに骨が折れる。官省の方では有名な此お役所を知らぬかといふ腹かも知れぬが、この忙しい世の中に必要のないものまでも前から調べて置く餘裕がない。だから必要のある時に早速分るやうにして置いて貰ひたい。

一體お役所などは人民のために設けたものだ。人民の便利を主とするのが當然である。（僕の主民政治といふのは民主主義（デモクラシー）とは違ふ。人民の便利を主とする政治といふ丈けの意味に止まる。本來政治といへば無論主民の意味を含まればならぬ筈であるが、然らざる似而非物（にせもの）の多いことは過去の歷史又は現在の事實の證明して居る處であるから、止むを得ず主民政治といふ變挺（へんてこ）な名を用ひたのだ）いやにお役所風を吹かして、お役人は人民より數等エラい人間であるかの如く思ふたのは、それは昔の夢である。そんな二十年前の考を捨て去ることの出來ぬ役人共は露西亞あたりに行て威張たらよからう。露西亞といへば、つひ先達て（さきだつ）ての戰爭を憶ひ出さずに居られぬが、日本が露國に勝た原因は何かと問はゞ、それは

いくらもあらう。いくらもあらうが、露國では官局主義(ビューロークラシー)でお役人ばかり巾(はゞき)を利かして居るに引換へ、日本では立憲制度で人民の權利實力共に進んで居るといふのが一の大なる原因ではあるまいか。而して人民の利權實力を發展せしむるにはどうしても人民の便利を主とする政治を行はればならぬに極まつて居る。

露國のごた〱も隨分久しいものだが、人民の權利が確認せらるゝ迄は決して落ち附くものではない。無暗に人民に威張りたがるお役人などは、ごた〱の止まぬ露國などには必要かも知れぬが、日本には全く用のない代物(しろもの)である。そんな古臭い人間はどし〱放逐して人民の便利を主とする政治を行て貰ひたい。若し人民の便利を主とするといふ考があつたら、お役所の門前に門札を掛ける位のことは、直ぐ氣の附きさうなものだ、僕は主民政治の第一歩として先づ官省に門札を掛けることをやつて貰ひたいと思ふ。

又名士とか、富豪とかいふ人の門前の瓦斯燈には、何町何番地何某とハッキリ書くがよい。其當人を尋ぬるに便利なのは勿論、其近傍の宅を尋ぬるにも、それによつて大體の見當が附くので極めて都合がよい。「吾輩は富豪何某なり、名士何某なり、東京廣しと雖も豈に吾輩の邸宅を知らざるものあらんや」氣取かも知れぬが、そんな馬鹿〱しき氣取方は素(す)チトお名前にも掛らうかと存ずる。グット平民主義の仲間入りをして直(なほ)に町名番地、氏名まで書き附けて見給へ。君の人格は確かに一割は上(あが)るよ。

そんな笑談はヌキにして僕は眞面目に主張する。東京の官省には必らず門札を掛くること、各家門前の瓦斯燈には必らず町名番地氏名を書き附けること。此二つは是非共當局者に勵行して貰ひたい。事小なるに似て小ならず。眞に人民に同情ある主民政治の第一歩は正しく、斯樣な手近い事の實行にあると思ふ。



新體詩に對する世評の概括

零餘子

人によつて遺傳を異にし、境遇を異にし、教育を異にす、想像力の深淺、趣味の高下自らにして差等あるは元と免れざるの數、陽春白雪、下里巴人の譬は古し、詩のアリストクラチックなるは云ふまでもなしと、斯く一概視しさらばそれまでといはん、そは猶ほ可なり、更に詩の價値とや、そは抑も對社會的よりいふか、將た又對藝術的よりいふか、對藝術よりすれば、藝術はそれ自體に既に絶對的價値を有す、「作者自身の圏内を

離れて了解せらるべきものにあらず」といふことと、それを以て一向ら無價値の理由とするに足らずといふものあり、是れ尚幾分の疑網の吾人の心胸を封ざすところなり、月に憧がれ花に浮かる、其折々の感興を幾時過ぎての後の追懐に慰まん便りとならばしもあれ、さはなくてよしや一人二人にせよ、三人四人にせよ、一度び作者自身の手には秘めず、その感興をその詩によりて他にも分たんとせば、早や對社會的の水洩らさぬ契は其處に結ばるゝにあらずや、藝術とは前者の如くても可なりとせんか、將た當さに後者の如くならざるべからずとせんか、藝術の藝術として人類に重きをなす所以は抑も孰れに存する、吾人は、想ひて茲に至ればなど事々しくいふ迄もなし對藝術、對社會といふ底には既に一道の契合あるを信ず、既にそれあるを信ずとすれば、詩そのものは當然の結果として、或はアリストクラチックたるにせよ、或はデモクラチックたるにせよ、兎に角社會的注意を拂はざるべからず、詳には詩想そのものの趣味そのものは作家自身に固有性あり、外より强ゆべからず、内より亦曲ぐべからずとはいへ、之に要する文法や用語や、將た聲調やは當然社會に存する一種の約束に注意せざるべからずと信ず、必ずしも株守せよとはいはず、產衣を五尺ゆたかの青年に强ゆべからざるを知ればなり、啻それ產衣は强ゆべからざれども、而かも春、秋と生ひ增さり行く身長には心を用ひて常に相應しからん衣裳を與ふべきが如くに、詩における形式も漫りに標準なくして創出せらるべくはあらざるなり、裄丈合はぬ色々衣を日々の心に任せて作り出し、さて人は着ずもよし、我は唯作りたければ作るなりといはん態度は取らざるべきなり、吾人が現時の新體詩に就いて廣く諸大家の見を叩き數月に亘りて之を本誌に公にしたるもの實に如上の考を有すればにこそ、

アリストクラチックといふこと左もありなん、左れどそが貴族的となるは詩想凡俗を拔き、趣味の餘りに超邁に過ぐるが爲か、然らずして其形式が一般の約束に從はざるより來るか、此の點先づ一顧せざるべから

ず、然らば熱烈火の如き感情を自由に大膽に歌ふべしといふは可なれど、藝術の批判に衆議何の効かある可と蔑如し去るは見様によりては肯はれぬ所あるなり、吾人は作家が清濁併せ呑む的大度量を示し、胸宇を廣濶にして、兎に角にも耳を衆議に傾けんことを望む。勿論多くの批評者中、時に熱罵漫嘲の人あり、作者等の感觸を惡しからしめたるはあらん、左れどそれも見様なり、超越せよ、超越せよ、而して異なる心境を以て之を迎へよ、それはそれにて、現時の新體詩の容れらるる範圍を知るの便となるべきか、諸大家の中、新體詩家あり、小說家あり、批評家あり、英文學者あり、國文學者あり、音樂家あり、從つて各々其壘に據つて各々一家の見を立つ、賛するもの、駁するもの、嘲るもの、罵るもの、諷するもの、外らすもの、眞摯なるもの、冷淡なるもの、穩健なるもの、矯激なるもの、極めて露骨なるもの、極めて隱微なるもの、種々あり、容易に方物し難きものあるも、兎に角當代における最も進歩せる智識を有し、趣味を有する人々たるを疑はず、心を潜めて、之に聽くに、大別すれば固より現時の新體詩に同情あるものと否らざるものとの二派なるが、而かも一以て他を排すべからず、各々一面の事實を語つて相奪ふべからざるものあり、之を合して一となし始めて渾然たる美玉を見得べきに似たり、先づ作家幷にそれに同情ある側の主張を聞くに、

今日の讀者は趣味に想像力に到底詩を解する程の素養を有し居らず、在來の七五調の俗歌民謠を標準として此新しき詩を評するなり、彼等は奔放自在よりも巧緻齊均を、主觀よりも、客觀を、敍情よりも敍事を、新語法よりも舊語法を愛するなり、或外國のものに心醉の極、外國の詩としいへば字引と首つ引にても解せんとする代りに自國のものとしいへば初より疎外の態度に出で、一難句に遇へば輙ち拋ち去るを常とす、兎角文學を褻瀆して味はんとするは誤れるなりといふものの如し。更に非作家側、否作家中にても一般の傾向に快からざる側の言に聽くに、

今の新體詩は其形や渾沌たり、形の渾沌は想の渾沌

より來る即ち不熟より來るとなして形想並び排するあり、否形さへ整ひて能く語義の吾人に理解し得られなは何處にか縹緲の幽韻を見出し得ん心地す、彼等は內に燃ゆる熱情の迸りを十分に顯はすべき表彰（エキスプレッション）を缺きて悶ゆるのみとて、形の不備を責むるものあり、或は又彼等には言はざるべからざるまでに切なる情を育て上げて、然る後始めて筆に洩らせるものありや、多くは墮胎し流產するなりとて想の不熟を難するものありと雖も、先づ最もその非難の聲の囂々たるは、形、詳には文法、用語、聲調の上にあるが如し、大同を取り小異を去りて之を補綴し見るに、要は、今日の新體詩作家は文法を無視し、隨意に新語を案出し、聲調に重きを置かず、勿論日本の語には抽象的のもの乏しく、散文よりも更に幺微の情緖を寫すべき詩にあつては一層其作家たるの苦しきを感ずれば、勢新語の案出も止むべからず、されど、第一に考ふべきは、在來の國語を普く穿鑿してその思想を傳へ得るものなきを確めたる後なるべき事、第二に能く在來の語と調和を得て何人にも解せられ得べきものたることと之なり、然るに今の新體詩家には此用意を缺く、其不可解なりと稱せらるゝは固より當然なるべし、偶ま今日の靑年は槪して國語の智識乏しきが爲に、作者と讀者と聯想の範圍端なく相合し、覺束なげに解せらるゝを得るのみ、國語の智識あらば、それが却て累をなして到底入るべからざる難關は橫るなり、詩は言外に餘韻を有するを貴ぶといふ、そはいふ迄もなく詩の生命なり、されど所謂言外の餘韻とは言語の意味に明瞭に通じたる上の事にて、言語そのものに泥むことにはあらず、それを曲解して唯空々漠々の趣を捉ふるを以て詩歌の本領とせんか、然らば音樂の本領と如何に分つべき、いふが如きは既に詩歌の領域を逸して音樂のそれに入れるものにあらずや、此點最も彼等の顧慮を求めざるべからず、更に又今の新體詩は聲調上の用意に缺くるところあるに似たり、之には音樂の所謂リズムプレッスなるものを會得するを要す、由來詩調と音樂とは密接の脗脈和通ずるもの、樂詩人ならぬ一般詩人に對して深く音樂

を研めよとはいはざるも一ねたりの音樂の呼吸位は知得し置くの要存するなり、文字を必ず七五、若くは八六にせよとはいはす、字數を確定すればとて聲調必ずしも整はず、リズムの進行に從ひて同一字數にても或は短きを感じ、或は長きを感ず、所詮は呼吸の上の沙汰なり、又七五、八六孰にても可なりとするもその七を作るに初は三二二とし次には二三二、又次には二二三とするが如き排列は甚しく聲調を害すと云ふに在るが如し、其他尚ほ幾多煩瑣の點に於て諸家より多くの注意ありたれども一々擧ぐるは能くするところにあらざるを以て省く。

如上の中文法、用語に對するものは、多く新體詩家、國文學者、英文學者等の意見にして音調に關するものは概して音樂家の說に依りたるものなり。

吾人は兩派の所見を大體に於て以上の如く觀取したるが、敢て此間に是非の辯を挿まんと欲するものに非ず、げに作家側の主張の如く、數ある讀者の中には、趣味の詩を解する迄に養はれず、萬丈珠簾捲月來といへば、直にナイヤガラ瀑布の實際の長さと地理書に引較ぶる輩も尠からざるべけれど、今の新體詩家中、聲調の點は暫く擱く、漫に文字の一定數に充つる充たぬを標準とし、自由に新語格を創め、新造語を案じ、詩それ自らに、既に他に解せらるべき性質を缺けるものはあらざるか、吾人は五十嵐氏の「第一流の智者にだに解せられざるが如き、(幾多の辯護すべき理由あるにせよ)良心あり向上の意氣ある作者の反省を促すべきものにあらず」といへるに左袒せざらんと欲するも能はざるなり、一括して新體詩家といふも、新體詩家元より十數人に止まらず、之に等差を附し、之に流派を分たば、如上の批評又は注意の或は當るべきものあり、當らざるべきものあるは言ふを待たず、去れど苟も文藝に忠實なるの士は、剛岸不屈、他を睥睨して自ら高しとするを止め一笑し去るべきものは一笑し去るとも一顧を拂ふべきものは一顧を拂ふを惜まず以て自家の大靈筆の揮擢に資せよ、是れ大を致すの道なり。即ち大を志す人の道なり。



寄木細工

悉鷹振子
伊矢昧生

○漱石氏の「猫」がビールを飲んで水甕に落こつて「南無阿彌佛々々」て終つて居るのは讀者諸君の知て居らるゝ通りである。諸君も恐らく吾輩と共に「猫」はあれて永久終たものと御推察であらう。所が大違ひ。漱石氏はあれて一ト先づ終つたのだというて居る相ぢや。「だつて猫が死んで了つたら、後が書けないんでせう」といふと「君、猫はまだ死なんぢやないか、誰か來て助けたら助かるだらう」というて眞面目な顔をして居るとの事だ。

○「猫」の中篇は此頃出版になつた。本郷の世界堂とかいふ本屋の廣告に曰くさ、「吾輩は猫である。新刊はチューである」本屋にしては上出來の部と見てよからう。

○二葉亭主人が「東京朝日」に連載して居る「其面影」は今日（十一月二十五日）て四十二回だ。新聞小説の大嫌ひな吾輩も、これ丈けは讀んで居る。然し處々に妙處佳處はあるが、全體の調子は少し古臭いやうに感ずる。けれども此頃は餘程面白くなつて來たから、これからの見物かも知れぬ。

○虛子が「國民」に書いて居る「俳諧一口噺」には時々面白いのがある。

○「東京朝日」の池邊吉太郎氏の文章識見共に敬服するに足る。一部の人には早くから其價値を知られて居るやうであるが、未だ廣く世人に認めらるゝに至らぬのは遺憾である。然し今後毎月の論説を集めて別に出版する計畫があるやうに聞て居る。氏の文名の大に揚るのも恐らく近きにあらう。

○三叉竹越與三郎氏は「讀賣」に入て主筆となつた。現今、政治及び外交の記者として恐らく氏の右に出づるものはなからう。西園寺内閣及び政友會は其政綱の積極的發表者を得たので素より大喜びであらうが、吾輩も亦論壇一雄將を加へたるを深く喜ぶものである。

○竹越氏が入社したので「讀賣」も餘程面目を異にするだらう。殊に來年一月からは大々的改革を行ふ積りだと聞て居る。今迄主として文學好の青年間にのみ重きをなして居つた仝紙も政治外交社會を初め社會の各方面の大勢力となるだらうと思ふ。又夏目漱石氏も特別寄書家（スペッシアル、コンヂリビューター）となつたと聞けば確かに大發展するだらうと信ずる。

○「日本」は近來甚だ振はない。「國民」は大に沽らんことを求めて居るらしい。蘇峯氏の「東京だより」は時々はつまらぬものもあるが、時々名文名論がある。「讀賣」の「いろは便」（三叉氏の筆と思はる）白眼子（北碕の「イロハ便」に代りたるもの）と共に儀文の模範とするに足る。

○福本日南氏は平浩の代りに代議士となるだらうといふ噂があつたが、何だか外の人が出ることになつたらしい。然し日南氏は來年の總選擧から花々しく打て出て來る計畫だらうと思ふ。議會に活氣なきや久し、少し顔の代た人が出て來て大にやつて貰ひたい。

○露伴氏が此頃一向書かんのは久しく中絶して居る「天うつ浪」を完結させる爲めだと聞いて居る。

○藤村氏の「春」といふ長篇は青年の熱烈なる戀愛を主題とするといふ話だが、書き方も餘程「破戒」と違つて來るだらう。若し破戒と同じ筆法を二三回續けたら、諸度讀者に厭かれるだらうと思ふ。然し其邊は慧眼なる著者に拔目のないことゝ思ふから注意する丈け野暮かも知れぬ。

○香庵氏の久しく創作をやらぬのは文壇の恨事である。(以上十二項悉麗振子)

▲みめよき女中を使ふ家の旦那殿は助平なるが多く、醜き下女を置く家の奥樣は悋氣深し。

▲世人男女學生腐敗の原因を究むること頗る熱心にして且つ極めて周到なるに似たり。而かも皆其最大原因を逸して徒らに枝葉末節を云々す。所謂明は秋毫の末をも察するに足りて而かも輿薪を見ざるものか。予は堅く信ず、男女學生腐敗の最大原因は全く晩婚にありと。物心充分につきて而かも結婚し能はざるによると。見よ、女學生は其母なる人が乳呑兒を抱へたりし年頃になつて未だ海老茶を胸高に穿き、男學生は其父なる人が「おとーたん」といはれたりし年齢になつて尚制帽を被る。況して都會は田舍に比して早くませた人物を作り、物心をつくるに適當なる處、彼等學生の東京に入るは、恰かも火を抱いて火の中に飛び込むに似たり。予は寧ろ比較的マチガヒの少きを驚かんとす。されど誤解する勿れ予は必ずしも早婚主義を鼓吹するものにあらず。予は適婚論者(若しかかる言葉ありとすれば)にして晩婚を厭へども又早婚を歡ぶものにあらず。而かも世の進むにつれて生活益々困難となり、生活困難となるに從て漸く晩婚の止むなきに至るは、不敏予と雖も認むる所也。現に歐米列强の結婚年齢は槪して我國よりも遲きは統計表の明示する所也。されば我國は今後益々晩婚を行ふの止むなきに至るべきも極めて明か也。されど久しき中には人間の頭も習慣に支配せられて、晩婚を晩婚と感ぜざるに至れば、マチガヒも自然に減少すべし。今は過渡期なれば腐敗を人爲的に匡正するは先づ〳〵不可能のことゝ見ざるべからず。夫れ故に予は斷言す。今の男女學生の腐敗は文明が結婚年齢を後らしたるに拂ふ當然の租稅也と。

▲家族會とかいふものは、所謂學者の家庭にも、旦那は細君ばかりで物足らず、奥樣は亭主ばかりでアッケナク感ずるものたるを事實の上に示したる也。

▲早稻田對慶應の野球仕合中止について兩方よりの辯解いろ〳〵出てたり。されど予の睨める所にして誤らずんば、早稻田の弱點は野次連多くして動もすれば强暴に流れんとするにあり、慶應の弱點は、仕合に負け相だから、成るべくは止めたしといふ臆病風吹き渡りしにありしが如し。

何れにしても、勝敗を度外に附してヤレーに腕を試さんとするサツパリした氣風のなきは歎ずべし。（以上四項伊矢味生）



嗚呼醜業婦

白眼子

横濱伊勢佐木町を右に折れて、遊廓に通ずる一小街、名からして先づ洒落れて居る梅ヶ枝町なる所がある、之を中心として、附近一帶の區域、範圍は餘り廣くもないが、兎に角世人の注目を値する場所なのだ。

薄暮、試みにこの街頭に立てば、其處に、御神燈なる軒提灯の點々到る所に散在するを見るであらう、尙ほ、仔細に注目すれば、そが店頭に坐する幾多の嬌姿艶態、それが、人目も耻ぢずチヨイト／＼の嬌音を弄し、或は、街燈影暗き所、窃かに行人の袂を引いて喃々私語する如きを見聞するであらう、之を、何物と反問するの野暮を止めよ、問はずと知れた淫賣窟、出沒する所のものは俗にいふ白首なる醜業婦である。

更らに、市の南端なる居留地に到つて、其處や彼處の巍然たる洋館を望めば、そが窓から容姿衰ひたる見るも憐れな女の、時に往來を見下しながら、何等か憂愁に沈み、何事か思ひに惱む如きを見るであらう、人は之を目して洋妾と呼んで居る。

洋妾、白首、名は異つても兎に角醜業婦である、で、世間は彼等を見ること宛然穢多か乞食の如くであるが、併し、單に醜業婦だからとて一口に擯斥すべきものであらうか、僕は必らずしもその否らざるを辯明して聊か彼等の或者の爲めに寃を雪ぎたいと思ふ、と言ふのも、彼等がそれになるまでには種々なる情實がある、理由がある、勿論、女の操を捨てゝ幾百千人に耻面晒さればならぬ彼等の境遇として、何れ、憐れに痛ましからざるはないのであるが、而も、その境遇の憐れに痛ましきが故を以つて僕は而く斷ずるのではない、それも、世間幾多の醜業婦はいざ知らず、少くもこの一廓に於ける彼等醜業婦の中には、その大部とは言はれどその幾分は確かに情を知らずしてこの魔窟に投げ込まれて居るのである、言ひ換へれば、彼等は醜業婦たらんとして醜業婦となつたのではなく、たゞそれ或者の誘惑に依つて、或は蜜の如き甘言に欺かれ或は殘忍なる毒手にかゝつて、末遂に浮ぶ瀬もなき墮落の淵に沈溺されたのである、さらば、その誘惑せる或者を何者かといふに、外でもない、桂庵即ち口入宿、體好く言つて人事周旋業者そのものなのだ。

て、前號には、單に僕が彼等の奸計に陷つた丈けの徑路を紹介したが、茲には項を變へて、尙ほ彼等が如何に大なる罪惡を犯しつゝあるかを更

らに〳〵簡誅せればならぬ、所で、茲に前以つて又一ッ断つて置くことがある、そは、この篇嘗つて新古文林に掲載するべく記述たしのだが、編者之を何んと見て取つたのか、こは想像だといふ、僕は勃然になつて否らずと言つた、編者尚ほ曰く、でも君がこんなことを知つて居る筈がないからといふ、箆棒め、苟くもこんな記事が想像や何んかて書けて堪るもんか、と癪に障つたまゝ一も二もなく取り返して來たのがこの材料なのだ、言ふまでもない、僕の意の在る所は世の青年男女が假りにも彼等の奸計に陷らざらんことを、警告するにあるので、そも〳〵斯かる記事が嘘僞りに書かれるものではない、と言つて、讀者がまさかに桂庵などの手にかゝらうとも思はないが、併し、時と場合でそれもないとは限られまい、殊に、東京に於ける桂庵やそれの手に依る男女の數を見ると、眞に驚くべき莫大のものだ、今試みにその筋の調査を見ると、市内全體の桂庵が、千二百九十九人、それの取扱數は、一ヶ年の中で男が七千六百七十六人、女が二万三千五十六人といふ多數に上つて居る、されば、讀者の爲めには或は何うか知れぬが、少くも之等幾万といふ男女の爲めには餘程參考にもならうと思ふ、勿論、この篇の記事は横濱の桂庵なので、東京若くば地方の桂庵と比しては聊か體裁を異にするものゝ、由來、桂庵なるものには多く碌なものがない、若しそれ等が皆奸策を弄するものとすれば、その手段は必らず同一途に出づるものなることだけは僕が堅く茲に断言して置く。

・閑話休題として、さて之からいよ〳〵本文に取りかゝるが、元來、彼等周旋業者の見て以つて好餌とするのは、無論男よりも女に在る、と言ふのも、貪婪飽くを知らざる彼等は、出來るだけ、能ふだけの膏血を絞らんとして居るのだから、その點に往くと、男は單に手數料の五十錢や保證金の二圓位に止つては居るものゝ、女となると萬事が胡魔化し易いだけ、種々なる口實の下に方外の金を貪られるのみか、早い話が、先づ手數料からして違つて居る、殊に、酌婦藝娼妓の周旋になると女そのものゝ容貌や又は住み込む所の種類に依つて手數料の異なるは勿論、言はば、玉次第に依つて彼等が手腕を弄すれば弄するだけそれだけ多くの利純を得られるとになつて居るのだから、彼等が女を見ること宛がら餓えたる虎の羊を見る如くに、そが獰惡なる眼を光らし、そが隱忍なる爪牙を磨きつゝあるのも、理として固より當然なのだ。

であるから、彼等は日々その暖簾を潜る幾多群客の中でも、殊に女となると、忽ち言語應對からして、先づ男に對するそれよりはより親切により叮嚀なのだ、否、親切らしく叮嚀らしく裝ふて居るのは言ふまでもなく、而も、その裝ひ方が深ければ深いだけいとゞ油斷のならないので、試みに、その獰惡なる眼の如何に異樣に輝きつゝあるかを見れば、一目直ちにそれと了解が出來るのだが、情けないかな世間知らずや無智なる女の、そんな奸計があるとは夢にも知らう筈なく、その親切らしい口吻やその叮嚀らしい態度に何んの顧慮する所もなく、可惜無辜なる一身を安んじて虎の如き彼等に托するのだから、その危險なことや薄氣味惡さと言つたら傍て見る僕等でさへそゞろ惡寒が催される位なのだ、尤も、

それ等の女にして、その面貌の醜いのや、又は望む所の奉公口が、單に勞働にあるものとすれば、勿論左までの危險はなく、僅かに五十錢の手數料や二圓の保證金位で濟むのだが、それと言ふのも、女は男と違つて奉公口に窮するなどのことは先づ以つて殆んどなく、さすがに女の需要は何處へ往つても多いだけ、或は商家のお三どんでも、或は良家の雜母でも、兎に角勞働的奉公を厭はぬ限りは、本人の望み次第で、その日に來てその日の中にも何れへなり往かれるのだから、從つて、桂庵の二階に蟄居する必要もなければ又衣類を脫いだり所持の物品を賣り飛ばすなどの恐れもない、けれど、その目的が好しや勞働的奉公に在つても、不幸にしてその女の容姿が聊か十人並、若くは普通の容貌で年でも若いとなれば、彼等は決して遁さない、現在望む所の奉公口は數々あつても、或は言を左右に托し、或はより以上の奉公口を周旋するなど言つて、可成その女の足を止めんことに勉めて居る、要するに、彼等の目的は玆に在るので、蓋し又、問題は實に之れなのだが、そもや彼等が如何に之等の女を遇するかは、試みに僕が實地それを目擊した所のものを、そのまま玆に紹介して見やう。

恰度、僕が桂庵の二階に五日ばかりも過した或る日のこと、僕は番頭に奉公口を迫り旁々店頭に坐つて居た、所へ、遣つて來たのが二十一二の未だ世間慣れないやうな娘、見れば、色白のちよッとした、勿論美人などいふ柄ではないが、年の若いだけ兎に角少しは見られる女、それが極り惡さうに暖簾を潜ると、人相の惡い番頭何時か相格を崩して、入らッしやいの言葉と共に、忽ち言葉の調子まで變へて、下へも置かぬやうな現金な扱ひには、何んといふ意味もなしに、僕はたゞ譯もなく癪に障つたのだ、聞けば、この女は藤澤在のもので、何處か氣樂な家へ奉公がしたいとのこと、勿論、所は撰ばないから奉公口のない譯は決してないのだが、胸に一物ある番頭忽ち手段を胸に畜いて、例の男に對する口吻と一般、今日は遲いから何れ明日のこと、就ては不經濟だから宅へお泊りなさい、と蜜のやうな甘い言葉で、親切らしくすゝめるので、女は始めの中こそ聊か氣味惡いやうではあつたが、懐中都合もあると見えて、では何うぞ……話は直ぐに落着したが、偖ほ、例の保證人一件となると保證人がないといふので遂に二圓の保證金になつたが、それも持ち合せがないといふので、憐れや着換への衣類四五枚が遂に番頭の手に依つて質屋の扉へと運ばれたのだ。

手續きは之て濟んで、いよ〳〵その女が一泊することゝなつたが、元來、二階は雜多の男客で占領されて居る、下と言つても店の四疊と、主人の居る六疊の外には室といふ室は一ッもない、男なら無論雜居して濟むが、年若い女のこと、番頭奴全體何うする積りか知らと、餘計なお世話ながらも氣にかゝるまま人の病氣を頭痛に病んで居れば、番頭やがて女を連れて二階へ上つて來た、一座の男客に向つて、『餘りからかッては否けませんよ』、言ひながら女に向つて、『その中に女の方も來ますから、暫く玆にお出てなさい』、言ひ殘して、番頭は下へ降りたが、何がさて、四方を喰ひ詰めた破落者同樣の寄り合ひなのだ、『姉さん此方へお出てなさ

い』、言ふかと思へば、『姉さんは何方で……』などゝ無遠慮にも彼方此方から問ひ詰めるので、女は聊か赤くなつて片隅に少さくなつて居たが、それでも時の經つにつれて、二言三言の返辭から、何時か世間話の一ッ二ッもするやうになつた、それを、僕は熱心に耳傾けたり觀察したりし居たが、その様子を見ると、未だ世間馴れぬ處女のやうではあるが、それでも鬼のやうな野郎共の中に交つて、二言なり三言なり話が出來るのだから、或は存外場馴れて居るのかも知れぬが、兎に角、若い女の一人身で、桂庵の手にでもかゝらうといふ位のものは、決して普通の處女ではない。

二言三言の世間話が始まると、元來遠慮のない野郎共の、玆に至つては益々遠慮がない、無駄口も叩けばからかいもする、而も、その話といふのが例に依つて淫猥聞くに堪へざるのだから、若しそれが純然たる處女であるとすれば、敢て桂庵の毒手にかゝらないまでも、既にこの二階に居てさへ確かに墮落の空氣に感染せざるを得ないのである。

暫くすると、果然、番頭の言つた如くに、又一人の女が上つて來た年は矢張り二十一二であるが、その様子は田舍娘らしい、けれど、この二階にはお馴染と見えて、別に臆する色もなければはにかみもせず、最前の女を見ると、いとゞ氣強ようさうに、その傍らに座を占めて、女同士のもう喋々と辯じて居る、聞けば、この女は二月以前にこの桂庵へ來て、望む所は矢張り氣樂な家をといふのであつたさうだが、遣られた所は之れまで二三軒の多きに上つたものゝ、何處も彼處もその勞働の激しき餘りに、とう／＼堪へ得られずして又も舞ひ戻つて來たのださうだ、所へ番頭は上つて來た、その女を見ると膨れッ面して、さう度々出て來られては困りますれ、何うせ奉公ですもの、少し位の辛抱をしなくッては……と言葉が如何にも邪慳なので、女は返す言葉もなく默つて居たが番頭今度は言葉を改めて、では今一度世話して上げますが、少し遠方は何うだといふ、遠方でも好い所でさへあれば……と女は微かに答へたのだが、ではお出でなさい、所は三浦三崎の料理店ですが、忙しい代りに金にはなるといふ、金といふ言葉に女の心は動いたのか、それとも番頭の不機嫌に厭とは言ひ兼ねたのか、じやア往つて見ましやうかと、未だ曖昧に言葉濁して居るのを番頭早くも呑込み顔にお出でなさい／＼素人家の女中奉公などは氣が利きません、それに貴女の腕次第で如何程でも金になりますから……言ひながら、番頭は下りて往つたが、後に殘つて居る本人の未だしも不安らしく思ひ惱んで居るそれよりは、委細の様子を傍で聞いて居る僕はいとゞ不安に思ふて、少なからず女の前途を氣遣つたのだ。

と言ふのも外ではない、成程番頭の言つた如くに、三浦三崎から來たといふ料理店の主人は昨日店頭へ來て酌婦一人をと頼んで往つた、酌婦と言へば言ふまでもなく賤業である、惡く言へば淫賣婦である、勿論、淫賣婦と限つた譯でもないが、一度それ等の巢窟へ飛び込んでは決して墮落せずには居られない、けれど、番頭は明瞭に酌婦とは言はぬ、一單に體よく料理店の女中だといふ、知らぬ女の何とて疑を挿まう、好しや疑

ひを挿んだ所で、番頭の不機嫌な顔色を見ては、氣の弱い女の中々に拒む譯には往かぬ、又拒ませぬやうに勉めて居る、それと言ふのも元々斯かる末路に終らせやうといふのだから、始めは辛抱の出來兼ねる所へ周旋する、戻つて來る、又同じやうな所へ遣る、又戻つて來る、こんなことが二度三度と重つては、女の方でも如何程か氣兼れをする、尤も、幾度往つて幾度戻つて來ても、彼等の義務として別に文句も言はれないのだから、何んの遠慮もないやうなものではあるが、併し番頭は殊更らに膨れ面をする、さう出て來られては困りますとか、忙しい所を度々手數をかけられては堪らんとかと、尤もらしい厭味を言つたり惡口を言ふ、之れが男なら平氣でも居られるけれど、氣の弱い女としてはそれが出來ぬ、濟みませんとか、今度は何んな所でも辛抱をしますとかと、女の方から下手に出る、それを、待ち構ひて居る番頭得たりと附け込んで、今度は遙かに機嫌を取る、世辭をいふ、媚然々々する、何や斯やとお爲めごかしをいふ、怒つたり笑つたり、賺したりなだめたりして、操縦自在、巧みに女を弄するのだから、遂には女も煙に捲かれて、唯々として諾し、戦々として從ひ、茲に全く彼等の毒手に弄られるのが常なのだ。

て、恰度、この女が今しもその毒手にかゝつて居る、されば、僕が見て以つてその前途を氣遣ふのも無理ではなく、能ふべくんばその奸計を知らして女の意を翻ひさせたいのだが、其處には抜目のない番頭、彼等の内幕を知つて居る僕等古參のものには、絶えず注意の眼を放つて、可成新參と古參のものとは言葉を交させぬやうに勉めて居る、のみか、偶そんなことを口走りでもすれば、飜面そのものに當つて、飛んだ復讐や飛んだ冷遇をする、それが怖さに現在それと知りつゝも徒らに氣を揉むばかりで別に施す策がない。

女の未だ決心もせぬ中、番頭は再び上つて來て、じやア早速仕度をなさい、先方の主人はもう待つて居るのですから……と急に促すので、女は仕方なく決心したやうに、傍らの女に默禮して下へ降りたが、店にはその料理店の主人といふ奴、何時の間にか店頭へ來て、女を見ると異樣の眼を以つて見上げ見下して居たが、やがて、番頭と何やら言葉を交した後、女を拉して店を出たが、僕はその後ろ姿の見えなくなるまで、言ふべからざる不快の念を以つて見送つて居た。

間もなく夜になつた、番頭は殘る一人の女を拉して何れにか出て往つたが、暫くして歸つて來たのを見ると、番頭奴何處かで一杯傾けたと見えて、たゞさへ物騒な赤ッ面をいとゞ紅ゐに染めて居る、恐らく女を欺いて蕎麥屋か牛肉屋へでも引ッ張り上げたに違ひがない、番頭奴旨く遣つて居やがるな、とは二階にごろ〳〵して居る野郎共の岡燒であるが、そも〳〵、女を引ッ張り廻す位のことは彼等には如何程でも口實がある、或は目見えに連れて往くとか、奉公先きへ當て見るからお出でなさいとかと、現にその女もその口實の下に連れ出したのだが、好しやそれが事實にしても、途中何や斯やと親切らしく持ちかけて、或は女の歡心を買ひ、或は甘言を以つて種々なる奸計を施すことは言ふまでもない、而もそれが若い女である、二階に居れば淫猥の話を耳にし、出れば番頭に附

け狙はれる、物騒と言ふよりも危険甚しいてはないか。

翌日になつたが、女は何處へも往かぬ、何んな所が希望なのか知らぬが、落ち附いて二階に居る、所へ、又一人の女が遣つて來た、見れば、何物とも知れぬ女であるが、衣類などはお蠶ぐるみて、上には吾妻コートさへ羽折つて居る、のみか、色白の中々の美人て、何うも只物てはないらしい、全體斯かる女が何んのために來るのか殆んど了解も出來ぬのだが、番頭の顔には撼へきれぬ喜悦の色が溢れて居る、話す所は何の用件か低聲て聞き取れないが、暫くすると、不思議や着て居る吾妻コートは番頭の手に渡された、番頭はそれを抱えて慌てゝ出て往つたが、間もなく女の手に渡したのは若干の札、見ると、女は驚いた顔附きをして、『たッた之れッぱかし……』、と意外らしい面色なのだが、番頭へこ/\頭を下げて、『へエ、何うも屆きません、隨分掛け合つて見ましたが承知しませんので……』、無論、その金は保證金か手數料の爲めてもあらうが、併し、女の驚くのも無理てはない、屑屋の手に踏み倒しをさせても五六圓は確かな所へ、渡したのは僅かに四枚の紙幣なのだ、が、之れには理由がある、元來、彼等は之等の場合の爲めに質屋の通ひを備へて置く、勿論名義は彼等のものてあるから、客の典物は番頭自身携へて往つて、可成安價に入れて置く、五圓を貸すと言つても漸く三圓位しか借りて來ない、それと言ふのも置主の客といふのが、多く窮境に陷つて居るので、一旦奉公しては容易に出て來られぬとか、又は諸所に流浪する爲め、或は質物を忘れて居るとか受け出す金がないとかて、大概は流すことになつて居るのが普通なのだから、そんな場合を慮つて、期限が來れば彼等自身遠慮もなく受け出し、それを古着屋に賣り飛ばして若干の利を得て居るのだが、言はゞ人の窮境を附け込んで飽までも膏血を絞るのである。

時ならぬ好餌が跳び込だので、番頭は取るものも取り敢へず、爲ることもせずに、慌てゝ何處へやら飛び出したが、恐らく奉公口を探れ廻るのでもあらう、而も、番頭が何を措いても飛び出す程てあるから、その口の決して尋常てないことが分る、暫らくすると、番頭は一人の男を伴ふて來たが、こは平生往來して居る同業者の一人なのだ、玆に至つて事態いよ/\容易てない、何となれば、獨力に遣りかねる仕事は、大概同業者と協力して、成効の上は利益を半ばするのが彼等の慣習てある、果然、今度は三人膝を關めて何やら密談して居たが、談纏つたと見えて、又三人連立つて何れへか去つた、後には二階の鬪燒遊、この珍しき出來事に種々なる噂さをし合つて居たが、やがて、夕刻になつて歸つて來た番頭は平生になく嬉然々々して居るのだ、二階の一人、彼れは何物かと不思議がつて聞けば、番頭笑ひながら『彼れて妾になりたいといふのだから世は樣々さ』、聞くもの更らに意外の感をしたが『癪に障るじやないか、彼んな女を妾になどする奴は……』と中の一人が憤慨すれば、番頭冷然として『なアに旦那樣は西洋人てさア……』

美人は忽ち消えたが、消えないのは例の殘つた女、その後二三日も過ぎても依然として居る、更らに不思議なのは、番頭のこの女に對する態

度が決して普通の客に對する態度ではない、岡燒連例に依つて妬いて曰く、『彼の女は何うも番頭と怪しいぞ……』、が、その女、怪しい女が更らに怪しいことには、その後二三日經て忽然何れにか消えた、岡燒連いとど不審の眉を聚めたのだが、獨り僕のみはその消息を知つた、外でもない、僕は遂に桂庵の二階を去つて福富町の郵便局へ追ひ遣られてから、或る日ポストを開函するべく淫賣窟として有名なる梅ヶ枝町附近を通行すれば、何んぞ知らん、御神燈の吊されたる店頭にその女が極り惡さうに坐つて居るのを見た。

筆は玆に止めて置く、止めたくないが例に依つて紙數に限りがある、讀者之を讀んで或はその小說的なるに信を措かぬか知れぬが、僕はその疑ひを解かんが爲め、斯かる罪惡を犯しつゝあるこの桂庵は、横濱の停車場を下りて一直線に一二町、即ち尾上町は左側なる店の小さき割に家根看板のいとゞ大袈裟に揭げられてあることだけを素ツぱ拔いて置く。

新刊批評

▲喜劇七草　巖谷小波著　金尾文淵堂發行

茶番以外、「にわか」以外、上品なる喜劇を供給せんとの目的にて西洋ものの飜案七篇を收めたり。「やかず對」最も評判よきが如きも、吾輩は其餘りに飜譯臭の甚しく、且つ餘りに捻り過ぐるやうなるを厭ふ。「知一」「化の皮」「理病娘」の如きの自然にしてアッサリしたるを取る　挿畫は何人の筆なるや甚だ俗惡也。何故樂天の畫にても入れざりしや訝し。要するに吾輩は此篇を以て未だ甚だ成功せるものと認むるを得ざる也。（定價八十錢）

▲寫實小說コブシ（前篇）　小杉天外著　章光閣發行

コブシ一度「讀賣」に連載せられてより褒貶の聲甚だ高し、此篇に收むるは十七章九十五回にして主人公政男の退學處分を以て終る吾輩をして一言に評せしむれば、少しく砂糖が利き過ぎたりといはん。

新聞小說を讀む女子供には是非共砂糖を入れざるべからずとは天外氏の意見にして一應尤の事と思はるゝも、此篇を讀めば氏は一般に餘り甘いものを好かぬ時勢に向ひつゝあることを看過したるやうに思はる。又吾輩の此篇に慊らず思ふ所は寫實小說と銘を打ちながら、氏の從來の作物に比して寫實的ならざる描寫の處々に散見し、說明的なる箇所の往々目に附くが如きこと是れ也。又地の文には「耳に鳴る風の音に紛れて、何處から別れたも知らずに居たが、山間から同伴に下りて來た河とは何時の間にか遠く離れ」の如き面白き敍述もあれど、又「吸椀は小兒なら顏も洗へる大きなのに昨日過までは、野山の嵐の中を翔廻つた鴫が、團子となつて露の底に轉げて居る」などいふ感心せざるものもあり。

以上は此篇に對する我輩の不平なるが、然し其妙所佳所に至ては氏獨特の技を擅まにし、素より他人の追從を容さゞる所少からず例へば第一の（一）の終りの馬夫の描寫先づ活けるが如しといふべく、第五の（三）

の終りの政男と義兄覺治との暗中組打の描寫、肉動き骨鳴りて、怒罵憤闘の音頻りに耳朶を打つを覺ふ。又第六の（一）の姉と政男の問答もよく、第十二の（六）（七）に於ける鐵也の描寫もよし。殊に第十三の（三）の描寫の如きは壓卷の文字にして「直ぐ耳近く、ガア〳〵と雨蛙が鳴出した」の如き何等の才筆ぞ。若し描寫の力量よりいへば、氏は益々發達の道程にあることを示し、之を現代の何人に比するも斷然として頭角を拔く。たゞ第七の（一）に於ける驛長室の對話の如きは殆んど無味の文字にして、却てなくもがなと思ふ。要するに此篇は長篇の一部にして未だ此れのみにて輕々しく其價値を定むべからざるも、料理極めて結構なるも砂糖は少しく利き過ぎたりといふの適當なるを覺ふ。挿畫は岡田三郎助、小林鍾吉、中澤弘光、三氏の筆に成り極めて立派なる本也。若し夫れ其精細なる批評に至ては我輩が遠からず公にせんと欲する「小杉天外論」中に書く積なり。（哲生）（定價八十錢）

▲理想の人

安部磯雄著
金尾文淵堂發行

安部磯雄氏は常にゼントルマンたるを理想として居る人である。氏の談話も、氏の演説も、氏の文章も皆此ゼントルマン的といふ一語の中に包含することが出來やうと思ふ。此篇氏の理想を遺憾なく描き出したもので、此篇に說く所を行へば立派なるゼントルマンたるを得るのである。穩健着實なる理想を平明簡易なる文字で記述したもの、我社會の何人にも極めて有益な書である、編を分つこと五、倫理、宗教、教育、家庭、社會、とし、各編又數章より成て居る此種の著作中最も秩序的にして最も眞面目なるものである。我輩が著者を以て我國のスマイルスと評したいと思ふのも必ずしも溢美ではあるまい。切に江湖の熱讀を推奬する。（定價七十錢）

▲病間錄批評集

金尾文淵堂發行

綱島梁川氏の「病間錄」に對して新聞雜誌にあらはれたる總ての批評を集めたるもの也。「病間錄」の一書が如何に我思想界に映じたるかを見んには極めて便利也。（定價廿五錢）

▲新案當用日記

柳川春葉編
春陽堂發行

製本極めて美麗にして紙質亦よく、處々に吸取紙をつけてペンにて書く人の便を計れり。全體の意匠斬新にして所謂新案の名に背かず。附錄として「明治小說史」及び「明治小說年表」を添へたり。「小說史」の方は寥々たる短篇にて見るに足らざれど「年表」の方は廿八年以降作物の主なるもの千有餘篇を載せて極めて重寶也。文士の編したる丈け文學趣味のある人には此上もなき日記也。（定價六拾五錢）

▲都市

三宅磐著
金尾文淵堂發行

「現に都市生活を爲しつゝある一千萬の同胞に向つて、都市生活の理想と此理想を現實にする上に必要なる經營とを說述し、以て其の共同生活

に對する注意を喚起せんと欲して」作られたるもの也。極めて眞面目なる著作也。（定價拾五錢）

▲愛の進化

文學士内田旭著　光風館發行

社會學の立場より、愛の進化を究め、特に最も男女の愛に向て精細なる學理的研究を試みたり。「戀愛」に關する著作少からずと雖も、此篇の如く學理的にして眞摯なるは稀ならん。たゞ全體の調子何となく飜譯的にして感興饒かなる筆致の乏しきを憾む。（定價五拾錢）

▲竹影集

饗庭篁村著　日高有倫堂發行

上篇「虚空塵」中篇「雲の峯」下篇「霧の海」及び小說「山懐」を收む。氏一流の洒落輕妙なる筆致、なか〳〵に捨て難き所もあれど、何となく時代晩れなる如き感あるは止むを得ざる數ならんか。（定價七十錢）

▲入峽記

阿部弘藏著　景德院發行

入峽記一名武田氏末路考といふ。歷史上興味少からざる武田氏末路の事蹟につき、考證したるもの也。歷史家の參考となるべし。（定價拾六錢）

▲社會研究 高原生活

伊藤銀月著　日高有倫堂發行

衰へたる精力を恢復して再び社會に打て出る戰鬪準備をなすべく富士の裾野に於て修養して居る一隱士と逢て「御殿場と太郎坊との中間なる滑河原を心核として、周圍數里に展開する富士の裾野の追々開け行くにつれて俗惡の空氣の入り來るべきを厭ひ、如何にして之を比較的善美に人間化するを得べきかを談ずる銀月氏。氏に自己の生活、自己の感想、及び四季折々の裾野の風光を物語る一隱士。裾野に理想的の人物を以て理想的小社會を作らんとする銀月氏の計畫。」が科學的知識と詩情と調和せられた達者な筆を以て小說的に書かれたのが此「高原生活」である。附錄的に嘗て本誌上にあらはれた「我觀富士」と外に一篇「雄鹿島及入郎湖」を添へてある。銀月氏は極めて多方面の人であるが嘗て夢蝶閑人の評した如く「社會及人間」の觀察者として最も異彩を放つだらうと思ふ。此篇は如何にもよく「自然と人間」との關涉を書いて居る。一度讀み初むれば讀み畢らずに居られぬ面白き書である。今文章の一例を示さう。

此時期（夏）が過ぎて、石室の主どもが、稼業道具を馬の背に積んで降りて來ると、間もなく山の色が少しづゝ變つて來る。幾隊の渡り鳥が波のやうに高低して、風の音より激しく空氣を切る。富士山は少し遠くなつたやうで、目覺ましい程鮮やかになり（中略）下駄でたゝく地面の響きも別になつたやうです。空氣は水晶よりも透明になつて、夜など、一里餘りも隔てた燈火は煌々と輝いて手に取る如く見え、星の燦めきの鮮やかで美しいこと、殆んど眩しい程です。確かに秋が來たのですな。

僕は斯樣な面白い文章を書き得る人は今の文壇に數多くあるまいと思ふ（哲生）（定價四十錢）

▲懺悔錄

清澤滿之著
金尾文淵堂發行

一派の人に一代の師表と仰がるゝ程人格の淸高なる故淸澤滿之氏の文章を集めたものである。「懺悔錄」といふのは此書全體の內容に當て箝まるものでない。只卷中の一篇「在床懺悔錄」から取つたもので、些か名によつて世間の好奇心を釣らうとする趣ある如く見ゆるは此種の著作に面白くないことゝ思ふ。最も讀むべきは卷頭の「臘扇日乘」及び卷末の「有限無限錄」である。吾人は此書を以て綱島氏の「病間錄」に次で味ふべき耳書と信ずる。精讀の上には少しく意見を述べて見たいとも思うて居る。（哲生）（定價七十錢）

▲女子書簡文

服部躬治著
寶文館藏版

一筆示し上げまゐらせ候さてぞやと書き起されば、義理の缺くるが如き從來の文體、形式も斯う迄型に嵌つては困りものなり、此編、さるお定まりの冐頭語や、結尾語には一切頓着なく、意達し情盡すを主として極めて自由に書き下されたる消息文約百三十を收め、添ゆるに書翰日記一篇を以てす、全體の用語に於て中古ぶりのもの勝ちたる樣なれど、それも優美を旨とある女性の文とあれば詮義もなかるべきか、數ある文中俗語の遣ひ樣つきぐ\〵しからぬもあり、例へは「あげくにむさいハンヤチなんか忘れまして」。「もとからあなた皺ばかりよ火のしかけて下すつても延びますものか」の如き、又文體の調和背はれぬ所あり、例へば候文の中に「うちやり玉へよ」、「二合ばかり炒りしのみよ」の如き、拾はゞ

尙はあるべし、左れど全體に於て助辭の運用に重きを置き、文字簡にして餘趣多きをと勉められたる處、最も取るべき値あり、新樣と名のるに難なかるべきを信ず。（定價金四十五錢）

▲新樣青年書翰文

服部躬治著
寶文館藏版

前の新樣女子書簡文と著者を同くするもの、其用意に於て、其體裁に於て、素より異なり得べき筈はなし、唯前者には優雅の點を後者には剛健の點を勝たしめんと勉められたる迄なり、有るがまゝの情趣を有るがまゝに、極めて奔放に、極めて暢達に語らんとせられたるはよけれど、前の著にもいひたる如く語の遣ひ樣妥當を缺くものある、折々見る目痛き心地す、「何々つゝ候」とか、「期待しけんの機會あるべけれど」といふ類を初めとし、更に日記文中、霜柱の條に見出てたる「月白けたり、霜前、」之まではよし、「微、動かずもの惻々と寢卷のまゝの膚に戰く——霜柱」又は夏雲の條に見出てたる、「咫尺は既に蹈り候」、には閉口したり、更に「宇に物なし、宙に體なし」とある、之は言ふ迄もなく「宇宙に一物體なし」を兩分したる積りなるらめど、修辭上怪しきものならずや、以上は唯その一例なり、此かる文體を青年の軌範とせんこと吾人には背はれず、全體に於ては取るべき佳處尠からずとはいへ、斯くも瑕瑾と見らるゝ節多きは憾むべし（定價金四十五錢）

▲伏屋の曙

座古愛子著
警醒社書店發行

孤獨に生れて貧苦に育ち、人並々の敎育も受ければ高き理想を宿すべくもあらず、曾ては氏なくして玉の輿に乘る舞妓拍子の榮華をも羨び

西東にさ迷へたる一少婦座古愛子が、卒然手足も動かぬ不治の難症に罹り、今更ならぬ運命の悲酸に泣き沈む折柄、端なく奥江牧師の愛の涙に洗はれて神を見るに至り、肉には失ひて靈には得たる經歴を、女史自ら筆を執りて、感謝に滿ちたる今の境遇より寫したるもの、添ふるに歌、句、韻文あり。(定價金四十錢)

▲石人錄

細越夏村著
堺屋石割書店發行

熱嘲痛罵の人必ずしも眞摯の人たらず、必ずしも誠實の人たらず、世には往々熱嘲と痛罵とに金看板を揭げて自己の估價を高めんと計る者あり、斯かるものは案外藁草履て頭を毆てられても金色燦たる指輪の前には腰を七重に曲ぐる奴なり、其ん所其處らに頗る見受くる奴なり、石人錄一篇僅々百七十二頁の小册子、一握して讀むべしと雖も又些の閑文字を着けず、言々血を吐き句々涙を注ぐ、血は燃えて情を語り、涙は冷えて理を語るの差を見れど、要するに著者は眞摯の人のみ、誠實の人のみ、而から情に走らんか理に支えられ、理に沈まんか情に推さるゝの人ならん．されば熱嘲も自らにして出て痛罵も自らにして湧く、熱嘲にも生命あり痛罵にも生命あり、彼の口腹徒らに大にして内に些子見を秘むるなき吹流し者流とは匆論選を異にす、試に見よ、その力ある人格の必要を論じ、嗚呼學究者流は自動百科全書のみ、畢竟學府の陳列品に過ぎず、價値ある人格には非るなりと說き來つて、「宜なり數十金は能く彼等を購ふて、之を一大學の講座より他大學の其れに移し置くことを得」と稱し、結婚問題を論じて父兄の干渉を痛擊するや、相愛結婚たらずんば、男子も女子も憐むべく呪はれたるものなりと說き來り、「彼等は儀式を通じて姦淫を許されたるものなればなり」と結び更に博愛を論じては極端なる例を引き、「一死、相愛の間に在つて易々たるのみ、吾人は彼等を迫害して天外へ向つて去らしむべきか、はた、又彼等に同情して彼等をして地上に美しき和合の影を飾らしむべきか」と厲聲する傍らに、氏は文藝を論じては、「絕對自我を謳歌する文藝は人の子を害ふこと最も酷し、吾人は社會の治安を保持し、思潮の溫健を計成せんが爲に斯ゝる文藝を排除せざる能はず」と稱し、更に一步を進めて「我等が警視廳の當局者よ、活眼唾手、ます〳〵、現下の病文學を迫害して可なり、否排去せざるべからず」と怒號し、「更に意力の重んずべきを怒じては、吾人起つて事業に當らんとす須らく先づ木强漢たらざるべからず、吾人は優美なるべからず、吾人は過怒なるべからず」と斷言す、氏は果然情の人なり、而して又理の人なり、予は敢て氏の所見を以て必ずしも精醇なりとはいはず、即ち精神感應を信じ宿命說を信じ、所論往々神秘に陷るあり、絕對的動力主義の盛によりては、「惡人でも國家的な大惡人ならば感化力の無い良民よりは社會の寶である」と放語するが如き之なり、されど如何なる奇矯の語、怪辟の說にも必ず其れを築成するに聽くべきの條理を具ふカーライルの嘲罵必ずしも中正を保たざるは言ふまでもなきも、而から輕浮の思潮を率て沈着ならしむるの効あるを思へば、之も亦一讀を惜むべからざるものと信ず。(定價金三十五錢)

御寄贈を受けたる書籍少からざれど頁數に制限あれば新年號に於て批評すべし

編輯だより

▲お正月も早や眼の前に迫り候。月日の早きこと今更ながら打ち驚かれ申候。さりながら此間になしたる我誌の發展の著しきを考ふれば、月日の力の大なるにも亦驚かざるを得ず候。由來、材料の精選と趣味の高尙とは本誌の特色、こは世に已に定評もあることに候へば吾人は何事も申すまじく候。只一言いたしたきは發行部數に於ても非常なる勢を以て增加し、今や本年初頭のそれに比して約二倍に近く、斯界に於ける一大勢力と相成りつゝあることに候。吾人は江湖愛讀者諸君の眷遇の厚きを謝すると同時に、益々吾人の責任の大なるを感ぜざる能はず候。吾人學淺くして才疎なれども志は則ちあり。年改まると共に駑駘に鞭して奮勵せんことを期し居り候。

▲卷頭の豫告にも見え候通り、本誌は「新年號」より一層頁數を增加する計畫に候。これは從來の頁數にては到底四方より集り來る佳什名作を網羅する能はざるが爲めに候。この一事亦本誌隆盛の勢を示すに足るものと存じ候。それについて一つ讀者にお斷りせざるべからざること有之候。即ち本誌値上げの一件に候。近來物價騰貴の趨勢に連れて、紙代、組代等著くし上り、且つ本誌は先々月來紙質の改頁を行へたることゝて、一部の出來上り費用急に增加したりしに拘らず、敢て値上げをなさず、偏へに讀者諸君の眷遇に酬え來りしが、右の如く頁數を增加する一段に至ては、どうしても從來の定價を維持すること能はず、新年號より少しく値上げをなさゞるべからざる儀と相成候。然し値上げをすれば、値上げに應ずる丈けの――否値上げ以上の改頁は屹度いたすべく候。決して讀者の御迷惑になるやうなことはいたさず候。讀者諸君御安心あつて可也。

▲新年號より實行する各欄の改廢について一言すれば、從來の「雜錄」は名を「觀苑」と改め、益々趣味多き材料を網羅するに勉むべく候。名の如きはどうでもよきやうにも思はれ候へ共「雜錄」といへば何となく他雜誌のそれと紛らはしく相成り、本誌獨得の好材料も或は名によつて看過せらるゝ恐もなきにあらじと存じ、かくは改むることゝいたし申候。又「漫評」「社會研究」「餘材」等の各欄は一括して名を「雜俎」と附し、同人都て奇警なる觀察、興味多き記事を掲げ、且つ投書中の最も面白きものを載すべく候。かく三欄を合して一としたるは、欄の分け方餘りに細々しくして煩はしく感ぜられたる故に候。

▲「評論」及び「文藝時觀」の二欄は大に擴張して、盛んに氣焰を吐き、縱横に論議を鬪はす積りに候。然し出ぬ前の廣告は益なし。乞ふ、新年號よりの誌上に徵せられんことを。

▲「秋期大附錄號」に掲載すべくして掲載する能はざりし國木田獨歩氏の苦心の作「戀を戀する人」はいよ〱新年號の小說欄を飾るべく候。獨歩氏の作物を一讀したる人は、其題名已に氏のエッセンスをエッキスにしたる如きを感ぜらるべく候。吾人は我丁未文壇の必らず此「戀を戀する人」の明星によつて明け初むべきを信ずるものに候。

▲小栗風葉、德田秋聲、生田葵山の三氏は皆其新作を寄稿せらるべきことを快諾せられ候。題目は未だ分らず候へ共、三氏皆是れ一意向上の大家、一作出づる毎に淸新の氣を漲らし、發展の跡を示し來られしよりして之を推せば、獨歩氏の作物と相待て本誌年頭の光彩を發揮するに餘りあるは勿論、又是れ新春の評壇をして驚喚せしむるに足る作物なるべきを疑はず候。

▲其他「公論欄」及び「觀苑欄」に寄稿せらるべき大家十數名、實に卷頭の豫告に見らるゝ通りの盛觀に候。已に其題目及び內容の明かなるも有之候へ共、いはぬが花と存じ、少し罪深き業ながら、發行迄秘密に附することゝいたし候。何事も發行の上にて御批判の程願上候。頓首（社末校正小僧）

前號要目

社論	
擧國一致益々急要ならざるか	丘淺治郎
世界語の將來	吳秀三
「見神」及「自稱神佛」の精神病學觀	福本日南
清廷の大謬見	富士川游
自殺問題	戸川秋骨
歐米旅行見聞錄	和田垣謙三
細長主義と太短主義	村山鳥逕
瞥見佇想錄	
小說「行火」	佐藤紅綠

淸艷の筆、深刻の想、此作一たび出て、紅綠氏の名忽ち江湖に喧傳せらる、次に重なる都下新聞雜誌の批評を拔載す、以て其內容如何を知れ。

◉慶應義塾學報評　殊に叙景はお手のものだけうまいものである。林檎畑の朝景色や、神代に似たる田園の風光が、まるで名畫の繪卷物を展べたやうに讀者の眼前に髣髴される、それにもまして作中の人物――佐吾十にしろ與茂作爺にしろ、如何にも朴訥な、質樸な性格が作中に活躍して居る（中畧）十一月の文壇における傑作として、予は佐藤紅綠君の「行火」を推薦する。

◉讀賣新聞評　中央公論が近來文藝の逸作を多く網羅することは、やゝ往年の國民の友に似、なほ反省雜誌の衣鉢があるといひ得る、其紙上注目を惹く文學的作品を見出すものも亦之が爲か、此月のに佐藤紅綠の短篇行火がある（中畧）吾輩は行火を讀んで、恰もヘヤソオーンの「セ、オールド、マンス」の嚴正と林檎とに自然と人生とを白描した風神を髣髴として、また淸新の感興を催した。

其他、萬朝報等の多くに好評嘖々たるもの、之を讀まずんば以て丙午文壇を語るに足らず▲今や殘部僅少大至急御注文なくば折角の御注文にも應じ難からんを恐る。

第十號秋期大附錄號要目

社論	
本欄には 帝都の財界觀政界觀及社會觀	永井一孝
杜選なる圖書（雜錄）	大森冬夏評
新聞紙の橋渡（小說）	
オルガンの音色（美文）	小川未明
あり其他	
死刑廢止論（論文）法學博士	小河滋次郎
大附錄における 二百十日（小說）	夏目漱石
近代思想の趨勢（論文）	金子筑水
家畜（小說）	島崎藤村
一燈錄（感想錄）	綱島梁川
入鄉記（小說）	國木田獨步
平政子論（論文）	山路愛山

等最も金玉の文字と稱せらる平常に三倍の發行部數も昔賣れ盡して殘本僅に七部餘のものは大至急御申込あれ本號に限り特價郵稅とも三十三錢

此廣告により御申込の方は中央公論に依る旨御附記をこふ

南勢新報社長村上東洲先生序▲武桃庵居士著

◉破邪顯正 **開運秘鑑**

菊大版全一册價三十錢郵稅四錢

内容

槪目▲緒言▲運命は神授也▲運命照觀の淨玻璃鏡▲人生觀死生觀▲神意及神力▲神力の支配及成敗▲人生運命觀▲人間一代の運命は生れたる時に定まる▲壽命病痾災難奇福奇過奇緣嫉妬死亡▲人間罪惡觀▲自殺觀▲情死觀▲交際觀▲開運の實鍵▲處世運命觀▲立志學問修業就職適業轉業結緣和合不和合離緣再緣▲運命雜觀▲家居轉居旅立門出願事勝負事富籤▲願望成就幸福圓滿安心立命▲附錄卜筮排斥論

本書は著者が入禪冥想の餘神授の靈鏡は映發したる光明也眞に幽明に出入し三世を透觀す勿疑惑非卜非占宗敎以外之宗敎也哲學以外之哲學也神授之妙諦也

發行所 伊勢國多氣郡相可村 達摩堂

振替貯金口座加入

反省社は**中央公論**讀者諸君の**便利**を謀り**郵便振替貯金の口座**に加入致居候**拂込用紙**は何れの郵便局にても**無料**にて渡し呉れ可申候

無料安全送金法

但此法により拂込まんとせらるるときは登記料金貳錢を加えられんことを希ふ

口座番號 **三十四番** 加入名義 **反省社**

青柳有美君著

有美道

製本既成

有美夫人題字 市川女寅閣下扮裝寫眞六枚入

紙數三百七十五頁 正價四拾五錢 郵稅六錢

著者有美京を辭して郷里の中學に修身の先生たると玆に一年有半。意氣愈々旺盛滿天下の後入齊が製本を飾り紙質を美にし陳腐なる所見を高く賣り付けて耻づる色なきに憤慨し紙質と製本とに一新軸機を出し先人未發の新論新説を納め半圓未滿の安價にて賣り出だせるもの即本書也人情の機微と哲學藝術宗敎に關する卓拔なる所見とは悉く此のうちに網羅せられて餘す無し眞にこれ全世界の奇書宇宙外の宇宙なり永く有美の文に接せざるもの一讀必ずや快哉を叫ぶべく再讀その所見の非凡にして當世に一頭地を拔くものあるに驚かむ

目次

發兌元 東京市日本橋區箔屋町十四番地 **丸山舍書店**

關東大賣捌所

東京神田表神保町	東京堂
仝　神田裏神保町	上田屋
仝　京橋銀座四	東海堂
仝　日本橋呉服町	北隆館
仝　本郷本富士町	盛春堂
仝　京橋區鎗屋町	良明堂

關西大賣捌所

大阪備後町	盛文館
仝　京町堀	太華堂
京都佛光寺	東枝書肆

中央公論廣告料

一行(五號文字二十四字詰)	一回	金貳拾錢
四分の一頁	一回	金貳圓五拾錢
半頁	一回	金四圓
一頁	一回	金八圓
表紙の二三四一頁	一回	金拾五圓

廣告一手取扱　神田千代田町　博報堂

中央公論定價表

一冊	金拾五錢
六冊	金八拾五錢
十二冊	金壹圓六十五錢

外に郵税一部一錢宛

● 但海外(清國は本邦郵便局所在地を除く)は一部郵税六錢を要す

送金注意

一 郵便爲替は受取人指定欄へ必ず弊社町名幷に社名を記し拂渡局所を**東京駒込**と指定せられたし

一 弊社は**振替貯金三十四番**に加入いたし居り候此規則により御送金の方は登記料貳錢を必ず加えられたく候

一 郵券代用の場合は必ず壹割增のこと

一 前金切の節は帶封に朱書いたすべきに付早速拂込まれたし然らされは其號限にて發送を止むべし

一 雜誌の發送を以て領收の證といたすべきに付別に領收證を望まるゝ向は返信料を添えられたし

明治三十九年十一月廿七日印刷
明治三十九年十二月一日發行　(禁轉載)

發行兼編輯人　武田頴松
印刷人　清水金右衛門

東京市本郷區駒込西片町十番地
發行所(電話下谷九一九)　反省社

東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
印刷所　秀英舍第一工場

明治三十年一月二十九日第三種郵便物認可

銀製洋盃及木盃



紀念御贈與品若くは御懸賞用洋盃も亦誠實を旨とし御高需に應じ申すべく尚ほ木盃の儀は多年四方の御用達し居り品質の良好なると代價の低廉なるとは御愛顧各位の御確認遊ばさせられ候處に御座候是亦多少とも御注文被下度候

- 一　七圓五十錢也　同　徑三寸丸　同　目方正味二十五匁付
- 一　金拾圓九拾錢也　同　徑三寸五分丸　同　目方正味四十匁付
- 一　金拾參圓貳拾錢也　同　徑四寸丸　同　目方正味五十匁付
- 一　金拾六圓五拾錢也　同　徑四寸五分丸　同　目方正味六十五匁付
- 一　金貳拾壹圓八拾錢也　同　徑五寸丸　同　目方九十匁付

三ッ組ノ部

- 一　金拾貳圓六拾錢也　純銀製徑二寸五分丸盃三ッ組無地盃　上等桐箱及袱紗付目方正味卅八匁付
- 一　金拾七圓貳拾錢也　同　徑三寸丸　同　同　目方正味五十五匁付
- 一　金貳拾壹圓八拾錢也　同　徑三寸五分丸　同　同　目方正味八十匁付
- 一　金參拾壹圓也　同　徑四寸丸　同　同　目方正味百卅匁付
- 一　金四拾圓八拾錢也　同　徑四寸五分丸　同　同　目方正味百八十匁付
- 一　金五拾壹圓九拾錢也　同　徑五寸丸　同　同　目方正味二百卅匁付

〔定紋彫刻　一個　金壹圓五拾錢〕

〔文字彫刻　一字　金拾　錢〕
〔大字彫刻　一字　金七拾錢〕

其他御好に依り彫刻類迅速製作貴命に應じ可申候

貴金屬美術袋物類同裝飾品
貴金屬美術婦人小間物類同裝飾品
金銀時計類同附屬品類

東京市下谷區池之端仲町二十九番地

商玉寶堂

〔電話本局特九六五　一二四四〕